

靈界物語 第二卷 如意寶珠 申の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第二一卷』愛善世界社

1997(平成9)年07月12日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

## 目次

序文 じよぶん

凡例 はんれい

總説 そうせつ

第一篇 千辛萬苦 せんしんばんく

第一章 高春山 たかはるやま（六七五）

第二章 夢ゆめの懸橋かけはし〔六七六〕

第三章 月休殿げつきうでん〔六七七〕

第四章 砂利喰じやりくひ〔六七八〕

第五章 言ことばの疵きず〔六七九〕

第二篇 是生滅法ぜしやうめつぽふ

第六章 小杉こすぎの森もり〔六八〇〕

第七章 誠まことの寶たから〔六八一〕

第八章 津田つだの湖うみ〔六八二〕

第九章 改悟かいごの酬むくい〔六八三〕

第三篇 男女共權だんぢよきようけん

第一〇章 女權擴張ぢよけんくわくちやう〔六八四〕

第一章 鬼娘おにむすめ〔六八五〕

第二章 奇くしびの女をんな〔六八六〕

第三章 夢ゆめの女をんな〔六八七〕

第四章 恩愛おんあいの淚なみだ〔六八八〕

第四篇 反復無常はんぷくむじやう

第一章 化地藏ばけぢざう〔六八九〕

第六章 約束履行やくそくりかう〔六九〇〕

第七章 酒さけの息いき〔六九一〕

第八章 解決かいけつ〔六九二〕

〕  
〕  
〕  
〕  
〕  
〕  
〕  
〕  
〕  
〕

## 序文

時代に順應せよとは、今日上流に立てる床次内相の訓戒であつた。併し乍ら日進月歩の今日順應も結構だが、併し無暗に外國の行方許りに順應してはならない。世界の趨勢に省み、建國の精神に背馳せない様に、取捨選擇するの必要がありませう。世界の大勢に順應しつつ國民を指導するのが、治者や學者の最も注意すべき義務であると思ふ。瑞月が神命に依りて、此物語を口述するのも亦今日一般の人々、即ち老若男女貴賤智愚の區別なく諒解出來得るやうにと、卑近な言葉を使つて、多數者の知識の程度に順應しつつ、神意の一部を發表指導する考へであります。故に所謂智者學者の眼より見れば、實に約らない物語たることは、口述者に於ては百も千も承知の上のことです。要するに此物語は、神、幽、現三界の状況や、神の大御心の一端や、神理の片鱗を描き出したに過ぎませぬ。讀者幸ひに諒せられむ事を希望致します。

大正十一年五月二十一日 舊四月廿五日

凡例

口述著者 王仁識

一、本巻の原稿は全部口述者の周到なる校閲を経たものであります。お蔭で校正上のいろいろな注意に就て得る所がありました。

一、既刊第二十二巻及び其他の巻の「百足姫」はオサムシと訓すべきですから、「蜈蚣姫」となるべきでしたのを、活字が無かつたので已むを得ず「百足姫」としておきました。本巻より全部「蜈蚣姫」と訂正しておきました。

一、「物語」の中に屢「言霊【戦】を發射する」といふ言葉が現はれて來ますが、それは「言霊【線】を發射する」の誤りです。が、「言霊戦に参加する」といふ如き場合は無論「言霊【戦】」でよい譯です。

一、「……であります」とか「……であるんだ」とかいふ場合の「ん」は本巻より全部「……でありますぬ」又は「……であるのだ」に訂正しましたが、讀む

時には矢張り「……でありませぬ」……であるんだ」といふ風に讀むのださうです。

大正十二年三月

編者識

總説

靈界は想念の世界であつて、無限に廣大なる精靈世界である。現實世界は凡て神靈世界の移寫であり、又縮圖である。靈界の眞象をうつしたのが、現界、即ち自然界である。故に現界を稱してウツシ世と言ふのである。例之一萬三千尺の富士山を僅か二寸四方位の寫眞にうつした様なもので、その寫眞が所謂現界即ちウツシ世である。寫眞の不二山は極めて小さいものだが、其實物は世人の知る如く、駿、甲、武三國にまたがった大高山であるが如く、神靈界は到底現界人の夢想だになし得ざる廣大なものである。僅か一間四方位の神社の内陣でも、靈界には殆ど現界人の眼で見る十里四方位はあるのである。凡て現實界の事物は、何



れも神靈界の移寫であるからである。僅に一尺足らずの小さい祭壇にも、八百萬の神々や又は祖先の神靈が餘り狹隘を感じ玉はずして鎮まり給ふのは、凡て神靈は情動想念の世界なるが故に、自由自在に想念の延長を爲し得るが故である。三尺四方位の祠を建てておいて下津岩根に大宮柱太敷立、高天原に千木高知りて云々と祝詞を奏上するのも、少し許りの供物を獻じて、横山の如く八足の机代に置足らはして奉る云々とある祝詞の意義も、決して虚偽ではない。凡て現界はカク即ち形の世界であるから、その祠も供物も前に述べた不二山の寫眞に比すべきものであつて、神靈界にあつては極めて立派な祠が建てられ、又八百萬の神々が知食しても不足を告げない程の供物となつて居るのである。凡て世界は靈界が主で現界即ち形體界が従である。一切萬事が靈主體從的に組織されてあるのが、宇宙の眞相で大神の御經綸である。現實界より外に神靈界の儼然として存在する事を知らない人が斯んな説を聞いたならば定めて一笑に付して顧みないであります。無限絶對無始無終の靈界の事象は、極限された現界に住む人間の智力では、到底會得する事は出来ないでせう。

この物語は、現、幽、神、三界を一貫し、過去と現在未來を透徹したるが故に、  
讀む人々に由つて種々と批評が出るでせうが、須らく現實界を従とし、神靈界を  
主として御熟讀あらば、幾分か其眞相を掴む事が出来るであらうと思ひます。  
惟神靈幸倍坐世。

大正十一年五月廿一日

於松雲閣 口述著者識

第一篇 千辛萬苦

第一章 高春山（六七五）

雲を壓して聳り立つ  
高春山の山頂に

バラモン教を開きたる  
大國別に憑依せる

八岐大蛇の分靈  
醜の曲靈が割據して

山野河海を睥睨し  
大江の山と三國嶽

六甲山と相俟つて  
冷たき魔風を吹き送り

蜈蚣の姫の手下なる  
鷹依姫が朝夕に

心を碎く鳩胸や  
仕組の奥は割れ岩の

膽を煎るこそ恐ろしき。

南に瀬戸の海を控へ、東南に浪速の里を見下ろし、西北東に重疊たる連山を瞰

下する高春山の絶頂に岩窟を作り、バラモン教の一派を建て、アルプス教と稱し、

自轉倒島を飽く迄も、八岐大蛇の勢力圏内に握らむと、晝夜心を悩まして居た。

山麓には細長き津田の湖が横たはつてゐる。此湖水には大蛇の分身たる數多の蛇

神潛伏して、日夜邪氣を吐き出し、地上の空氣を腐爛せしめつつあつた。高姫、

黒姫は波斯の國北山村の本山を捨て蝶蝶別、魔我彦をして後を守らしめおき、三  
五教に歸順したる改心の證據として、アルプス教の鷹依姫を言向け和さむと、波  
斯の國より乗り來れる飛行船に乗り、高春山の山麓に着いた。これより二人は巡  
禮姿に身を變じ、高春山の鷹依姫が岩窟に進まむと、壁を立てたる如き高山を登  
り行く。

高春山の五合目許りの處に、天の森と云ふ巨岩が立並び、中央の樹木鬱蒼たる  
間に、小さき祠がある。之を龍神の宮と云ふ。此龍神は雨風を自由になす神と稱  
へられ、鷹依姫が唯一の守護神として尊敬して居た。それが爲に何人も、此境域  
に近づく事を嚴禁して居た。テーリスタン、カーリンスと云ふ二人の荒男は、此  
龍神の宮を固く警護して居た。二人は巖の上に高軒をかいて寢んで居る。高姫、  
黒姫は漸く此處に登り來り、  
高姫「なんと立派な岩が竝んで居るぢやありませんか。一つ此景色の佳い所で休  
息して行きませう。まだ頂上までは餘程道程がありますから……」  
黒姫「宜しう御座いませう」

と碁盤形の門の戸を押し開け奥に進み入る。

「ア、此處には妙な祠がある。是れが噂に名高い鷹依姫の、雨を降らせ風を起す唯一の武器でせう。一つ改心さしてやりませうか。將を射むとする者は先づ其馬を射よと云ふ事だから、此雨風を起す悪神の眷屬を改心させる方が、近路かも知れませぬなア」

「マア一寸お待ちなさいませ。拙劣に間誤付くと、大風大雨で攻められては困りますから、充分に様子を探つた上、ゆつくりとやらうぢやありませんか」

「そりや黒姫さま、何を仰有る。冠島の金剛不壞の玉を腹に呑み込んだ此高姫、言はば妾の體は如意寶珠も同然、多寡の知れた雨や風を起す龍神位に、何躊躇する事がありますか。お前さまは三五教に歸順してから、チツと變になつたぢやありませんか。イヤ三五教に歸順する以前から高山彦さまに對し、餘程御親切が過ぎたやうですよ。神第一主義をどつかへ遺失し、高山第一、神第二と云ふ様なあなたの態度だから、そんな弱音を吐く様になるのだ。モウ此處へ來たら生命を的に、悪神を改心させて大神様にお目につけ、我々の今迄の御無禮、お氣障り

の謝罪をせなくてはならぬ。謂はば千騎一騎の性念場だ。チツとしつかりしなさらぬかい」

「ハイハイ、そんな事に呆けて居る様な黒姫と見えませんか。チト残酷ぢやありませんか。それ程妾に信用がないのなれば、却て貴女の御邪魔になつては可いませぬから、あなたユツクリ如意寶珠の力を發揮して手柄をなさいませ。妾は飛行船を借用して、自分の性の合うた所へ活動に参ります」

「益々變な事を仰有るぢやないか。すべて戦ひは結束を固くせねば勝利は得らるるものでない。味方の方から裏切りをする様な弱音を吹いて何うなりますか。飛行船は既に既に鷹依姫の部下が占領して了つて居ますよ。飛行船なんかモウ必要はない。是れから頂上の割れ岩の醜の岩窟を言向け和し、進んで六甲山へ行かねばならぬ。チト確りしなさい。あまり高山さまに精神を取られて居れるものだから、曲津が憑依したのだらう。サア妾が鎮魂をして審べてあげよう。婆アの癖に髪を染めたり、薄化粧をしたり、まるで化物見たやうなそんな柔弱な事はどうして神界の御用が出来ますか。お前さまは二つ目に、言依別命様を柔弱だとか、八

イカラだとか非難をしなざるが、それはお前さまの心が映つて見えるのだよ」

「何と仰有つても、鎮魂は御無用です。さうしてお暇を頂きませう」

「御勝手になさいませ。モウ今日限り師弟の縁を絶りますから」

「其お言葉を待つて居ました。サアサアどうぞ絶つて貰ひませう」

「ア、絶つてあげよう。黒姫の肉體を此處に置いて、サツサと歸りなさい。黒姫

はソナ馬鹿な事を云ふ身靈ぢやなからう」

「決して決して守護神（精靈）が言ふのぢやありません。黒姫の本人が申すの

です。何程神直日大直日に見直し聞直して、妾の肉體に瑕瑾をつけぬ様に宣り直

して下さつても、それは氣休めです。どうしてもお暇を頂戴致します。本當に好

かんたらしい、驕慢な高姫さま。どうぞ此れ限り、何と云つても御暇を頂き、醜

の岩窟の鷹依姫様の御家來となつて活動致します。ウラナイ教の時には大變に重

く用ひて下さつたが、三五教になつてからは、あなたを始め、誰も彼も妾を馬鹿

にして……態ア見たか、偉相に威張つて居つたが、今の態は何ぢや。白米に朶が

混つた様な顔して、隈くたに小さくなつて居らねばならぬぞよ……と神様が仰有

つたぢやないか、その實地が來たのだ……なんて言依別命の左右に侍る幹部連が、妙な顔をして妾を冷笑して居る。それが第一氣に喰はないのだ。モウ妾は三五教は駄目だと思ふ。しかし神様は結構だ。取次が間違つて居るのだから、三五教に離れても、あなたに暇を貰つても、一寸も痛痒は感じない。神様だけは妾の眞心を知つて居て下さる。お前さまも將來になつたら……ア黒姫はそんな心であつたか、流石玄人だけあつて偉い者だつたと、アフンとしなさる事が出來て來ませうぞい」

「随分猛烈な氣焰ですなア。どうなつと勝手になされ。人を杖に突くなと云ふ事がある。妾もこれから獨舞臺で活動するのだ」

「師匠を依頼にするなと神様が仰有つた。こんな猫の目の様に心のクレクレ變る高姫のお師匠さまは、眞平御免だ。好い腐れ縁の絶り時だ。お前さまは今日限り妾の宗旨敵だからさう思ひなさい。天晴戰場で、堂々とお目にかかりませうかい」

「岩の上に寢て居つた、最前の二人の男、ムツクリ立ちあがり、」

「コリヤ女、此處を何と心得て居る、天の森の龍神様の御守護遊ばす聖地だ。汚



らはしい女の分際として、斷りもなく、此聖地を蹂躪しやがった。サアもう量見  
がならぬ。當山の規則に照らして制敗してやらう。……オイ、カーリンス、綱を  
持つて来い。フン縛つて鷹依姫様の御前に引ずり据ゑてやるのだから……」

「モシモシお二人のお方、此處へ参りましたのは、決して蹂躪したものではありません  
せぬ、龍宮の乙姫様の肉の宮、黒姫に用があるから、一寸来て呉れいと、天の森  
の龍神様が仰有つたので、飛行船に乗つて遙々参つたのですよ」

「ナニ、お前さんが、龍宮の乙姫さまの御命令で來たと云ふのか」

「ハイハイ、妾は乙姫様の肉の宮ですもの」

「妙な事を言ひますな。我々の御大將鷹依姫さまも、此頃は大變に、龍宮の乙姫  
さまがお出でになると云つて、一生懸命祈念を凝らして居られますよ」

「それ見なさい、高姫さま」

「龍宮の乙姫さまは、遠の昔にお前さまの肉體を出て、後には曲津神が巢を組ん  
で居るのですよ」

「最前から我々が寢眞似をして、二人の話を聞いて居れば、三五教の宣傳使と見

えるが、なんだか愚圖々々と喧譁をしてゐたぢやないか」

「没分曉漢の高姫が、如意寶珠の玉を腹に呑み込んで居ると言つて、あんまり威張るものですから、今妾の方から絶縁を申込んだ所です」

「そりや結構だ。お前さまは全く我々の同志だ。よしよし鷹依姫様に申上げて、都合好く「とりなし」を致しませう」

「どうぞ宜しうお頼み申します。………コラ高姫、態を見い、何程如意寶珠でも、大勢と一人では叶ふまいぞや」

と捨臺詞を残し、テーリスタンと云ふ大の男に手を曳かれ乍ら急坂を登り行く。

「ア、仕方がない。到頭惡魔の容器になつて了つた。黒姫も今迄長らくの苦勞を、一朝にして水の泡にして了つたか。ア、可哀相なものだなア。コレコレそのカー

リンスと云ふお方、お前さまは何處から來たのだ、生れは何處だえ」

「自分の國や生れが分る様な者が、斯んな所へ來て、宮番をするものかい。馬鹿な事を言ふない」

「お前さまは如意寶珠の玉の肉體を知つて居るか。日の出神の生宮は誰だと云ふ

事が分つて居るかい」

「知つて居らいでか。お前の事ぢやないか。眞偽の程は確でないが、最前から二人の話聞いて居た。お前が所謂日の出神の生宮だらう」

「敵の中にも味方あり、味方の中にも敵があるとは、よう言つたものだ。お前は妾の知己だ。中々身魂がよく磨けて居る。三五教へでも入信つたら、こんな小つぼけな宮番をせなくとも、立派な宣傳使になれるがなア」

「私は宣傳使は嫌ひだ。朝から晩まで酒を飲んでグウグウと寝るのが好だ。彼方や此方へ乞食の様な眞似をして、戸別訪問をして、犬の様に杓で水をかけられたり、箒で掃出されたり、引合はぬからなア。爺の痰を飲まされ、薯汁と痰の混汁に迂り轉けて、揚句の果てには眞裸で茨の池に落ち込み、着物を敵から貰ふ様な事が出来るから止めとかうかい」

「お前は妙なことを言ふ。薯汁や痰に迂り轉けたのは何時の事だ。そして又誰の事だいなア」

「そりやあお前さまよく御存じの筈だ」

「ハテナア。海洋萬里の波斯の國の出來事の譏り走りを聞いて居るとは、世間は廣いやうなもの狭いものだ。これだから人間は愼まねばならぬ。惡事千里と云つて何處迄もよく行きわたるものだなア」

「お前さまビックリしただらう」

「そりやまた、誰に聞いたのだい」

「今頃そんな事を知らぬ者が一人でもあるものか。随分名高い話だぜ。鷹依姫さま

まは……おつつけ、心の明き盲、高姫と云ふ者が此山に出て來るから、一つ泡を

吹かして改心させてやらねばならぬ。彼奴を改心させたならば、アルプス教の爲

には大變に間に合ふ……と云つて居られました。お前は高姫さまだらうがな」

「ヘン、見違ひをして下さるな。黒姫の様な猫の目とは、チツと違ひますよ。サ

アこれから高姫が獅子奮迅の勢を以て、鷹依姫其他の部下を悉く言向け和すのだ。

萬々一、高姫の失敗になる様な事であれば、再び三五教へは歸らぬ積りだ。喉で

も突いて死んで了うのだから、何と云つても、バラモン教の焼直しのアルプス教

に對し、徹頭徹尾、頭を下げぬから、其積りで居なさい」

「大變な固い決心だなア」

「定つた事だよ」

高姫は谷間から滲み出る清水を手にとり、掬んで、渴いた喉を潤して居る。其隙を窺

ひ、カーリンスは高姫の首に細紐を手早くひつ掛け、グツと首を締め、

「サアもう大丈夫だ。これで一つ、私の出世が出来る」

と高姫を背に負ひ乍ら、急坂をエチエチ登つて行く。

岩窟の中には、アルプス教の開山鷹依姫と云ふ中婆ア、木の株で作つた天然の

火鉢を前に、長煙管を啣へ、二三の部下を前に据ゑて、

「今日は高姫、黒姫と云ふ二人の婆アが、此處へ出て来る筈だ。キツと神の魔力

に依りて、天の森の龍神の宮に立ち寄る筈だから、テーリスタン、カーリンスの

二人に、待伏せをさせて置いたのだが、やがてやつて来る時刻だらう」

甲「そんな事は、どうして分るのですか」

「そんな事に抜目のある妾かいな。チャンと三五教の聖地へ指して密偵が這入り

込ましてあるから、それが知らして來たのだよ。モウつい二人共、此處へやつて

来る筈だから、お前達も充分に氣を付けて、妾が此煙管で「クワン」と此磬盤を叩いたが最後飛んで出るのだ。それまでは次の間で、横になり考へて居るのだよ。併し寝て了つては可かぬから、目を開けて居るのだぜ」

三人は「ハイ」と答へて、次の間に身を隠した。そこへテーリスタンに伴なはれて黒姫が這入つて來た。

「只今歸りました。あなたの眼識には、實に敬服致しました。此通り黒姫を巧く引張り込みましたから、御安心下さいませ」

鷹依姫「これこれテーリスタン、何と云ふ失禮な事を言ふのだい。鬼の岩窟か何ぞの様に、引っぱり込みましたなんて、チツト言靈を慎みなさい。結構なお方を御迎へして歸りましたと、何故言はないのだい。……これはこれは黒姫様、遙々とよう來て下さいました。空中は餘程風が烈しうてお困りでしたらう。後程ユルユルとお話を承はりますから、少時奥で御休息を願ひます」

「初めてお目にかかります。御神徳の高い御山と見えまして、雲までが皆謙遜り、谷底へ遠慮を致してゐますなア」

「雲に突き出た高春山、誠の御神徳は俗塵を離れて中空に聳えた聖地でなければ  
本當の神力は現はれませぬ。炮烙を伏せた様な低い山を背景にして神業を開始す  
るなぞと、てんで物に成りませぬワ。四尾山と高春山とは氣分が違ひませうがな  
ア」

「大きに違ひます。妾も此處へ登つてから何だか氣分が面白くなつて來ました。  
三五教のアの字を聞いても厭になりましたよ。それに言依別命と云ふハイカラな  
教主になつて居るのだから、内幕の腐爛状態と云つたら御話になりませぬ。又高  
姫と云ふ……もとは妾のお師匠で御座いますが、カンカラカンのカン太郎が、頑  
固一途を立て通すものですから、妾も此處までやつて來て、天の森の龍神さまの  
前で、暇を呉れてやりました」

「それは何より結構です。此世でさへも切り替へがあるのだから、良い加減に思  
ひ切つて、新しい世界へ出た方が貴女の身の爲ですよ」

「ハイ有難う御座います。黒姫の思つて居ることをスツカリ仰有つて下さいまし  
て、唯一の共鳴者を得た様な心持が致します。生れてからこれ位愉快な事はあり

ませぬワ」

「サアどうぞ奥へ行つて御休息下さいませ」

とテーリスタンに目配せした。

「サア黒姫さま、奥へ御案内致しませう」

と手を取つて岩室の中に案内した。そして外よりガタリと蝦錠をおろし、

「モウスうなつては、何程藻掻いても駄目ですから、充分に御考へ置きを願ひま

す。左様ならば」

と云ひ捨て、鷹依姫の側に立歸り、

「首尾よう岩室の中に籠城を命じて置きました。併し乍ら、あの黒姫に限つて、

決して御心配は要りませぬ。平岩の上に於てスツカリ、高姫と黒姫の心中を探り

ました。モウ大丈夫ですよ」

「さう軽々しく樂觀は出来ない。油断は大敵だ。罷り違へば爆裂弾を抱いて寝る

やうなものだからなア」

「龍神の祠の前へ来るまでは、兩人はどうしても、貴女を三五教へ歸順させると



云ふ目算らしう御座いましたが、龍神の祠の中から神様の御神靈が現はれ、黒姫にのり憑られたと見えて、俄に……妾は龍宮の乙姫の生宮だと威張り出し、二人が喧譁をおつ始め、到頭黒姫は貴女の部下になると云つて、ここを目蒐けて走り出しました。それで私もコレコソ渡りに船だと心勇み、手を曳いて此處まで連れて歸つたのです。もう大丈夫ですから御安心下さいませ」

「それは結構だが、もう一人の高姫はどうなつたのだえ」

「高姫ですか。あれは何事にも抜目のないカーリンスに一任して來ました。屹度フン縛つて、やがて登つて來るでせう」

「あの高姫は腹に如意寶珠の玉を呑んで居るのだから、どうしても腹斷ち割つて抉り出さねばならないのだ。併しうまくカーリンスが連れて歸つて來るだらうかなア。黒姫は玉無しだから、どうしても良い様なものの、肝腎要な高姫だ。カーリンスが大變に困つて居るだらう。お前御苦勞だが、もう一度加勢に行つて呉れまいか」

「行けと仰有れば、行かぬ事はありませんが、大變に、彼奴の顔を見ると目がマ

クマクするのですよ」

「何、目がマクマクするか、正しく如意寶珠の玉を呑んで居る證據だ。目を塞いで、早くどうでもいいからフン縛つてなつと、二人して連れてお出で」

「承知致しました」

とテリスタンは、山を一散走りに驅下る。後に鷹依姫は獨言、

「ア、時節は待たねばならぬものだなア。鬼雲彦や鬼熊別の大將株は、三五教の言靈とやらに討たれて、見つともない、男の癖に雲を霞と本國へ逃歸り、いい恥曝しをなされたが、女の一心岩でも徹すと云つて、夫に似ぬ健氣な女房蜈蚣姫は三國ヶ嶽に立籠り、到頭黄金の玉を手に入れた。ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、又しても其玉を三五教にウマウマと取返され、喜んだのは束の間、サツパリ糠喜びとなつて了つた。併し何程蜈蚣姫が智慧があつても、神徳が備はつて居ると云つても、此鷹依姫には足元へも寄れない。チツと爪の垢でも煎じて吞まして上げたものだ。如意寶珠の玉の容器は、聲なくして呼びつける。黒姫は玉無したが彼奴は黄金の玉の在處を一番よく知つて居ると云ふ事だ。此間歸つて來た虎公の報

告こくでは黒姫くろひめさへ手てに入れてうまく白状はくじやうさせたならば、黄金こがねの玉たまも手てに入いると云いふ事ことだから、云いはば玉たまを手てに入いれたも同然どうぜんだ。ア、なんとした結構けつこうな事ことが出來できて來きたものだらう」

とカンカン磬盤けいばんを長煙管ながぎせるで打うつた。ウツウツと眠ねむつて居ゐた三人さんにんの耳みみには、早鐘はやがねの様やうに強きつく響ひびいた。三人さんにんはビツクリ仰天ぎやうてん起おきあがり、周章あわてふため狼狽き、鷹依姫たかよりひめの居間ゐまに走はしり行ゆき、

「火事くわじだ 火事くわじだ」

と搦鉢すりばちを抱かかへて走はしる奴やつ、火鉢ひばちを抱かかへて飛とび出ださうとする者もの、座敷ざしきの眞中まんなかでキリキリ舞まひをする奴やつ、右往左往うわうさわうに狼狽うろたへ廻まはる。鷹依姫たかよりひめは長煙管ながぎせるの先さきで三人さんにんの頭あたまをピシヤピシヤと叩たたき、元もとの座ざに悠然いっぜんとして腰こしをおろし、

「コラコラ貴様きさま達は、何なにを狼狽うろたへて居ゐるのだい」

と大おほきな尖とがつた聲こゑで喚わめき立たてる。

「ハイハイ何なんで御座ございますか」

鷹依姫たかよりひめ「何なんでもない。氣きを落おち着つけなさい。今いま夕ゆふカが一羽いちば此家ここのへ來くるのだから、

料理をせにやならぬ。其用意に出刃でも磨いで置きなされ」

「誰か鷹の様なものを捕つたのですか。彼奴は肉食鳥だから味が悪うて、臭くつて喰べられませぬ。大きな圖體の割りとは羽根ばつかりで、食ふ所はチヨビンとよりないものですよ」

「エーそんな講釋は後にしなさい。羽根の無いタカが來たのだ」  
斯く話す折しも、カーリンス、テーリスターの兩人は、高姫の首を締めた儘、擔いで這入つて來た。

「ア、御苦労々々々、マア庭の隅へでも片付けておいて、ユツクリ休んでお呉れ。随分骨が折れただらうなア」

「イ工骨は折りませぬが、首だけ締めて置きました」

「早く解いてやらないと息が絶れるぢやないか。息が絶れて了へば、折角の玉が死んで了ふ。生きた間に取らねば間に合はぬのだ。早う早う……」

と急ぎ立てる。カーリンス、テーリスターの兩人は「ハイ」と答へて、徳利結びにした首の紐を解いた。最早高姫は綻切れたか、ビクとも動かぬ。

「ヤア此奴ア、到頭寂滅しやがったなア。どうしたら宜からうか」

「人工呼吸法だ」

と兩人は一生懸命に高姫の體を捉へ、手や足を無暗矢鱈に動かして居る。暫くあつて、高姫は「ウン」と息を吹き返す。

「ア、もう此方のものだ。鷹依姫さま、此先はどうするのですか」

「マア茶でも飲んでユツクリするのだ。其間に妾から命令を下すから……」

暫くあつて鷹依姫は、

「黒姫さまを招んで來なさい」

「ハイ」

と答へてテーリスタンは、黒姫を押込めた岩窟の前に走り行く。黒姫は忍び忍びに何か歌つて居る。

「高天原を立出でて

高姫さまと諸共に

三五教の宣傳使

御空を翔ける磐船に

乗りてやうやう高春の

山の麓に着陸し

黄金の草をより分けて

霧の海原探りつつ

一歩々々急坂を

登つて来たのが天の森

巨岩怪石立並び

風光絶佳の靈地ぞと

二人は此處に息休め

龍神さまの祠をば

眺めて休らふ折柄に

何んとは無しにビリビリと

震ひ出したる我身體

高姫さまは知らねども

確かに尊き神懸り

さはさり乍ら黒姫が

夢にも思はぬ囁語を

ベラベラ喋つて高姫に

力の限り毒ついた

吾師の君よ高姫よ

猫の目玉のくれくれと

心の變る黒姫と

必ず思うて下さるな

此れには何か神界の

深い仕組のあるならむ

曲津の軍いと多く

アルプス教を開きたる

鷹依姫が右左

司と仕へしカーリンス　　テリスターの兩人が  
巖の上に横臥して　　狐狸の空寝入り  
様子を窺ひ居ることに　　黒姫早くも氣が付いて  
ワザと師匠の高姫に　　心に在らぬ事ばかり  
申上げたは濟まないが　　これも何かの御經綸  
妾の心はさうぢやない　　どうぞ赦して下さい  
生命捧げた宣傳使　　悪魔のはびこる此岩窟  
如何なる憂を見るとても　　言向和さで置くべきか  
暫く待てよ高姫の　　吾師の君の宣傳使  
朝日は照るとも曇るとも　　月は盈つとも虧くるとも  
假令大地は沈むとも　　黒姫如何になるとても  
三五教の神教を　　天下に擴げにや置くものか  
巖をも射貫く黒姫が　　固き心の梓弓  
矢竹心は高姫の　　心の的に命中し

やがては疑雲隅も無く 天津日の如晴れるだる

ア、惟神々々 御靈の幸を賜へかし

と歌つて居る。カーリンスは外より岩の戸を、鍵を以て押開け、

黒姫さま、教主様がお召びになりました。大變な所へお入れ申して、さぞ御腹が立つたでせうが、ここはどんな立派なお方でも、初めて這入つて來た方は、早くて三日、遅いのは十日二十日と、此岩窟で修行をさすのが規則ですから、決して押籠めたなどと思つては可くませぬぞや。三五教でさへも、岩窟の修行場が拵へてあるでせう」

「イエイ工決して悪くは思つて居ませぬ。斯様な結構な所で修行をさして頂くなら假令一月が二月、三年五年要つた所で、別に苦痛とは思ひませぬよ」

「それはまた大變な馬力ですな」

黒姫は微笑み乍ら、イソイソとして鷹依姫の前に現はれ、  
「これはこれは教主様、結構な修行をさして頂きまして有難う御座います。成程



あの岩窟は心が静まつて、結構で御座いますな」

「結構でせうがな。あなたは身魂の洗練が出来て居りますから、僅一時位で卒業が出来たのですよ。開教以来あなたの様に早く出た方は御座いませぬ。お芽出度う御座います」

黒姫は、

「イヤ有難う御座いました」

と振り向く途端に、高姫の横たはる姿を見て打驚き、

「ヤア高姫さまが穢切れて居らつしやる」

と顔の色をサツと變へた。鷹依姫は、

「オツホツホツホ、あんまりカーリンスと格闘をなさつたものだから、御疲勞なさつたものと見えます。お前さまは今見て居れば蒼白の顔をしてビツクリなさつたが、矢張り未練がありますかい。斃つた人を座敷へも上げず、土間に寝かして置いたのは無残の様に貴女は思つたでせうが、これは一つの醫療法ですよ。お土のお蔭で血液の循環が舊へ復り、息吹き返す様にしてあるのだ。やがて蘇生さ

れるでせう』

「ナニ妾は高姫なんかに未練がありますものか。こんな傲慢不遜な頑固者、今日の森で弟子の方から暇を與れてやった所です。それを證據に、妾は貴女の弟子になりたいたいのですが、使つて下さいますか」

「お前さまの云ふ事に間違ひなくば、喜んで手を引合うて行きませう」  
「有難う御座います」

と云ひつつ黒姫は庭に下り、高姫の尻を力限りに握り拳を固めて、七つ八つ打ち、  
「コリヤ高姫、思ひ知つたか」

高姫は「ウン」と息を吹く。

「オホ、能う斃つたものだ。この儘棄てておけば死んで了ふのだが、併し此奴は貴方の御存じの通り如意寶珠の玉を呑んで居りますから、吐出さしてアルプス教の神寶にせなくてはなりませんまい。何とかして大事に……イヤイヤ大事にせなくてもよい。生き返らして生玉を取らねばなりませんから、暫く助けてやつたらどうです」

「黒姫さまの仰有る通り、一先づ生かして、玉を吐き出させねば、折角苦勞した效能が無い。玉さへ取れば後は煮て食はうと、焼いて食はうと、若い奴に呉れてやる。併し生き返らうかな」

「これは容易に恢復しますまい。何卒黒姫に任して下さるまいか。さうすればキツト體を舊の通りにして、さうして折を考へ、生玉を引抜いて見せませう」

「ア、そんならお前様にお任せするから、宜しく頼みます」

「何と云つても玉を呑んで居るのだから、玉の納めてある室へ高姫の死骸を寢さし妾が介抱をしてやりますから、極祕密に、誰にも分らぬ様にして下さい。黒姫がキツト取つてお目に掛けます」

「ア、そんなら御頼み申します。誰も這入つた事のない玉の居間、彼處には紫の夜光の玉が納まつて居る。是れはアルプス教の生玉だから、誰にも見せないのだが、お前さまの精神を見届けたから、其居間を一任しませう」

「それはそれは實に望外の仕合せ、此上は粉骨碎身、アルプス教の爲に、犬馬の勞を惜みませぬ」

「妾も實は相談しようにも相手がなくて困つて居つたのだ。御前さまが此處へ來て呉れたのは天の與へ、肉身の妹が來たも同然だから、互にこれから諒解し合つて秘密の相談を致しませう。サア妾が案内をしますから……」  
と先に立つ。

「高姫の死骸を持つて行かねばなりませんまい」

「ア、さうでしたな。併し乍ら秘密室に誰も入れる事が出来ないのだから……」

「妾が擔いで参りませう。………ヤイ高姫、お前は幸福者だ。一旦縁を絶つた妾

に又世話になるのかいやい」

と口汚く罵り乍ら、脇にエチエチ引抱へ、足を引摺りもつて、鷹依姫の後に従つ

て秘密室に這入つて行く。

「ここが大切な所だから、お前さま、高姫の息吹き返す様に、鎮魂をしてやつて

下さい。さうして時節を待つて生玉を抜いて下さいや」

「何事も呑み込んで居ます。其代りに十日許り、二人前の食料を入れて下さい」

鷹依姫はニコニコし乍ら、我居間に歸り、珍味佳肴を、ソツト秘密室へ持運び、

素知らぬ顔をして居る。

高姫はムクムクと起上り、四邊をキヨロキヨロ見廻して、

「ア、妾は夢を見て居たのかいな。ア、黒姫さま、お前さまと天の森の龍神の祠で従来に無い大喧嘩をして、それより悪い奴に喉を締められたと思つて居たが……」

「ヤツパリ夢だつたかなア」

黒姫、あたりを憚る小聲にて、

「高姫さま、決して夢ぢやありません。ここは高春山の割れ岩の岩窟……」

と耳に口を當て、何事かヒソヒソと囁いて居る。高姫は紫の玉を眺め、

「マア立派な玉がありますな」

「これがアルプス教の性念玉です。此れさへ手に入れば、アルプス教は最早寂滅、何とかして歸順させる方法がありますまいかなア」

「ナニ、ありますとも、この高姫が呑んで持つて歸れば好いのだ」

「何でもあなたは呑み込みが良いから便利ですなア」

「練つて練つて練つて練り倒し、仕組の奥の生玉を呑み込んだ此妾、此玉の一つ」

や二つ呑むのに何の手間暇が要りますものか』  
と云ふより早く、玉を手に取り、クネクネと撫で廻し、餅の様に軟かくして、グツと呑み込んで了つた。此時祕密室の外に、慌ただしく驅出す足音が聞えた。此れはテーリスタン、カーリンスの二人であつた。嗚呼、高姫、黒姫の運命は如何なるであらうか。

(大正一一・五・一六 舊四・二〇 松村眞澄録)

## 第二章 夢の懸橋〔六七六〕

高春山に割據するバラモン教の一派アルプス教の教主鷹依姫を言向け和すべく、言依別命の旨を奉じて天の磐樟船に乗り、勢よく聖地を出發した高姫、黒姫は殆ど三ヶ月を経るも何の消息もない。言依別命は密かに龍國別、玉治別、國依別の三人の宣傳使を招き、聖地の何人にも明さず、高春山に二人の消息を探查すべく

出張を命じた。龍國別はもと高城山の松姫館に仕へたる龍若の改名である。玉治  
別は田吾作、國依別は宗彦の改名である。

教の花も香ばしく 咲き匂ひたる桶伏の

山の麓にそそり立つ 錦の宮を伏し拜み

言依別の命令を 密かに奉じて三人は

月の光を浴びながら 勇み進んで石原の驛

長田野、土師を夜の間に 栗毛の駒に跨りて

蹄の音も勇ましく 晨の風の福知山

尻に帆かけてブウブウと 痩せ馬の屁を放りながら

青野ヶ原を右左 眺めて走る黒井村

心いそいそ石生の驛 御教畏み柏原の

田圃を越えて進み行く。

此處は神智地山の入口、アルプス教の鷹依姫の勢力範圍として居る十里四方の入口である。鬼の懸橋と云つて、谷から谷へ天然に架け渡された一本の岩の橋がある。此處を通らねば何うしても高春山へ進む事が出来ない嶮要の地である。

幾百丈とも知れぬ山の頂きに天然に架け渡された石橋、眼下を流るる谷川の水は淙々として四邊に響き、自ら凄惨の氣に打たるる許りである。玉治別はこの橋の前に着くや否や、頓狂な聲を出して、

「ヨー要害堅固の絶所だ。アルプス教の奴、中々良い地點を撰んで關所にしやつたものだなア。我戀は深谷川の鬼かけ橋、渡るは怖し、渡らねば、戀しと思ふ鷹依姫の鬼婆アさんに會はれない」

と無駄口を叩きながら半分許り進んで行つた。どうした機か、さしもに長い石橋は、中程より脆くも折れて、橋と共に玉治別は深き谷間に顛落し、泡立つ淵にドブンと、落ち込んで仕舞つた。

龍國別、國依別は此變事に膽を潰し、  
「ヤア、國さん、何うしよう何うしよう」



と顔を見合して驚きの浪に打たれて居る。

「今日は何となしに氣分の悪い日だと思つて、石生の里から馬を放ちやり、三人が斯うして「テク」ついて來たが、まアまア結構だった。馬にでも乗つて居らうものなら玉治別と一緒に馬も死んで仕舞ふところだった」

「何を云つて居るのだ。馬位死んだつて諦めがつくが、肝腎の玉治別を谷底へ落して仕舞つて詮らぬぢやないか。何とか考へねばなるまい。馬と同じやうに取扱はれては玉治別も可憐さうだ」

「ア、さうだった。餘り吃驚して狼狽へたのだ。サア川下へいつて、何處かの岩石に宿泊して居るだらうから、肉體など探してやらねばなるまい」

と早くも引返す。龍國別も後についてトントンと四五丁ばかり引返し、谷川を彼方此方と眼配り、搜索し始めた。

いくら探しても影も形もない。二人は途方に暮れて施すべき手段もなく、悔し涙に暮れて居る。二三丁下手の方より、

「オーイ オーイ」

と呼ぶ者がある。二人は、

「ハテナア、聞き覚えのある言霊だ」

と聲する方に向つて驅出した。

見れば玉治別は、谷川の中に立つ大岩石ホテルの露臺の上にて、着物を一生懸命にしぼつて居る。

「オー、お前は玉治別ぢやないか。何か變つた事はなかつたかなア」

玉治別「變つた事が大ありだ。堂々たる天下の宣傳使がお通り遊ばしたものだか

ら、あれだけの大きい石の橋が脆くも折れよつて、忽ち玉治別のプロパガンデイ

ストは、數千丈の空中滑走を旨く演じ、無事御着水、直ぐ谷川の水に送られて殆

ど下流十丁許り、忽ち變る男の洗濯婆アさま、今濡れ衣を壓搾して居る最中だ、

アハ、ハ、ハ、」

と平氣で笑つて居る。

「オイ、貴様は眞實の玉治別ではあるまい。あれだけ高い石橋から顛倒し、谷底の深淵へ墜落しながら、そんな平氣な顔して居れる筈がない。大方貴様は化州だ

らう。オイ龍國別、ちつと合點が行かぬぢやないか」

「ア、さうだ。彼奴は何かの變化であらうよ」

と矢庭に眉毛に唾をつけて居る。

「實際は玉治別は死んだのだ。大岩石と共に墜落し、五體は木つ端微塵、流血淋

漓として谷水を紅に染め、忽ち變るインフエルの血の河となつたと思ひきや、

まアざつと此の通り御壯健體だ。オイ龍、國の兩人、お前も橋は無いが、あの橋

詰から一邊飛び込んで見よ、随分愉快だよ」

「益々怪しからん事を云ふ奴だ。オイ國依別、も少し下を探して死骸でも拾うて

歸らうぢやないか」

「お前の探す肝腎の玉は、この岩上に洗濯爺となつて鎮座坐しますの知らぬの

か。お前の考へは「タマ」で間違つて居る。「玉」治別の宣傳使が二人もあつて

「たま」るものかい。死骸を探すと云うても、「死なぬ」者の死骸が何處にある

か。そんな「至難」の業はよしにせよ。苦勞の「仕甲斐」がないぞよ、ア

ハ、ハ、ハ、」

龍國別 本當に玉治別に間違ひは無からうかのう、國依別

「間違ひがあつて耐らうかい。俺はお勝の婿の元の田吾作だ。これでもまだ疑ふのか。今の人民は薩張惡の心になりて仕舞うて居るから、疑がきつうて何を云うても誠に致さず、神も迷惑致すぞよ。改心なされよ。改心致せば盲も目があき、聾も耳が聞えるやうになるぞよ。燈臺下は眞闇がり、目の前に居る友達の眞偽が分らぬとは良くも此處まで曇つたものだぞよ。玉治別の神も、今の人民さまには往生致すぞよ。餘り鼻を高く致すと、鼻が邪魔して上も見えず、向ふも見えず、足許は尚見えぬやうになつて仕舞ふぞよ。開いた口が塞がらぬ、煎豆に花の咲いたやうな結構な御神徳が、目の前にぶらついて居りながら、燈臺下は眞闇がり、ほんに可憐さうなものであるぞよ。改心なされよ。改心致せば其日から目も見えざるぞよ。身魂も光り出すぞよ。二人のお方疑ひ晴らして下されよ。玉治別の幽宣傳使に間違ひはないぞよ。これが違つたら神は此世に居らぬぞよ。餘り慢心致して宣傳使が馬に乗つたり致すから、神罰を蒙つて、結構な神のかけた橋を折られ、谷川に落されてアフンと致さなならぬと云ふ實地正眞を見せてやつたのであるぞ

よ。高姫や黒姫を見て改心なされよ。結構な二本の足を神界から頂きながら、偉さうに飛行船に乗つて、悪魔の征服なぞと云つて出かけるものだから、今に行衛が知れぬではないか。其方等は神の御用を致す宣傳使だ。鑑は何程でも出してあるから、鑑を見て改心致されよ。この玉治別は誠に結構な神が守護して御座るぞよ。明神の高倉、旭を眷屬と致して、身代りに立てたぞよ。人民の知らぬ事であるぞよ、アハ、ハ、ハ、ハ、

「オイオイ田吾作、馬鹿にするない。貴様は稲荷ぢやないか。稲荷なら稲荷で「はつきり」と云へ、俺はこれから貴様の審神をしてやるから、早く素直に往生致さぬと取り返しのかめ事が出来致すぞよ。ジリジリ悶え致しても後の祭り、苦しむのを見るのが國依別は可憐さうなから、氣もない中から氣をつけるぞよ。お前は俺の妹のお勝の婿に化けて居るが、早く往生致して改心致せばよし、餘り我を張通すと、神界の規則に照らして帳を切るぞよ、外國行きに致すぞよ」

「こらこら何を云ふのだ。彼方にも此方にも、しようもない神懸をやりよつて、俺を馬鹿にするのか」

「神は直き直きにもものは云はれぬから田吾作の肉體を借りて氣をつけるぞよ。實地正眞の手下を見させてあるぞよ。大本の大橋越えてまだ先へ、行方分らぬ後戻り、慢心すると其通り谷底へ落されて仕舞ふぞよ」

「エ、怪體な、早く眞正ものなら此方へ出て来い」

玉治別「眞正者でも鷹者でも、何時迄もこんな所に立つて居れるかい。早く改心して呉れ、改心さへ出来たなら、神はいつでも谷を渡つて、其方へ行つてやるぞよ」

國依別「龍國別の改心の出来ぬのは、度澁太い豆狸の守護神であるから、玉治別神様が御降臨、イヤ御降來遊ばさぬのは無理もないぞよ。早く豆狸や、野天狗の守護神を放り出して、神様に貰うた生粹の水晶魂に磨いて下されよ。神は嘘は申さぬぞよ」

龍國別「エ、兄と弟と寄りよつて、此谷底で龍國別を馬鹿にするのか」

玉治別「馬鹿にし度いは山々なれども、頂上に達した完全な馬鹿だから、此上も馬鹿にしようがないので、玉もたまらぬから神も胸を痛めて居るぞよ」

龍國別、自暴自棄になつて、

餘り此世が上りつめて、惡魔計りの世になりて、神は三千年の苦勞艱難致して此世に現はれて見たなれど、餘り其處邊中が穢しうて、足突つこむ所も、指一本押へる處もありは致さぬぞよ。餘り此豆狸の身魂が世界を曇らしたによつて、神が仕組を致して、玉治別の身魂を懲戒のために、折れる筈のない石橋をポキンと折つて、神力を現はし、身魂の洗濯をして見せたぞよ。曇つた世の中にも、一人や二人は誠の者があらうかと思つて、鐵の草鞋が破れる處迄探して見たが、唯た一人誠の者が現はれたぞよ。之を地に致して三千世界の立替立直しを致すのであるぞよ。龍國別の身魂は誠に結構な因縁の身魂であるから、神が懸りて何彼の事を知らさねばならぬから、長らく御苦勞になりて居るぞよ。糞糟に落ちて居りて下されと神が申したら、一言も背かず龍國別が聞いて下されたおかげによつて、神の大望成就致したぞよ。それについても因縁の悪い身魂は玉治別、國依別のガラクタであるぞよ。此身魂さへ改心致せば世界は一度に改心致すぞよ。此御方は誠に結構な清く尊い偉い立派な、世界にもう一人となない生粹の根本の元の分靈で

あるから、神が懸りて大望な御用が仰せつけてあるぞよ。世界の者よ、龍國別の行ひを見て改心致されよ

「アハ、何奴も此奴も皆神懸の眞似ばかりしよるわい。サアサアこんな人足に相手になつて居れば日が暮れる。一遍出直して、再び出陣しようかい」と、濡れた着物を脇に拘へ、眞裸のまますたと谷の流れを此方に渡り、坂道を谷沿ひに下り行く。二人は、

「オーイ待て」

と後を追ふ。

折から俄に黒雲塞がり、咫尺も辨ぜざるに至つた。玉治別は、  
「オーイオーイ二人の奴、俺の聲を目當について来い」

と力一杯唳鳴り立てる。

龍國別「ア、吃驚した。何だい、夜中に夢を見やがつて、大きな聲を出しよつて、寝られぬぢやないか」

國依別「ア、俺もエライ夢を見て居つた。玉公の奴、鬼の懸橋から谷川に顛落し、



聴やがて仕しやう様もない事ことを口くちばし走りよつたと思おもつたら、何なんだ、夢ゆめだつたか。錦にしきの宮みやの高たか殿どのに七しち五ご三さんの太たい鼓こが鳴なりかけた。サア早はやくお禮れいをして、言こと依より別わけ様さまの夜や前ぜん俺おれたち達に云いひつけられた高たか春はる山やま征せい伐ばつに向むかはうぢやないか』  
折をりからの風かぜに小こ雲も川がの水みな瀬せの音おとは手てに取とる如ごとく耳みみに入る。

言こと依より別わけの御み言こともて

聖せい地ちを後あとに龍たつ國くに別わけの

神かみの命みことの宣せん傳でん使し

心こころの玉たま治はる別わけ司かさ

國くに依より別わけを伴ともひて

小こ雲もの流ながれを溯さかのぼり

高たか春はる山やまの鬼おに神がみを

征せい服ふくせむと出いで去ゆきし

高たか姫ひめ黒くろ姫ひめ兩りやう人にんを

助たすけにや山やま家がの肥ひ後ごの橋はし

膝ひざの栗くり毛げに鞭むち打うちて

草わら鞋ぢき脚きゃ絆はんに身みを固かため

菅すげの小をが笠かさの草くさや蓑みの

巡じゆん禮れい姿すがたに身みを翼やつし

谷たにを傳つたひてテクテクと

須しう知ち蒲が生ま野のヶ原がを過すぎ

觀くわん音のん峠たうげも乗のり越こえて

教をしの花はなの咲さき匂にほふ

珍うづの園部そのへや小山郷をやまがう

翼つばさなけれど鳥羽とばの里さと

道みちも廣瀬ひろせの川傳かはづたひ

高城山たかしろやまを右手めでてに見みて

名なさへ目出度めでたき龜山かめやまの

珍うづの館やかたに着つきにける。

此處ここには梅照彦うめてるひこ、梅照姫うめてるひめの二人ふたり、言依別命ことよりわけのみことの命めいを奉ほうじ、小やかな館やかたを建たて、教をしへ

を遠近をちこちに傳つたへて居ゐた。三人さんにんの姿すがたに驚おどろいて梅照姫うめてるひめは奥おくに驅入かけいり、

モシモシ御主人様ごしゆじんさま、妙な男めうをとこが三人さんにんやつて來きました。さうして門口かどぐちに立たつて動うごき

ませぬ。どう致いたしませうか」

誰人どなたが知らぬが、服装ふうが悪わるくつても、如何いかなる神様かみさまが化ばけて御座ござるか知しれない

から、鄭重ていぢゆうにお迎むかへ申まをしたらよからう」

梅照姫うめてるひめは召使めしつかひの春公はるこうを招まねき、

何人どなたか門もんに來きて居をられる筈はずだから、【鄭重ていぢゆう】にお迎むかへ申まをして來きなさい」

承知しょうち致いたしました」

と門口かどぐちに走はしつて出でた。春公はるこうは其處そこらをきよるきよる見廻みまはしながら獨言ひとりごと。

「庭長」にせよと仰有るから迎ひに出たが、誰も居やせぬぢやないか。乞食が三人居る計りで、大切なお客さまは見えはせぬ。ハ、ア、もう、つい御座るのであらう。オイ其處な乞食共、其處退いて呉れ。唯今庭長さまがお越しになるのだから、お前のやうな乞食が門口に立つて居ると、見つとも好くない。サアサア何處かへ往つたり往つたり」

龍國別「貴方は當家の召使ですか。梅照彦は居られますかな」

「エ、何をごてごて云ふのだ。人を見下げて召使かなんて、其様なものはちつと違ふのだ」

龍國別「然らば貴方は當家の御主人ですか」

「マアマア何うでもよいわい。どつちかの中ぢや」

「御主人とあれば、一寸承はり度い事があつて参りました」

「そんな者に當家の主人は用が無いわい。早く何處かへ退散せぬか。今庭長さまがお越しになるのだ。邪魔を致すと此筈で撲りつけるぞ」

玉治別「これや、お前は此處の召使だらう。下男だらう。門前に三人の宣傳使が

見えて居るのに主人にも取り次がず、追ひ出すと云ふ事があるものか。早く取り次いで呉れ」

「取り次がぬ事もないが、今日は俄にお取込みが出来たのだ。庭長さまがお出になるのだから、何れ御馳走をせなくてはならぬ、さうすれば又ちつとは餘るから、明日除けて置いてやるから、更めて出て来い。それ迄其邊うちを迂路ついて、今日はまア他家で貰ふが好からう」

玉治別「お前は我々を乞食と見て居るのだなア。それや餘りぢやないか」

「餘りも糞もあつたものかい。縦から見ても、横から見ても乞食に間違ひはない。餘りぢやと云うたが、今日は御馳走が餘るとも餘らぬとも見當がつかぬ。明日出て来い。屹度握り飯の「あんまり」を一つ位は俺がそつと除けて置いてやる。貴様も腹が空つとるだらうが、まア辛抱をして居れ。俺だつて生れつきの悪人ぢやない。つい十日程前まで、乞食に歩いて、道の端で飢に迫り倒れて居つたところ、此家の主人が拾ひ上げて下さつたのだから何處迄も大切に此門を守らねばならぬのだ。何卒頼みだから暫く他家へ行つて居て呉れ。今庭長さまがお見えになるの

だ。若しその庭長さまが、此家の主人にでも何かの端に、此方の門口には乞食が三人立つて居ましたと云はつしやらうものなら、それこそ俺は此家を放り出されて又元の乞食になり、お前等の仲間に逆轉せなくてはならぬから、何うぞここは俺を助けると思つて、暫く退却して呉れ。乞食の味は俺もよく知つて居る。辛いものだ。本當に同情するよ。譯の分らぬ無慈悲の奴だと恨めて呉れな」

國依別は大聲を發し、

梅照彦 々々々々

と呶鳴つた。春は吃驚して、

「コラコラ、そんな非道い事を云ふものぢやない。俺が叱られるぢやないか。乞食が云うたと思はずに、俺が主人を呼び捨てにしたやうにとられては耐らぬぢやないか。些とは俺の身にもなつて呉れ」

龍、玉、國の三人の宣傳使は一時に聲を揃へて、

梅照彦 々々々々

と呶鳴り付ける。春は、

「やアこいつは耐らぬ、ぢやと云うて人の口に戸を立てる譯にも行かないわ。一つ奥へ行つて言ひ譯をして來う」

とバタバタと奥に驅込む。梅照彦は人待顔にて、

「お客さまはどうなつたか。早くこちらへ御案内せぬか」

「イヤ、未だ見えませぬ。何うしてこんなに遅いのでせうなア」

「今何だか大勢の聲がしたではないか」

「あれは乞食が歌を歌つて御門前を通つたのですよ」

「お前の聲ではなかつたかな」

「イエイ工滅相もない、誰人が御主人様を梅照彦なんて呼びつけに致しますものか。何でも貴方のお名を知つて居る乞食が云つたのでせう」

「ハテナ、それでも今妻が、門口に三人のお方が門を開けて呉れと云つてお待ち

になつて居ると云うて居た。今御飯の仕度をするに云つて炊事場の方にいきよつ

たが、もうお客さまは歸つて仕舞はれたのかなア」

「イ、エ、まだお客さまは見えませぬ。唯三人の見【すばら】しい乞食が、蓑笠

を着て、門の傍に立つて居ります。

何、まだ立つて居られるか。

御主人様、貴方はあんな乞食に丁寧な言葉をお使ひになるのですなア。

乞食だつて誰人だつて、同じ神様から生れた人間だ。丁寧に致さねばならぬではないか。

それでも私に對しては餘り丁寧ぢやありません。いつも春、春と呼びつけになさるでせう。

そんならこれから、春さまと云つたらお氣に入りますかなア。

御尤もでございますなア。

斯く話す折しも、門口から宣傳歌が聞え來る。

神が表に現はれて 善と惡とを立て別ける

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

唯何事も人の世は 直日に見直せ聞き直せ

身の過ちは宣り直す

三五教の神の教

四方に傳ふる龜山の

珍の館を守り居る

梅照彦の門の前

遙々訪ね来て見れば

佇み居たる山の神

我等の姿を見るよりも

踵を返し奥に入る

嗚呼訝かしや訝かしや

主人の妻か下婢か

不思議と門に立ち止まり

門の開くを待つうちに

躍り出たる下男

我等の前に竹箒

掃出すやうな捨言葉

庭長さまが来るまで

歸つて呉れいと頑張つて

又もや門をピシヤと締め

蒼惶姿を隠しけり

汝梅照彦司

三五教の御教を

何と思ふか世の人を

貴賤老幼別ちなく

救ひ助けて皇神の

教の徳に靡かせつ

世人を守る神司

世にも尊き天職を



もはや汝は忘れしか

神の教を笠に着て

體主靈從利己主義を

發揮し居るは三五の

神の教に非ずして

バラモン教の行り方ぞ

我は御國を救はむと

晨の風や夕の雨

そぼち濡れつつ高春の

山に向うてアルプスの

神の教の司なる

鷹依姫を言向けて

世人を救ふ神柱

言依別の御言もて

漸う此處に來りしぞ

汝が日頃のやり方は

今現はれた下男

言葉の端によく見える

貴き衣を身に纏ひ

表面を飾る曲人を

喜び迎へ入れながら

服装卑しき我々を

唯一言に膠もなく

追ひ歸さむと努むるは

全く汝が指金か

但は下男の誤りか

詳細に御答へ致されよ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

神に仕へし身の上は 如何なる卑しき姿をも

如何なる見悪き服装せる 乞食の端に至るまで

救ひ助けにやおかれまい 汝は易きに狎れ過ぎて

救ひの道を忘れしか 神は我等と俱にあり

神の勅を畏みて 曲津の征途に上り行く

我等一行三人連れ 龍國別や玉治別

國依別の宣傳使 此處に暇を告げまつる

あゝ惟神々々 恩頼を蒙りて

早や暮れかかる冬の日を 御稜威も高き高熊の

御山を指して進むべし 梅照彦よ妻神よ

随分お健でお達者で 神のお道に盡くされよ

私はこれにて暇乞ひ 三人の司が凱旋を

指をり數へて待つがよい さアさア往かうさア往かう

門前もんぜん拂ばらひを喰くはされて

餘あまり嬉うれしうは無なけれども

これも何なにかのお仕組しくみか

行ゆけるとこ迄まで行いつて見みよう

決けつして世界せかいに鬼おには無ない

三あな五な教ひけうの身みの内うちに

梅照彦うめてるひこの鬼おにが坐ます

もしや我等われらの云いふ事ことが

お氣きに障さはれば赦ゆるしてよ

あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたまの幸さちを賜たまへかし

と玉治別たまはるわけは大聲おほごゑにて心こころの丈たけを歌うたひ終をはつた。

梅照彦うめてるひこは此歌このうたを聞きくや、驚おどろいて表門おもてもんに驅かけつかけ砂上しやじやうに頭かうへを下さげ、

「これはこれは宣傳使様せんてんしさまで御座ございましたか。まことに下男しもべが粗忽そそうを致いたしまして、

申譯まをしわけが御座ございませぬ。さアさアどうぞお這入はいり下くださいませ」

玉治別たまはるわけ「イヤ有難ありがたう。かういふ立派りつぱなお館やかたへ乞食こじきが這入はいりましては、お館やかたの名譽めいよ

にかかはりますから、今日けふはまアこれで御免ごめんを蒙かうむりませう」

「お腹立はらだち御尤ごもつともで御座ございますが、つい失禮しつれい致いたしまして………全くまった下男しもべの業わざで御座ござい

ますから、どうぞ許して下さいませ。さアさア御機嫌直して、トツトとお這入り下さいませ。コレ梅照姫、春公、お詫を申上げないか」

と呶鳴つて居る。二人は此聲に驚いて様子は分らねど、梅照彦が土下座をして居るのを見て、自分も同じく大地に平伏して頭を下げた。

玉治別「今貴方は下男が悪いのだと云はれましたな。決して下男ぢやありませんよ。責任は矢張主人にある。さう云ふ氣のつかない馬鹿な男を、門番にするのが第一過りだ」

「ハイ、何と仰せられましても辨解の辭がありません」

「サア、事が分れば好いぢやないか。玉治別、國依別、お世話になりませうかい」と先に立つて進み入る。二人もニコニコしながら、

「ア、エライお氣を揉ませました。もうこれで一切の経緯は帳消だ。さア梅照彦御夫婦さま、春さま、何うぞ安心して下さいませ」

「有難う御座います」

と安心の胸を撫で下し、妻諸共三人の後に従いて奥に入る。春公は門の傍に佇立

し、

「ア、庭長さまの御挨拶だつた。お蔭で免職もどうやら免れたやうだ」

(大正一一・五・一六 舊四・二〇 加藤明子録)

### 第三章 月休殿〔六七七〕

龍國別、玉治別、國依別の三人は珍の館の奥の室に打通り、梅照姫が調理せし晚餐に舌鼓を打ち、主客打ち解けて四方八方の話に耽る。

梅照彦「最前の玉治別様のお歌に依つて、津の國の高春山へお出でになる事を承知致しました。然し乍ら此方から御出でになるのは、少し迂回ではありませぬか」

「少しは迂回ですが是には理由があるのです。實は福知山の方面から柏原を通り鬼の懸橋を渡つて參る積りでしたが、出發の前夜に大變な夢を見まして……それ

で此方へ途を變へたのです。さうして玉照彦様のお出ましになつた高熊山の岩窟

を拜して行くのが順當だと氣がついたのです。惡魔に對し言靈戦を開始するので  
すから、餘程修業をして參らねばなりません。高姫、黒姫の宣傳使は、不覺にも  
飛行船に乗つて只一息に苦勞も無しに高い所から敵を威喝しようと思つて出たも  
のですから、三ヶ月有餘も経つた今日何の消息も無し、それが爲めに言依別命が  
我々を密かにお遣はしになるのです。聖地の人々は我々三人以外、誰一人知つて  
居ないので。バラモン教やアルプス教の間者が澤山に信者となつて化込んで居  
りますから、うつかりした事は言はれないのです。又假令異教の間者が居らない  
にしても幹部の連中や信者に知らせますと、直に如何な大切の事でも喋つて仕舞  
ひますから困つたものですよ。何故あれだけ秘密が守れないのかと不思議な位で  
す。三人の外に誰にも言ふなと仰有つたのですから、秘密は何處迄も守らねばな  
りませぬからなア」  
國依別「オイ、玉治別、お前は幹部が喋舌ると今言つたが、我々兩人が何も言は  
ないのに、お前は斯んな秘密を門前で大きな聲で歌つたぢやないか。猿の尻笑ひ  
と言ふのはお前の事だよ」



と思つて自慢相に人々に秘密々々と言つては喋り散らす、それが却て能く擴まる様なものだ。三五教の宣傳使も、その筆法を應用したら、却て良いかも知れないぞ、アハ、ハ、ハ、」

玉治別「然しそれは……さうとして、梅照彦さまはそんな輕薄な御方ぢや無いから、屹度秘密を守られるでせう」

梅照彦「私は守る積りですが、女房や下男が……餘り大きな聲で仰有つたものだから……全部聞いて居りませう。そいつア何うも請負ふ事は出来ませぬなア」

玉治別「困つた事だ。何卒成就するまで他へ洩れない様に……喋舌られては困るから……どうか暫時奥さまと下男とは座敷牢にでも入れて、人に會はさない様に

して下さいませうまいかなア」

梅照姫「オホ、ハ、ハ、妾は滅多に言ひませぬが、貴方言はぬ様になされませ。屹

度道々秘密を開け放しにして、何も彼もみんな仰有るでせう」

玉治別「イヤイヤ決して決して、餘りむかついたものですから、つい門口で脱線

したのですよ」



梅照姫「余程言靈鐵道の敷設工事が請負と見えて、粗末な事がしてあると見えてますなア、ホ、ホ、ホ、ホ、」

龍國別「何分宇都山村の田吾作時代には、随分狼狽者の大將だといふ評判でした

から、矢張三才兒の癖は百歳迄とか言つて、仕方の無いものですワイ」

玉治別「そんな昔の事をさらけ出して、人の前で言ふものぢやない。龍國別、私

が出立の際に「何卒誰にも玉治別は宇都山村の田吾作だと云つて下さるな、秘密

にして下さい」と頼んだ時「俺も男だ、ヨシ、言はぬと云つたら首が千切れても

言はない」と言明し乍ら、三日も経たぬ間に秘密を明すとは何の事だい。餘り人

の事を云ふものぢやありませんぞ。自分の過失は分らぬものと見えますわい」

龍國別「ヤア此奴ア縮尻つた。然し乍らお前が田吾作だつたと言つた所で、今回

の作戦計畫に齟齬を來す様な大問題ぢや無いから……マア大目に見るのだなア」

玉治別「小さい事だと云つて秘密を洩らしても良いのですか。小さい事を洩らす

やうな人は、矢張大事を洩らすものですよ。蟻穴堤防を崩すとか言つて、極微細

な事から大失敗を演ずるものだ。如何ですか」

龍國別「ヤア大變な速射砲を向けられて……イヤもう恐れ入りました。只今限り屹度愼みませう」

梅照彦「皆さま、お疲勞でせうから、もうお寝みなさいませ」

玉治別「何時迄も攻撃計り受けて居つても詮らない。ア、お迎ひが出て來た様だ。ア—アツ」

と口の引裂ける様な缺伸をなし、目を擦つて居る。

梅照姫「サア、お寝みなさいませ。奥の室に寢床が敷いて御座いますから」

玉治別は、

「皆さま、お先へ」

と奥の室に入るや否や、雷の如き躰をかいて他愛もなく寢入つて了ふ。二人は續いて、

「左様なれば寢ませて頂きませう」

と奥の室に入る。玉治別の粥を煮る大きな躰が耳に這入つて二人とも寢つかれず、そつと裏口を開けて、月を賞め乍ら庭園を逍遙してゐる。

龍國別「ア、佳い月だな。秋の月も佳いが、冬の月も又格別綺麗な様だ。あの月の中に猿と兔が餅を搗いて居ると云ふ事だが、一つ我々に搗落して呉れさうなものだなア」

國依別「アハ、ハ、ハ、八日日が來たら落して呉れますワイ」

龍國別「卯月八日、花より團子と言つて、あれや餅ぢやない、團子ぢや」

國依別「團子でも餅でも、矢張搗かねばならぬよ」

龍國別「團子は月が落すのぢや無い。此方から搗いて上げるのだよ。竹の先に躑

躑の花と一緒に括つてな……」

國依別「その上げた團子を揺すつて落して喰つて呉れるのだ。十五の月は望月

(餅搗)と云ふから、屹度十五日になれば餅搗するに違ひない」

龍國別「良い加減に洒落て置かぬか。お月さまに恥かしいぞよ」

國依別「三五の月の御教を開く我々宣傳使は、何……月に遠慮する事があらうか

い。子がお母アさまになんぞお呉れと言つて、駄々と團子をこねるやうな心餅で

居るのだよ、アハ、ハ、ハ」

龍國別「あのお月さまの顔には痘痕が出来て居るぢやないか。圓満清朗、月の如しと言ふけれど、餘りあの痘痕面では立派でも無い様だ。月は玉兔と云ふからは、ドコか玉治別の圓い御面相に似た所がある様ぢや無いか」

國依別「玉治別の面の様に見えるのは、矢張あれは地球の影が映つて居るのだ。白い所は水、黒い所は陸地だ。天體學の事なら、何でも俺に尋ねたら聞かしてやらう、オホン」

龍國別「アハ、ハ、ハ、瑞月靈界物語の第四卷を讀んだのだらう」

國依別「そんな本が何處にあるのだ」

龍國別「三十五萬年の未來に活版刷で天聲社から發行せられた單行本だ。それに出で居るぢやないか。貴様はまだ見た事が無いのだなア。あれだけ名高い名著を知らないとは餘程時代遅れだ。それでも宣傳使だからなア」

國依別「未來の著述は見ても見ぬ顔をして居るものだ。世の中が開けて來ると種々の學者とやら、役者とやらが出て來て、屁理屈を言つて飯食ふ種にする奴があるから、……それを思うと俺も愛想が月さまだよ。まア現在の事でさへも分らない

のに、未來の事までも研究は廢めて置かうかい。三五教の其時代の宣傳使でさへも、讀んで居ないものがある位だからなア」

龍國別「未來の宣傳使は無謀なものだなア。しかし大分に夜露を浴びた様だが、もう徐々歸つて寢床に横はらうぢやないか」

國依別「俺はもう少時散歩する。却て一人の方が都合が好いから……お前は先へ寢たが宜からう。又肝腎の時になつて眠むたがると困るからなア」

龍國別「そんならお先へ御免を蒙る。お前は、ゆつくりお月さまとオツキ合ひ話でもするが良いわい。近い所に御座るからよく聞えるだらう」

國依別「きまつた事だ。お月様の分靈が……これ見い、此通り……草の上にも玉の如く輝いて御座る。貴様の鬚にも澤山に天降つて御座るぢやないか。神様の御

威徳は斯んなものだ。貴様はお月様は只御一體で大空ばかりに居られると思つて居るやうだが、仁慈無限の彌勒様だから、草の片葉に至る迄此通り恵みの露を

降して、輝き給ふではないか」

龍國別「成る程、さう言へば……そうだ。是だけは國さまの嘘月でも間誤月でも

ない、併し雨露月だなア

國依別 分つたか、一月二つ擔うて歸る水貰ひ」と云つて、一荷の桶水の中にも御丁寧に一ツづつお月様は御守護して下さるのだ

龍國別 よく分りました。モウ之位で御中止を願ひます

國依別 馬鹿云ふな。此處は月の名所、月宮殿の御境内だ。これ丈け結構な月の光を拜んで此儘寝ると云ふ事があるものか。サア今の間に月宮殿へ參拜して、その上で寝まうぢやないか

龍國別 ウン、それもそうだ。そんなら一つ是からお參詣して來うか。天には寒月、地には迂露月の影ふるふだ、アハ、ハ、ハ、

サア行かう

と兩人は鬱蒼とした森影に建てられたお宮の前にすたすたと進み行く。

二人は月の森の月宮殿の階段を登りながら、

龍國別 結構な月だが、斯う鬱蒼と樹木が茂つて居ると、肝腎の月宮殿は、暗も同様ぢやないか。此月宮殿は暗宮殿だ。これ程綺麗なお月様が祀つてあるのに、

何故此森が明くないのだらう」

國依別「馬鹿言ふな。之は晦の月宮殿といつて、お月様のお休み遊ばす御殿だ。

宮と云ふ字は休と云ふ字に改めさへすれば、名實相適ふのだ、イヤ明月相反すと

言ふのだ。アハ、ハ、ハ、

神殿の何處ともなく、

「ガサガサ グ、グ、グ、」

と怪しき物音が聞えて来る。

龍國別「ヤア此宮は餘程古いと思へば、貂か鼬が巢をしてると見えて、大變に暴

れて居るぢやないか。「月は天に澄み渡る」と詩人が言つて居るが、貂は月の宮

に棲み渡り頭から糞、小便を垂れ流すぢやないか。之を思へば月宮殿も薩張愛想

が月の宮ぢや。此宮も貂や鼬の棲處となつては最早運の月だなア」

國依別「人間の運命にも榮枯盛衰がある。潮にも満干がある。此宮さまは今干

潮時ぢや。それだからかう見窄らしく荒廢して居るのだ。之でも五六七の世に成

れば、此お宮は金光燦然として闇を照し、高天原の靈國にある月宮殿の様になる

のだが、何程結構な彌勒さまのお宮でも時を得ざればこんなものだ。信眞の徳の失せたる世の中の姿が遺憾なく此お宮に寫されてあるのだ。嗚呼如何にせんやだ龍國別「そうだなア、社會の時代的反映かも知れないア。神様が頭から四足に糞や小便をかけられ、四足と同居して御座る様では御神徳も何もあつたものぢやない。御神徳さへあれば、こんな失敬な……神様の頭の上へ上つて糞や小便を垂れる奴に、罰を當てて動けない様に靈縛なさりさうなものぢやないか」

社の中より、

「此方は月の大神であるぞよ。汝三五教の宣傳使、龍國別、國依別の盲目ども、否魔誤月、嘘月、キヨ口月人足、神の申すことを耳を浚へてよつく聞け。神は人間の信眞の頭に宿る、決して畜生等には神の聖靈は宿らないぞ。畜生には人間の副靈が宿つて居るのだ。それだから神殿に鼬や貂等が小便を垂れ様が、糞を垂れ様が、放任してあるのだ。元來が畜生の因縁を以て生れて來て居るからだ。神は人間らしき人間が無禮を致した時は即座に神罰を與ふるぞ。只今の世の中は獸が人間の皮を被り白日天下を横行闊歩する暗の世だ。今、此處へ人一化九の妖怪が



二匹も現はれて来よつたが、之も人間で無いから神罰は當てないで差赦してやらう。サア如何ぢや、人間なれば人間と判然申せ。四足の容器なれば容器で御座いますと白状致せ。神の方にも考へがあるぞよ」

國依別は小聲で龍國別に向ひ、

「オイ、何だらうな。えらい事を言ふぢやないか」

龍國別「あんまり神様の悪いことを言つたものだから、神さまが怒つて御座るのかも知れないよ」

國依別「罰が當る様なことは出来はしまいか」

龍國別「サア、其處ぢやて。俺も一つ如何言はうか知らんと思つて心配をして居るのだ。結構な神の生宮たる萬物の靈長、大和魂の人間で御座いますと言へば、直に神罰を當てられて如何な目に逢はされるか知れないし、四足の容器と言へば、お咎めは無いけれど本守護神に對して申譯が立たぬなり、自分も何だか阿呆らしくて、卑怯未練にもそんな事は斷然、ア、もう良う言はんワ」

宮の御殿より、

「人間か、四足か、早く返答致せ。四足と有體に白状すれば今日は斷然赦して遣はす。人間と申せば此儘汝の生命を取つて、根の國、底の國へ追ひやつてやらう。サア早く返答を致さぬか」

龍國別「ハイ、一寸待つて下さいませ。今鳩首謀議の最中で御座います。相談が纏まつた上御返事を申上げます」

宮の中より、

「エー、これしきの問題に凝議も何もあつたものか、一目瞭然だ、早く返答致せ。四足に間違ひあるまいがな」

兩人「へ……そ……それは……あんまり……殺生で御座います……」

宮の中より、

「それなら誠の人間と申すのか」

國依別「ハイ……まア人間が半分……畜生が半分で人獸合一の身魂で御座います」

宮の中より、

「然らば獸の分だけは赦して遣はす。半分の人間を之から成敗致す。耳一つ、眼

玉一つ、鼻一つ、下腮を取り、手一本、足一本引き抜いてやらう。有難う思へ  
龍國別「ヤア、もう何卒今度に限り大目に見て下さいませ」

宮の中より、

何、大目に見て呉れと申すか、蛇の目の唐傘の様な大きな目で睨んでやらうか  
國依別「イエイ工滅相な、そんな目で睨まれては此方も……めゝゝゝ迷惑を致  
します」

宮の中より、

此方も時節の力で斯の如く屋根は雨漏り、鼯、貂の棲處となり、些か迷惑をい  
たして居る。どうか此方の片腕が欲しいと思つて居た矢先だ。いやでも應でも其  
方達の片腕を取つてやらう」

龍國別「滅相もない、片腕どころか、彌勒様の爲なら、兩腕を差上げて粉骨碎身

して盡しますから、お頼み申します」

と泣き入る。宮の中より、

「よしよし、粉骨碎身は註文通り赦してやらう。サア脇立、眷族共、兩人の骨を

粉にし身を碎いて參れ。粉骨碎身して盡さして呉れえと願ひよつたぞよ」

龍國別「モシモシ、その粉骨碎身の意味が斷然違ひます。さう早取りをしてもら

つては困ります」

宮の中より、

「粉骨碎身とは讀んで字の如しだ。神は正直だから誤魔化しは、些も聞かぬぞよ」

龍國別「オイ龍、此奴アちつと怪しいぞ」

龍國別「そうだなア、田吾作の聲に似ては居やせぬかなア」

宮の中より、

「コラコラ兩人、其方はまだ疑ふのか。此方は空に輝く月の玉治別命、又の御名

は田吾作彦の大神であつたぞよ。ワツハ、ハ、ハ、」

龍國別「あんまり馬鹿にすな。俺の膽玉を大方潰して仕舞ひやがつた」

龍國別「こら、惡戯けた眞似をしゃがると承知をせぬぞ」

玉治別「膽玉ばかりぢや無からう。鞆丸が潰れかけただらう、アハ、ハ、ハ、」

と笑ひ乍ら、ドシンドシと朽ちはてた階段を降つて來る。三人は笑ひ乍ら梅照

彦の館を指して、月を仰ぎつつ門前に着いた。梅照彦、梅照姫は、

「モシ貴方等、何處へ行つて居られました。俄に三人様のお姿が見えぬので、何

かお氣に障つてお歸りになつたかと思ひ、大變に膽を潰しましたよ」

玉治別「鞆丸は大丈夫ですか、アハ、ハ、ハ、」

龍國別「實は我々兩人はあんまり月が佳いので、つい浮かれて散歩をし……月宮

殿に参拜して……」

玉治別「膽玉を潰しました」

龍國別「お前、黙つて居れ。人の話の尻を取るものぢやない」

玉治別「何、尻は取りたくないが鞆丸が取り度いのだ、アハ、ハ、ハ、」

國依別「月宮殿と云ふ所は妙な處ですな。貂がものを言ひましたよ。而も神さま

の聲色を使つて……【てん】と合點のゆかぬ事ですわい」

梅照彦「エ、貂がものを言ひましたか、それや聞き始めだ。何と云ふ貂でせう」

國依別「何でも田吾作とか言ふ貂で、鼬の成上りださうです。随分氣【轉】の利

かぬ馬鹿貂の水轉でしたよ、アハ、ハ、ハ、」

一同腹を抱へて『アハ、』と笑ひ轉ける。

(大正一一・五・一六 舊四・二〇 北村隆光録)

#### 第四章 砂利喰(六七八)

梅照彦が朝夕に

神の教を宣り傳ふ

珍の館を後にして

ここに三人の宣傳使

玉照彦の生れませる

高熊山の巖窟に

心を洗ひ魂清め

神國守に送られて

來勿止館の門前に

暇を告げてスタスタと

足に任せて進み行く

天狗の岩にて名も高き

境峠を打渡り

小幡の川の上流を

尻しりを捲まくつて對岸むかふぎし  
眺ながめて進む法貴谷ほふきだに

青野ヶ原あをのがはらを右左みぎひだり  
戸隱岩とがくしいはの前に着まへく。

三人さんにんは激湍飛沫げきたんひまつの音高き谷川たにがはに沿そへる、樹木鬱蒼じゆもくうつさうたる谷道たにみちを工く工く登のぼつて、漸やうやく戸隱岩とがくしいはの麓ふもとに着つき路傍ろぼうの岩いはに腰打掛こしうちかけ、息いきを休やすめてゐる。其處そこより一丁許いちちやうばかり離はなれた坂道さかみちに五六人ごろくにんの怪あやしき男をとこの影かげ、何か頻しきりに囁ささやいてゐる。

玉治別たまはるわけ「龍國別たつくにわけ、國依別くによりわけの兄貴あにき、何なんだ、向むかふの方に怪體けつたいな奴やつが囁ささやいてゐるぢやないか。此この山道やまみちに何なにをして居ゐるのだらうかな」

國依別くによりわけ「あれは泥棒どろぼうの群むれだ。往來ゆききの人の衣類いるぬもちもの持物もちものを、すつかり脱ぬがせる追剥商賣おひはぎしやうばいが現あらはれたのだよ。最前さいぜんも眞裸體まつぱだかになつて女をんなが泣なきもつて通とほつただらう。あれは屹度きつと的てきさんにやられたのに違ちがひないぞ。俺達おれたちも斯かうして蓑笠みのかさを着きて歩あるいて居ゐるものだから、彼の女をんなも吾々われわれを同類どうるゐと見みよつたか、恐こはさうにキヤーと云いつて一目散いちもくさんに遁にげたぢやないか」

龍國別たつくにわけ「それに間違まちがひは無ない。吾々われわれも屹度きつと脱ぬがされるのだな。一ひとつ此處ここで何なんとか

考へねばなるまいぞ<sup>かんが</sup>」

玉治別<sup>たまはるわけ</sup>「なアに、往くとこ迄行つて見な分るものか、刹那心だ。取越苦勞をするに及ばないぞ、萬々一先方が泥棒だつたら、此方が率先して泥棒の假聲を使ひ、泥棒仲間に交つて、彼奴等をうまく改心させるのだな。木花姫命様は三十三相に身を現じ盗人を改心させようと思へば自分から盗人になつて、一緒に働いて見て「オイ、盗人と云ふものは随分世間の狭いものの怖ろしいものだ。斯んな詮らない事は止めて天下晴れての正業に就かうぢやないか」と云つて、盗人を改心させなされると云ふことだ。酒飲みを改心させるには、自分も一緒に酒を飲み、賭博打を改心させるには自分も賭博打ちになつて、さうして改心させるのが神様の御經綸だ。吾々も一つ先方が盗人だつたら、此方も盗人に化けて、手を曳合つて仲間入りをなし、さうして改心させれば良いのだ」

國依別<sup>くによりわけ</sup>「なんぼ何うでも、盗人だけは斷然止めたいなア」

玉治別<sup>たまはるわけ</sup>「ナニ、心から盗人になれと云ふのぢやない。盗人を止めさせるための手段だから構はぬぢやないか。それが觀自在天の身魂の働きた。萬一先方が盗人で



あつたら、此の玉治別が俺は盗賊の親方だと云つて威喝するのだから、お前達は俺の乾兒に化けて居るのだぞ。さうして龍國別とか、國依別とか、斯んな道名を唱へては先方に悟られるから、此處で名を暫く改へて龍公、國公、玉公親分で行くことにしよう。先方から「オイ旅人一寸待った、持物一切渡して行かつせエ」なんて言はれてからは面白くない。先んずれば人を制すだ。泥棒と見込みがついたら、一つ俺の方から口火をつけるのだ。オイ龍公、國公、玉公親分さんに従いて來い」

龍國別「到頭宣傳使を泥棒の乾兒にして了ひやがつたなア」  
國依別「エーこれも仕方がない。觀自在天の御化身になると思へば、辛抱も出來ぬことはない、サア玉公親分、先へ行つて下さい」

玉治別は先に立ち大手を振り乍ら、五六人の男の車座になつて道を塞いで居る前に近づき見れば、今剥ぎ取つたらしい女の衣服が傍に在るに氣が付いた。的切りに此奴は泥棒と、玉治別はわざと大きな聲で、

玉治別「オイ龍、國、早く來んかい。彼處に五六人の男が居る。彼奴の着物をフ

ン奪つて眞裸にしてやるのだ」

と進んで行く。五六人の泥棒は此聲を聞いて何れも呆氣にとられてゐる。

玉治別「コレヤ木端泥棒、俺を誰だと思つて居るか。三國ヶ嶽の鬼婆の片腕と聞

えたる大泥棒の玉公親分さんぢやぞ。サア持物一切此方にすつぱりと渡さばよし、

愚圖々々吐すと何奴も此奴も一蓮托生、素首を引抜いて了ふぞ」

甲「喧しう云ふない。俺だつて同じことだ。商賣の好みで、俺達の着物だけは堪

へて呉れ」

玉治別「堪へて呉れとぬかしやア話の次第によつては堪へぬ事も無いが、何うだ、

一枚だけ俺に渡さないか。大難を小難にして赦してやるのだから」

乙「モシ親方、一寸待つて下さい。今吾々が集會を致しまして、ヌースー會社の

創立委員となり、株式募集の協議の最中でございます。貴方もどうぞ澤山株を持

つて下さい、品に依つたら社長さまに推薦するかも知れませぬから」

玉治別「俺は株は持つてはやらうが、一番の親方だから株代は拂はないぞ。優先

株を八百萬株ばかり俺に献上致せ。さうすれば徹胴敷設でも何でも、うまく認可

してやらう」

甲「そんな認可をして貰つたつて、此の泥棒會社に用は無ない。徹洞てつどうの刃過にんか（鐵道てつどうの認可にんか）や無錢むせん出でン話わ（無線電話むせんでんわ）や田紳でんしん（電信でんしん）の御おかげで、吾々われわれの商賣しやうばいの大たい變邪魔へんじやまになつて居ゐるのだから、そんなものは要いらないわ」

玉治別「貴様きさまは矢張やつぱり狐鼠こそめ盗人ずとだな。通行人つうかうにんの着物位きものくらゐ脱ぬがして虐いぢめて何なんになるかい。

モツト羽織袴はおりはかまを着きたり、洋服やうふくをつけて立派りつぱに萬年筆まんねんひつの先さきで、一遍いっぺんに難澁萬なんじふまん、難迫なんびやく

萬、難船萬なんせんまんと云いふ泥棒どろぼうをせぬのかい。徹洞てつどう敷設ふせつをすればレールをかぢり、道路だうろを

開鑿かいさくすれば砂利じやりをかぢり、軍艦ぐんかんを拵こしらへては鋼鐵かうてつをかぢり、罐詰くわんづめを請負うけおうては石いしを

詰込つめこみ、斯かう云いふ立派りつぱな智慧ちゑを出だしてヌースしき式しきをやるのだ。さうすれば別べつに斯こ

んな山奥やまおくに隠かくれて、慄ふるうて居をらないでも好いいのだ、白晝はくちうに堂々だうだうと大都會だいとくわいの【まん】

中なかを自動車じどうしやを飛とばし、白首しらくびを乗のせて天下てんかの馬鹿者ばかものどもを睥睨へいげいしつつ、葉卷はまきを熏くゆら

して大おほきな面つらをしていけるのだぞ。モウ斯こんな仕様しやうもない小盜人こぬすとは廢やめて、世界せかい

一の寶たからを手てに入れる商賣しやうばいに乘のり替かへたら何どうだい。軍艦ぐんかんかぢりよりも、レール喰く

ひよりも、砂利喰じやりくひよりも何なん萬倍まんばいとも知しれぬ結構けつこうな商賣しやうばいがあるのだぞ」

甲「エ、そんな商賣が、親方何處にありますか」

玉治別「あらいでかい。俺にまア二三日ついて歩いて見よ。斯うして俺は乞食の

やうな風に化けて居るが、其實は立派なものだぞ。今の世の中は家を飾り、衣服

を飾り、身體中金ピカに扮して居る奴は、却て内實が苦しいものだ。家の中は火

の雨が降つて居る。俺達は斯うして表面は汚い風をして居る代りに、「かかり」

ものが澤山はかからず、大變氣樂で、世界の者の知らぬ結構な寶を手に入れて、

毎日日日嬉し嬉しの花を咲かして楽しんで居るのだ。一つ貴様も俺の乾兒になつ

たらどうだ。随分小盗人も苦しいものだらうが」

甲「お察しの通り随分苦しいものです。併し、しようことなしに、斯んな商賣を

やつて居るのです」

乙「三國ヶ嶽の鬼婆アさまは、何でも蜈蚣姫とか云うたさうですな。蜈蚣の精か

ら生れたのぢやありませんか」

玉治別「なアに、そんなことがあるものか、随分あの婆アさまは俺の親方で自慢

するぢやないが偉いものだよ。世界中の金錢を自由にして居るのだ。それだから

お錢（足）が、「たんと」有るので蜈蚣姫と言ふのだよ」

丙「アーそれで蜈蚣姫と云ふのですか。何を云つても金錢の世の中ですから、せめて蜈蚣姫の乾兒になりとして欲しいものですな」

玉治別「俺が蜈蚣姫の代理を勤めて居る玉公と云ふものだ。此處に二人、怪體な面をして來て居る奴は、龍公、國公と云つて、隨分貴様の様に奴甲斐性の無い、小さい小盗人をチヨコチヨコやつて居つた奴だが、到頭往生しよつて俺の乾兒になつたのだ。金錢よりも何よりも、モットモット立派な寶が発見されたのだ。それを俺達は二人の乾兒を伴つて取りにゆくのだ、それは立派なものだぞ。紫の玉に黄金の玉だ」

乙「へーい、それは立派なものでせうなア」

玉治別「その玉さへあれば、三千世界の事は何でも彼でも、自分の心の儘になるのだ。貴様も俺の乾兒にしてやるから、御供をしたらどうだい。さうして名は何と云ふか」

甲「ハイ私は遠州と申します、それから此奴が駿州、此奴が甲州、武州に三州と

云ふものです。モ一人の奴は雲助上がりだから雲州と云ふ名がつけてあるのです」

玉治別「さうか、よし、それでは小盗人は今日限り廢めるか、何うだ」

遠州始め一同は、

「へいへい誰が斯んな小さい商賣を、アタ恐い、致しますものか。貴方の御供を致しまして、これから其玉を取りに参りませう」

玉治別「オイ此處に居る龍州と國州は、貴様等の兄貴分だから、よく言ふ事を聞かねばならぬぞ。それも承知か」

遠州「私は承知致しました。一同の奴も異議はありませんまい」

玉治別「さうか、それならよし。今日からこの玉州さんの新乾兒だ、オイ龍州、

國州、俺は今俄に腹を痛めずに、これだけ大きな子を生んだのだから、貴様達は子守役になつて世話をしてやつて呉れよ」

龍國別「エー仕方が無い。國、何うするつもりだい」

國依別「どうすると云つたところで、行きつきばつたりだ。まア行くところ迄行つ

て玉を掠奪した上のことだ。オイオイ貴様等は俺の弟分だ。俺達二人の言ふ事を神妙に聞くのだぞ。どんな用があつても直接に、お頭領の玉州さんに口を利いちやならない。この國州や龍州に相談をかけ、指揮を仰ぐのだぞ」

遠州「ハイ委細承知致しました。併し乍ら私の大親分に天州と云ふ奴があります。此の天州は今三五教の本山へ、何か結構な玉があるに違ひないといつて、信者に化込んで這入つて居ります。それは徳公と云ふ智慧も力も立派に備はつた大親分です」

玉治別「ナニ、あの徳公が貴様の親分と云ふのか。彼奴は聖地で門掃をして居つた奴ぢや。あんな奴を親分に仰ぐ貴様だから知れたものだ。實の所は俺は泥棒でも何でも無い、三五教の誠一つの教を宣傳する玉治別のプロパガンティストだ。さうしてこの御二方は龍國別、國依別と云ふ立派な宣傳使だ。サアこれから其方等が、すつぱりと改心をして、誠の道に復歸るか、さうでなければ、其方達に言靈を發射して、ブリツとも出来ないやうに、五年でも十年でも固めて置くがそれでもよいか」

一 同「エー貴方は、さうすると三國ヶ嶽の鬼婆の乾兒ではないのですか」

玉治別「定つた事だよ。誰が泥棒商賣のやうな、世間の狭い引合はぬことをする

ものかい。俺達は人を相手にせず、天を相手にすると云ふ、實に武勇絶倫なる不

世出の英雄豪傑だ」

甲「泥棒の親分でさへ結構だと思つてゐるのに、三五教の宣傳使とは思ひもより

ませなんだ。併し泥棒より幾千倍、イヤ天と地との差異ある神様の御道、どうぞ

吾々を可愛がつて救うて下さいませぬか」

玉治別「ヨシヨシ救うてやる。その代りに吾々の指揮命令に盲従を續けるのだよ」

此時空中に涼しき宣傳歌と思はるる曲が聞えて來た。

三千世界の梅の花 一度に開く時來り

本靈を曇らせし 憐れな世人を悉く

誠の神の御教に 救ふ時とは成りにけり

この谷道に現はれし 遠州、武州を始めとし



甲州三州其他の 曲津をことごと言向けて

神の誠の教を説き いよいよ吾等が睦び合ひ

力を協せて高春の 山の尾の上に巢を造る

アルプス教の司神 鷹依姫が本城に

どつと乗り込み如意寶珠 黄金の玉や紫の

玉をマンマと手に入れて 三千世界を神の世に

立直さむは目の當り 遠州駿州甲州武州

雲州三州諸共に 來れや來れいざ來れ

敵は幾萬あるとても 何の懼るることやある

直日の劍抜きつれて 群がる奴輩悉く

神の誠の言靈に 縦横無盡に攻めなやめ

勝鬨上げて神界の 堅磐常磐の御使と

千代萬代に名を揚げて 盡きぬ生命を何時迄も

生かして通る神の道 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 鷹依姫の手に持てる

寶珠の玉を取り還し 此世を救ひの神として

吾等と俱に拔群の 功名手柄をしよぢやないか

ア、惟神々々 御靈幸はひまませと

さしもに嶮しき山坂を 先に立つてぞ進み行く

瑞の御靈の三柱に 五つの身魂を加へつつ

三五の月照る夜半ごろ 別院村を乗り越えて

大槻竝や能勢の里 乗せて馳行く口車

攝津の國の多田の里 波を湛へし津田の湖

畔にこそは着きにける

此の物語長けれど 眠りの神に誘はれて  
横に寝乍ら根の國や 華胥の國に進み行く

ア、惟神々々かむながらかむながら 御靈幸はひましませと

後振り返り眺むればあとふかへなが 【外山】の霞晴渡りとやま かすみはれわた

高春山の頂きにたかはるやま いただ 【豊二】照らす朝日影ゆたかにて あさひかげ

上るを待つて此の續きあが ま こ つづ いと細やかに傳ふべし。いとこま つか

(大正一一・五・一六 舊四・二〇 外山豊二録)

## 第五章 言の疵ことば きず〔六七九〕

玉治別が早速の頓智に、六人の小盗人は始めて其非を悟り、喜んで神の道に歸順し、宣傳使に従つて高春山に向ふ事となつた。日は漸く暮れかかり、月背と見えて山と山とに圍まれし谷道も、どことなく明るくなつて來た。されど東西に高山を負ひたる谷路には、皎々たる月の影は見えなかつた。暫くすると怪しき唸り

聲が前方に聞え、次いで幾百人とも知れぬ人の足音らしきもの、刻々に聞えて来た。

玉治別「ヨ一怪しき物音が聞えて来たぞ。コレヤ大方山賊の大集團の御通過と見える。我々は此處に待受して、片つ端から言向和し、天晴大親分となつてやらう。ア、面白い面白い。天の時節が到来したか。サア龍、國、遠州、其他の乾兒共、拔目なく準備を致すのだよ」

國依別「ハハア、又商賣替ですかな」

玉治別「機に臨み變に應ずるは英雄豪傑の本能だよ」

遠州「モシモシあの足音は人間ぢやありません。あれは千匹狼と云つて、時々此路を通過する猛獸です。何程英雄豪傑でも、千匹狼にかかつては叶ひませぬ。サアサア皆さま、散り散りバラバラになつて、山林に姿を隠して下さい。餘り密集

して居ると狼の目に付いたら大變です」

玉治別「ナア二、善言美詞の言靈を以て、狼の奴残らず言向け和すのだ」

龍國別「そんな馬鹿言つてる所か、サア早く、各自に覺悟をせよ。畜生に相手に

なつて堪るものかい。怪我でもしたら、それこそ犬に咬まれた様なものだ……否  
狼に咬まれては損害賠償を訴へる譯にも行かず、治療代もどつからも出やせぬぞ。  
オイ國依別、遠州、駿州、一同、玉公の言ふ事を聞くに及ばぬ。今日は俺が臨時  
の大將だ。サア早く早く」

と傍の樹木密生せる森林の中へ驅込む。國依別外六人は龍國別と行動を共にした。  
玉治別は依然として路上に立ち、

玉治別「アハ、ハ、ハ、何奴も此奴も弱い奴だなア。多寡が知れた四つ足の千匹萬  
匹何が怖いのだ。オイ狼の奴、幾らでも出て来い」

と嗚鳴つて居る。狼は五六間前まで列を組んでやつて来たが、路の真ん中に立ち  
はだかり、捻鉢巻をしながら噪やいで居る玉治別の勢に辟易したか、途を轉じて  
谷の向側の山を目がけ、ガサガサと音させ乍ら、風の如くに過ぎ去つて了つた。  
玉治別は、

「アハ、ハ、ハ、弱い奴だな。そんな事で高春山の猛惡な鬼婆が、どうして退治が  
出来るかい。エーいい足手纏ひだ、單騎進軍と出かけよう」

と四邊に聞ゆる様にワザと大聲で喚き乍ら峠を登り行く。龍國別外七人は早くも山を一生懸命に驅あがり、向側に姿を隠して居た。爲に玉治別の聲も聞えなかつた。玉治別は鼻唄を唄ひ乍ら、峠の頂上に達し赤兒岩と云ふ赤子の足型の一面に出來た、カナリ大きな岩石が突き出て居るのを見付け、  
「ア、結構な天然椅子が人待顔にチヨコナンとやつて居るワイ。オイ岩椅子先生、貴様は餘程幸福な奴だ。三五教の大宣傳使兼山賊の大親分たる玉治別命又の御名は田吾作大明神が、少時尻をおろして休息してやらう。此光榮を堅磐常磐に、此岩の粉微塵になる千萬劫の後迄も忘れてはならぬぞよ。躓づく石も縁の端、腰掛け岩椅子もヤツパリ縁の端だ。……ヤア始めてお月様のお顔を拜んだ。實に立派な美しい御姿だなア」  
と獨ごちつつ少しく眠氣を催し、フラフラと體を揺つて居る。其處へスタスタと上つて來た二人の荒男、  
甲「ヤア來て居る來て居る」  
乙「居眠つて居るぢやないか。大分に草臥れよつたと見えるワイ。オイ源州、貴

様はこれを持つて、テーリスタンに渡すのだ。俺は今三五教の宣傳使が澤山な乾  
兒を連れて、高春山へやつて來よるから、其準備の爲に行くのだから、貴様は此  
處に金もあれば、一切の作戰計畫を記した人名簿もある。しつかりと渡して呉れ  
よ。

玉治別はワザとに聲をも出さず、首を二三度上下に振つて包みを受取つた。二  
人の荒男は追手にでも追ひかけられたやうな調子で、峠を南へ地響きさせ乍ら、  
巨岩が山上から落下する様な勢で驅下り行く。

玉治別「彼奴はアルプス教の……部下の者と見えるな。俺を味方と見違へて、大  
切な物を預けて行きよつた。ヤツパリ、アルプス教の奴も巡禮姿になつて居るの  
があると思えるワイ。併し乍ら此處に居つては、又やつて來よつて發覺されては  
面白くない。なんとか位置を轉じて、ユツクリと中の書類を調べて見ようかな」  
と小聲に言ひ乍ら、二三十間許り山の尾を踏んで、月の光を賞めつつ歩み出した。  
谷底に當つて幽かな火が、木の間に瞬いて居る。これを眺めた玉治別は、

「ア、此山奥に火を點して居るのは、此奴ア不思議だ。ヒヨツとしたら山賊の棲

家か、但ただしは樵夫か。何なには兔ともあれ、あの火光くわくわうを目め當あてに近寄ちかよつて、様子やうすを窺うかがうて見みよう。旅たびと云いふものは随分ずぶん面白おもしろいものだなア」  
と一いっ點てんの火ひを目め標あてに、樹木じゅもく茂しげれる嶮けはしき山やまを、谷底たにそこ目め蒐がけて下くだりつゝいた。見みればささ笹さや木きの皮かはをもつて屋根やねを蔽おほひたる、小ちひさき木こ挽び小屋こやである。中なかには男をとこのしはぶきが聞きえて居ゐる。

玉治別たまはるわけ「モシモシ、私わたくしは巡禮じゆんれいで御座ございますが、道みちに踏ふみまよひ、行手ゆくては分わからず、幽かすかな火ひを目めあてに此處ここまで参まゐりました。どうぞ、怪あやしい者ものではありませぬから、一ひと晩ばん泊とめて下くださいな」

中なかより男をとこの聲こゑ、

「ハイハイ、此處ここは御存ごぞんじの通とほり、穢むさくる苦くるしい木挽こび小屋こやで御座ございますが、巡禮じゆんれい様さまなれば大變たいへん結構けつこうで御座ございます。どうぞ御這おは入り下くださいませ」  
と快こころよく荒あらくたい戸とを、中なかからガタつかせ乍ながら漸やっく開ひらいて、奥おくに案内あんないする。玉治別たまはるわけは案内あんないに連つれて、一寸ちよつとした山さん中ちゆうに似合にあはぬ美うつくしい座敷ざしきに通とほつた。

「此深山このしんざんにお前まへさま、たつた一人ひとり暮くらして居ゐるのかい。門かどにて聞きけば男をとこの泣なき聲こゑが



して居つたやうだが、アレヤ一體、誰が泣いてみたのですか」

男「私は木挽の空助で御座いますが、家内のお杉が二時許りに國替を致しまし

て、それが爲に死人の枕許で、此世の名残に女房に向つて泣いてやりました。併

し乍ら俄「やもを」でどうする事も出来ず、靈前に供へる物もないので、握飯を

拵へて靈前に供へ、戒名の代りに板切れを削つて、斯うして祀つて置きましたが、

あなたは巡禮様ぢやと聞きましたが、どうぞ私がお供へ物の準備や、其外親友や

寺の坊さまに知らして来る間、此處に留守して居て下さいますまいか。一寸行つ

て参りますから……」

玉治別「へエそれは眞にお氣の毒な事ですな。私も急ぐ旅ではあるが、これを見

ては、見棄てておく譯にも行かぬ。死人の夜伽をして居るから、サアサア早く行

て來なさい」

空助「是れで安心致しました。どうぞ宜しうお願い致します」

とイソイソ戶外に驅出して了つた。玉治別は、

「エー仕方がない。偶家があると思へば死人の夜伽を命ぜられ、あんまり氣分の

良いものぢやないワ。それよりも千匹狼と戦争する方が、なんぼ氣が勇んで、心持が良いか知れない。併しこれも時の廻り合せだ。泥棒から金を貰ひ、祕密書類を巧く手に入れたと思へば、一時経つか経たぬ間に、忽ち坊主の代りだ。蚊の喰ふのに蚊帳も吊らずに、こんな所にシヨビンと残されて、蚊の施行を今晚はやらねばならぬか。どこぞ此處らに湯でも沸いては居りませぬかな

と其處邊中を探して見ると、口の缺けた土瓶が一つ手に觸つた。

「ヨ、水も大分に汲んであるワイ。一層のこと、土瓶に湯でも沸かして飲んでやらうかな」

と木の破片屑を拾うて竈に土瓶を懸け、コトコトと焚き出した。瞬く間に湯は沸騰つた。

「サアこれでも飲んで、一つ夜を徹かさうかな」

フト女房の死骸の方に目を注げると、頭の先に無字の位牌を据ゑ、線香を立て、其前に握り飯が供へてある。蒲團の中から細い手を出して握り飯をグツと掴んで取り、又掴んで取るものがある。

たまはるわけ 玉治別 「エー幽霊の奴、供へてある握り飯を喰つて居やがる。此奴ア、胃病かなんぞで死んだ奴だらう。喰物に執着心の深い亡者だなア。何だか首の邊りがゾクゾクと寒うなつて來居つた。エー構はぬ、熱い湯でも呑んで元氣でも出さうかい」と口の焼ける様な湯を、缺けた茶碗に注いで、フウフウと吹きもつて飲み始め、

「ヤア何だ。ここの水は炭酸でも含んで居るのか、怪體な臭氣がするぞ。大方女房が薬入れか、炭酸曹達でも入れて居つた土瓶かも知れないぞ。あんまり慌てて中を調査るのを忘れて居つた。ヤア何だか粘つくぞ。大變に粘着性のある水だな

ア

と明りに透かして見ると、熏つた中からホンノリと文字が浮いて居る。よくよく見れば「お杉の痰壺代用」としてある。

「エー怪つ體の悪い、此奴ア失策つた。幽霊は細い手を出して握り飯を食ふ、此方は痰を吞まされる、怪つ體なこともあればあるものだ。……コレヤ最前の男が俺に與れた此包みもヒヨットしたら蜈蚣か何かが出て來るのぢやあるまいかな。一度ある事は三度あると云ふから、ウツカリ此奴は手が付けられぬぞ。開けたが

最後、爆裂弾でも這入つて居つたら大變だ。ヤア厭らしい、又細い手で握り飯を搦んで居やがる。大方喰うて了ひよつた。此奴ア、中有なしに直に餓鬼道へ落ちた精霊と見えるワイ。こんな所に厭らしうて居れるものぢやない。併し一旦男が留守してやらうと請合つた以上は、卑怯にも逃げ出す譯にも行くまい。やがて歸つて來るだらう。それまで其處邊の林をぶらついて、お月様のお顔でも拜んで來よう。斯うなると、我々に同情を表して呉れるのはお月様丈ぢや。龍國別、國依別其他の腰拔は、どつかへ滅盡して了ひ、寂しい事になつて來たワイ。と門口を跨げ、何時とはなしに二三丁も歩み出し、谷水の流れに水を掬ひ、口に含んで盛に、家鶏が水を飲む様に、一口入れては首を擧げ、ガラガラガラブーと吹き、又一口飲んで仰向き、ガラガラガラ、ブーブーと、幾度ともなく繰返して居る。

火影を目標に探つて來た龍國別、國依別、遠州、武州外四人は、玉治別の姿を夜目に見て、怪しき者と木蔭に佇み、様子を窺つて居る。

遠州「モシ宣傳使様、ガラガラブーブーが現はれました。ここは一つ家の木挽小

屋、何が出るやら知れませぬ。アレヤきつと化州でせう」

國依別「ナニ幽霊が水を飲んでゐるのだ。つまり含嗽をしてゐるのだよ。貴様行つてしらべて来い」

玉治別は木蔭にヒソビソ語る人聲を聞きつけ、

「オイ何處の何者か知らぬが、俺も連れがなくて、淋しくつて困つて居るのだ。狼でも泥棒でも何でも構はぬ。遠慮は要らぬ。這入つて、マア湯が沸かしてある

から、ゆつくりと飲んだがよからうよ」

龍國別「ア、あの聲は玉治別によく似て居るぢやないか」

國依別「左様々々、大方玉公の先生でせう……オイ玉ぢやないか」

「その聲は國だなア。好い所へ來て呉れた。マア面白い見せ物も見ようと思つたし、湯も澤山に沸いてゐるから、トツトと俺に従つて来い。今日は山中の一つ家の臨時御主人公だ。サア此方へ……」

と手招きし乍ら、月光漏るる谷路を歸つて行く。

遠州「ヤア此家は空助と云ふ強力者の住まつて居る木挽小屋です。彼奴に随分、

我々の仲間は酷い目に遭うたものです。劍術、柔術の達人で、三十人や五十人は手毬の様に投げ付ける奴ですよ。さうして立派な嬢アを持つて居るのです。その嬢アが又中々の強者で、空助に相當した腕力を持つて居るのだから、誰も此處ばつかりは、怖くてよう窺はなかつた所です。私等は顔をこれまでに見られて居るから劍呑です。貴方がたどうぞお這入り下さいませ。暫時木蔭で待つて居ますから

龍國別「何、我々が付いて居れば大丈夫だ。遠慮は要らぬ。今日は玉公親分の家長權を持つて居る日だから、トツトと這入つたがよからう」

遠州「それでもあんまり鬪が高く跨れませぬワ」

龍國別「ハハア、ヤツパリお前にも羞惡の心がどつかに残つて居るな。そんなら暫く泥棒組は木蔭に待つて居て呉れ」

遠州「泥棒組とは酷いぢやありませんか。最早我々はピュリタン組とは違ひます

かいな」

龍國別「ピュリタン組でも泥棒組でも良いワ。暫く其處邊へドロロンと消えて、待

つてゐるのだよ」

と云ひ棄て、龍、國の兩人は又ツと家中に這入り、

「ヤア割りとは山中に似ず、小瀟洒とした家だなア」

「エ、定つた事だい。俺が家長權を握つた大家庭だから、隅から隅まで能く行届

いて居らうがな。併し俺の嬢が俄の罹病で死亡しよつたのだ。就ては俺に戀着心

が残つたと見えて、死んでからでも細い手を出して、十許りの握り飯を既に八つ

許り平らげて了ひよつたのだ。マア湯でも呑んでユツクリと嬢アの夜伽をしてや

つて呉れ」

國依別「又しても、しようもない。本當に當家に死人があつたのか。貴様泥棒の

臨時親方になつたと思つて、強盜をやつて此家の大切な嬢アを殺したのぢやない

か」

玉治別「若い時から、女殺しの後家倒し、姫殺しと綽名を取つた玉治別ぢや。口

でも殺せば、目でも殺すと云ふ業平朝臣だから、女の一人位、強盜になつて殺す

のは當然だよ」

龍國別「マサカ人の女房を殺す様な、貴様も悪人ではなかつたが、三國ヶ嶽の鬼婆の靈でも憑きよつたのかなア。エライ事をして呉れたものだワイ」

「マアどうでも良い。湯が沸いて居るから一杯飲んだらどうだ。これも玉治公がお手づからお沸し遊ばした結構なお湯だ。チヨツと毒試をして見たが、随分セキ

タン臭い水だ。併し胃病の薬には良いかも知れないわ」

國依別「一寸其土瓶を俺に貸して呉れ。調査する必要があるから。ウツカリ知らぬ宅へ来て、湯でも飲まうものなら、どんな毒薬が仕込んであるか分つたものぢやないわ」

「ナアニ、抜目のない玉治公がチヤンと查べてある。決して毒ぢやない。これは寶丹の入れ物だ。それで「寶丹」の匂ひが少しはして居る」

とニヤリと笑ふ。國依別は、

「ナニ放痰、いやマスマス怪しいぞ」

と無理に取り上げ、燈にすかして見て、

「ヤア何だか印が付いて居る……お杉の痰壺代用……エイ胸の悪い」



と云ひなり、不潔さうに土瓶を握つた手を放した。土瓶は庭にバタリと落ちて滅茶々に破れ、煮湯はパツと四方に飛び散り、三人の顔に熱い臭い奴が、厭と云ふ程御見舞申した。

龍國別「サツパリ男の顔に墨ではなうて、痰を塗りやがつたな。ヤアヤア死人がムクムクと動き出したぢやないか。永久の死人ぢやあるまい。夜分になつたら臨時死ぬると云ふ睡眠状態だらう」

玉治別「そんな死方なら、誰でも毎晩やつて居るぢやないか。お前達の様な怠惰者は日が永いとか云つて、木の蔭で一時も二時も、チヨコチヨコ死ぬぢやないか。そんな死にやうとはチツト違ふのだい。徹底的の永き眠に就いて十萬億土へ精靈の旅立の最中だ」

龍國別「それにしては、細い手を出して飯を掴んで食つたり、ムクムク動いて居るぢやないか」

玉治別「オイ國依別、お前は宗彦と云つて、随分に嬢アを澤山に泣かしたり、殺したと云ふ事だが、大方其亡念が此家の死人に憑いて居るのかも知れないぞ」

國依別「何にしても氣分の悪い家だ。さうして此家の主人は何處へ行つたのだい」  
玉治別「一寸買物に行つて来るから、歸るまで留守を頼むと云つて出たなり、まだ歸つて來ないのだ。随分暇の要る事だなア」  
死人を寢かした夜具は、ムクムクと動き出した。五つ六つの女の兒がムクツと起きあがり……

子供「お父さん お父さん お父さん」

と四邊をキヨロキヨロ見廻して居る。三人はヤツと胸撫でおろし、  
三人「ヤアこれで細い手も、握り飯掴みも解決がついた」

斯かる所へスタスタと歸つて來たのは主人の空助、

空助「巡禮さま、エライ御厄介になりました。何分急いで行つたのですけれど、

夜分の事とて先が容易に起きてくれませぬので、つい手間取りまして、エライ御迷惑を掛けました」

玉治別「エー滅相な、どう致しまして……ここに二人居りますのは、我々の兄弟分で御座います。どうぞお見知り置かれますやうに」

子供は、

「お父さん」

と走つて抱きつく。

空助「ア、お前は賢い子だ。よう留守をして居つた。あんな死んだお母アの側に黙つて寝て居るとは、肝の太い奴だ。世の中には大きな男が、宣傳をしに歩いて居つても、死人の側には怖がつて、三人も五人も居らねば、夜伽をようせぬものだが、子供はヤツパリ罪が無いワイ」

玉治別は頭を掻き、

「ヤア恐れ入りました。私もチツとも怖くはありません」

「女房の靈前にお經を唱へて下さいましたか」

「ハイ、お茶湯を獻げませうと思つて、つい考へて居りました。併し遠距離讀經をやつて置きました。それも無形無聲の、暗祈黙禱、愈これから始める所で御座います」

と何が何やら間誤ついて、支離滅裂の挨拶をやつて居る。ここに三人は靈前に向

ひ、神言を奏上し、お杉の冥福を祈り、遠州外五人の手傳の下に、野邊の送りを無事に済ました。

玉治別「ヤアこれで無事終了、先づ先づお芽出……たくもありません。惟神靈幸はへ坐せ惟神靈幸はへ坐せ」

空助「有難う御座いました」

一同は、

「左様ならば……随分御壯健でお暮しなさいませ」

と立つて行かむとする。空助は、

空助「モシモシ、此處にこんな風呂敷包が残つて居ます。コレはお前さまのぢや

あるまいかな」

玉治別「ヤア到頭忘れて居た。これは私ので御座います」

空助「お前さまのに間違ひはないか」

玉治別「實の所は峠の岩に休息して居つた時に、乾兒がやつて来て、お頭様此通りと言つて渡して行きやがつたのだ。金も随分澤山あるだらう」

空助「其方は巡禮に見せかけ、大泥棒を働く奴だ。コレヤ此の風呂敷は現在空助の所持品だ。これを見よ。空の印が付いて居る。此間の晩に、五六人抜刀で躍り込んで、俺の留守を幸に、包みを持って歸つた小盗人がある。女房は何時もならば木端盗人の三十や五十、束になつて來た所が感應へぬのだが、何分勞咳で骨と皮とになつて居た所だから、ミスミス盗られて了つたのだ。さうすると貴様はやツパリ泥棒の親分だな。サア斯く現はれし上は百年目、此空助が片つ端から素首を引抜いてやらう。……何れも皆覺悟せい」

と鉞を揮つて勢鋭く進んで來る。

玉治別「待つた待つた。嘘だ嘘だ。夜前泥棒が俺に渡したのだよ。俺や決して泥棒でも何でも無い。マア待て待て……」

空助「泥棒が泥棒でない者に金を渡すと云ふ事があるかい。貴様もヤツパリ泥棒の張本人だ。サア量見致さぬ」

と今や頭上より玉治別を梨割にせむとする此刹那「一二三四……」の天の數歌を一生懸命に稱へ始めた。玉治別の手を組んだ食指の尖端より五色の靈光放射し、

空助は身體強直して其場に忽ち銅像の様になつて了つた。

玉治別「ハ、ハ、ハ、ハ、」

龍國別「オイ玉公、我々に離れて何處へ行つたかと思へば、泥棒をやつて居たの

だ。な。もう今日限り貴様と縁を絶るから、さう思へ」

國依別「オイお前は何とした卑しい根性になつたのだ。俺はもう合はず顔が無い

ワイ」

と涙聲になる。玉治別は一伍一什を詳細に物語り、漸く二人の疑ひは氷解した。

空助は固まつた儘、此實地を目撃して、玉治別の無實を悟つた。玉治別は「ウン」

と一聲指頭を以て靈縛を解いた。空助は舊の身體に復し、

空助「お客さま、失禮な事を申上げました。どうぞ御勘辨下さいませ」

玉治別「分つたらそれで結構です……何も言ふ事はありませぬ。併し此包みはあ

なた調べて下さい」

空助「そんなら皆様の前で調べて見ませう」

とガンチガラミに括つた風呂敷包を解き開いて見れば、金色燦然たる金銀の小玉

ザラザラと現はれて来た。さうして一冊の手帳が出て来た。開いて見れば、アル  
プス教の祕密書類である。三人はこれ幸ひと懐中に收め、後は空助に返し、九人  
連れ此家を發つて津田の湖邊に向つて宣傳歌を歌ひ乍ら勢よく進み行く。  
(大正一一・五・一七 舊四・二一 松村眞澄録)

第二篇 是生滅法

第六章 小杉の森〔六八〇〕

高春山の岩窟に

巢を構へたる曲神の

鷹依姫を言向けて

誠の神の御教に

靡かせみむと三五の

道の教の宣傳使

鼻も高姫黒姫が

天の岩樟船に乗り

意氣昇天の勢で

高天原を後にして

天空高く飛んで行く

三月経ちたる冬の空

何の便りも無き儘に

言依別の神司

龍國別や國依別

玉治別の三柱に

密かに旨を含ませつ

高春山に向はしむ

ここに三人の宣傳使

草鞋脚絆に蓑笠や

軽き姿の扮装に

萬代壽ぐ龜山の

梅照彦が神館

一夜を明かし高熊の

稜威の岩窟に參拜し

神の御言を拜聽し

來勿止神に送られて

善惡正邪の大峠

越えて漸う法貴谷

戸隱岩の傍に



登りて見ればこは如何に 行手に當りて四五人の  
怪しき影は山賊の 群と玉治別司  
俄に變る三國嶽 蜈蚣の姫の片腕と  
早速の頓智に山賊は 一時は兜を脱ぎたれど  
元來ねぢけた曲靈 湯谷が峠の谷底の  
木挽小屋なる空助が 家に立寄り金銀の  
包みの光に目が眩み 又もや元の曲津神  
心の鬼に遮られ 惡魔の道に逆轉し  
心祕かに六人は 目と目を互に見合せつ  
龍國別に從ひて 津田の湖水の畔まで  
素知らぬ顔を装ひつ 三人の司と諸共に  
やうやう湖邊に着きにける。

三州「モシ玉治別さま、あなたは三五教の宣傳使と云つて居るが、實際は蜈蚣姫

の乾兒の玉公に間違ひはあるめい」

玉治別「馬鹿を言つては困るよ。汝はどうして、俺がそんな悪神に見えるのだ」

三州「論より證據、泥棒の乾兒を使つて、空助の宅へ忍び入らせ、澤山の金銀を

強奪しお前は赤兒岩に待伏せして、乾兒から受取つたのだらう。直接に盗らない

と言つてもやはり人を使つて盗ませたのだから、要するに今回の強盜事件の張本

人だよ」

玉治別「汝は今になつて、まだそんな事を言ふのか。俺の無實は既に空助始め、

大勢の者が氷解してゐるぢやないか」

三州「それでも戸隠岩の麓で、蜈蚣姫の片腕だと自白したぢやないか。ナア甲州、

雲州汝が證據人だ」

甲州「そらそうだ。蛙は口から、吾れと吾手に白状すると云ふ事がある。……オ

イ玉州モウ駄目だぞ。何と言つても自分の口から言つたのだから、龍州に國州、

俺の觀察は誤謬はあるまい。斯う大地に打おろす此杖は外れても、俺の言葉は外

れよまいぞよ」

玉治別「ア、これは聊か迷惑の至りだ。あの時は汝等を改心させる爲に、三十三相の觀自在天の眞似をして方便を使つたのだ。これから高春山の曲神の征伐に向ふと云ふ眞最中、内証を起しては味方の不利益だから、そんな事は後に詳しく、合點の行く様に説明してやらう。今日は先づ沈黙を守るがよい」

三州「假にも欺く勿れと云ふ宣傳使が、方便を使つたり、嘘を言つて良いものか。嘘から出た眞でなくて、眞から出た嘘を云ふお前は大泥棒だ」

遠州「コラ三州の野郎、尊き宣傳使に向つて、何と云ふ雑言無禮を吐くのだ。愚圖々々吐すと此遠州が承知致さぬぞ」

三州「今迄は遠州の哥兄と尊敬して來たが、汝の様な泥棒心の俄に消滅する様な腰拔は今日限り俺の方から縁を絶つてやらう。泥棒ならば徹底的になぜ泥棒で通さぬのだ、又改心するならば、本當の宣傳使に従つて誠の道へ這入るのなれば、俺だとしてチツトも不服は稱へないが、此玉に龍、國と云ふ代物は、どこまでもツウツウしく宣傳使だなぞと、假面を被つて居やがるからムカツクのだよ」

遠州「オイ駿州、武州、汝はどう思ふ？俺はどうしても立派な宣傳使と觀測し

て居るのだ」

駿州「俺もそうだ」

武州「定つた事だ。グツグツ吐すと、三甲雲の木端盗人、雁首を引抜いてやらう

か」

「ナニ猪口才な」

と三州は俄作りの有合せの杖を以て、武州の向脛を擲りつけた。武州は「アイ  
夕、」と其場に顔を擧めて倒れた。續いて甲州、雲州の二人、遠州、駿州を  
目蒐け、向脛を厭と云ふ程擲りつける。脆くも三人は其場に踞んで顔を擧め、笑つた  
り、泣いたり、怒つたりして居る。

遠州「蟻も這はすなと云ふ大切な向脛を叩きやがつて、……：覺えて居れ」

三州「空助爺ぢやないが、肝腎のおアシをとられて苦しからう。おアシの澤山な  
蜈蚣姫さまの乾兒共に修繕して貰へ。俺は最早汝等三人とは縁絶れだ。勿論玉、  
龍、國の奴盗人とも同様だ。こんな所に居るのは胸が悪い。これから先は善にな  
るか悪になるか、我々三人の都合にする。汝等は鷹依姫に散々脂を搾られ、高姫、

黒姫の様に岩窟の中へ閉ぢ込められて、木乃伊になるのが性に合うて居るワ……

アバヨ

と齒を剥き出し、腮をしやくり、尻を叩いて、あらゆる嘲笑を加へ、此場を棄て、湯谷ヶ嶽の方面指して驅けて行く。

三州、甲州、雲州の三人は津田の湖邊を後に、湯谷ヶ嶽の山麓に着いた。此處には少彦名神を祀りたる形ばかりの小さき祠がある。櫛の大木は半ば枯れながら、皮ばかりになつて、若き枝より稠密な葉を出し、空を封じて居る。猿の聲はキヤツキヤツと祠の背後の木の茂みに聞えて居る。

三州「オイ、ここまで漸く来るは来たが、玉治別以下の宣傳使はどうだらう。我々を此儘にして放任して置くだらうかな。彼奴は馬鹿正直者だから、「折角神の綱の懸つた三人、再び邪道へ逆轉させては、大神様に申譯がない」とかなんとか云つて、俺達の後を追つかけて來はせまいかと、そればかりが氣にかかるよ」  
甲州「向うにも現に三人の足を折られた連中が居るのだから、去る者は追はず、來る者は拒まずとか、何とか御都合の好い理屈を付けて、此アタ辛い山坂を、行く

方へも知しれぬ我われ々の後あとを追おつかけて來きさうな筈はずがない。マア安あん心しんしたが宜よからうぞ  
雲州うんしゅう「そんな心配しんぱいは要いらないよ。三人さんにん残のこしてあるのだから、三人さんにんが三人さんにんの足あしに  
も喰くらひ付ついて、何なんとか此方こちらへ來こない様やうに工夫くふうをするだらう。そんな取越とりこし苦勞くらうは止や  
めたが良よいワイ。彼奴等あいつら三人さんにんは足あしが痛いたいと云いつて、キツと津田つたの湖うみを、玉治別たまはるわけと  
一いっ緒しょに船ふねに乗のつて高春山たかはるやまの山麓さんろくに渡わたる手段しゅだんをとり、湖水こすゐのまん中程なかほどで、俄にはかに足痛あしいた  
が癒なほり、彼奴あいつの懷ふところの祕密書類ひみつしよるゐを取り返かへし、ウマク目的もくてきを達たつするに定きまつて居をる。  
それよりも俺達おれたちは軍用金ぐんようきんの調達てうたつが肝腎かんじんだから、自分じぶんの……これから作戦計畫さくせんけいこくわくを進すす  
める事ことにしようぢやないか」

三州さんしゅう「何を言いつても、百人力ひやくにんりきと云いふ豪傑がうけつの空助もくすけだから、到底たうてい正面攻撃しやうめんこうげきでは目的もくてきを  
達たつする事ことは出來できない。幸さいひに女房にようぼうの葬式さうしきの手傳てつだひや、穴掘あなほりまでしてやつたのだから、  
先方むかふは氣きを許ゆるして俺達おれたちを歡迎くわんげいするにきまつて居ゐる。さうしてまだ女房にようぼうの一七ひとなぬ  
日は經かたないのだから、彼奴あいつも菩提心ぼだいしんを出だして、手荒てあらい事ことはせないうに定きまつて居ゐる  
よ」

甲州かふしゅう「併しかし高春山たかはるやまに行ゆくと云いつて出でたのだから、今更いまさら何なんと云いつて、空助もくすけをチヨロ

魔化さうか、ウツカリ拙劣な事を云ふと、計略の裏をかかれて、取返しならぬ大失敗に陥るかも知れない。爰は餘程智慧袋を壓搾して、違算なき様に仕組んでいかねばなるまい。一つ此處で練習をやつて行かうではないか』

三州 『オ、それが宜からう』

甲州 『三州、お前は空助になるのだ。さうして俺と雲州がウマク化け込んで這入

るのだ。其時の問答を、今から研究して置かねばならぬからのう』

三州 『空助の腹の中が分らぬぢやないか。それから観測せぬ事には此練習も駄目

だぞ。……雲州、汝が一層の事、空助になつたらどうだ。體も大きいなり、どこ

ともなしにスタイルが似て居るからなア』

雲州 『俺も俄に百人力の勇士になつたのかな。ヨシヨシ芝居をするにも、憎まれ

役は引合はぬ。汝は小盗人役、此雲州が空助だ。サア何なとウマク瞞して来い……

……雲州否空助は智勇兼備の豪傑だから、借つて来た智慧や、一夜作りの考へでは

チヨ口魔化す事は到底駄目だぞ。此祠を空助の館と假定して、貴様等兩人が金銀

の小玉を、ウマク手に入れるべく言葉を盡して来るのだよ』

三州 定つた事だ。シツカリして肝腎の寶を、……空助……どうして俺が盗るか、妙案奇策を出して來るから、今後の參考資料にするがよからう。泥棒學の及第點を貰ふか、貰へぬか、ここが成功不成功の分界線だ。サア甲州、二三丁出直して、改めて空助館へ乗り込むとしようかい」

と二人は此場より姿を消した。

雲州 暫く此祠を拜借して、空助館と假定し、泥棒の襲來に備へねばなるまい。

併し盗人は何時來るか分らないから、常に戸締りを嚴重にして置くのだが、今度の盗人は豫告して來るのだから、充分の用意が出來さうなものだが、さて差當つて防禦の方法が無い。本當の空助なれば小盗人の五十や百は手玉に取つて振るの

だが、此空助はそう云ふ譯にも行かず、何とか工夫をせねばなるまい……オウさ

うだ。今持つて歸ると云ふ所へ、コラツと大喝一聲腰を抜いてやるに限る。玉治

別の宣傳使が何事も言靈で解決がつくと云ひよつた。一つ力一杯呶鳴つてやらう。

併し此處に金銀の代りに砂利でも拾つて、褌に包んで、分らぬ様に置いとくのだ

なア

なア

なア



と眞黒の禪の包を祠の下にソツと隠した。

三州「オイ甲州、本當の空助だないから、盗るのは容易だが、併しそれでは本當の練習にならぬ。何とか本眞者と見做してゆかねば、本場になつてから當が外れ、首つ玉でも抜かれたら大變だからのう」

甲州「到底強盜は駄目だ。マア住込み泥棒の方法が安全第一だらう。彼奴は嬢アに死なれて困つて居る所、我々が親切に隠坊の役まで勤めてやつたのだから、巧妙に行つたら空助も氣を許して、俺達を泊めて呉れるに違ひはない……サア其覺悟で行くのだよ」

「ヨシヨシ」と三州は勢込んで行かうとする。甲州は袖をグツと握り、甲州「オイオイそんな戦に行く様な調子で行つては駄目だ。涙でもドツサリと目に溜めて、如何にも同情に堪へないと云ふ態度を示して行かねば先方が氣を許さぬぢやないか」

三州「まだ一二丁もあるから、ここで目に唾をつけても、到着までには風がスツカリ拭き取つて了ひよる。先方へ行つてから、ソツと唾を付けるのだ。忘れちゃ

可かぬよ」

甲州「忘れるものかい」

とココソコソと足音を忍ばせ乍ら、

「モシモシ空助様、私は此間御宅で御世話になつたり、あんまり人の喜ばぬ隠坊

までさして戴きました三州、甲州……モ一人は半鐘泥棒の雲州で御座います。併

し雲州は其名の如く、どつかへウンでもやりに行つたと見えて遅れましたが、や

がて後から来るでせう。あんな奴はどうでも良いのだ。折角盗つた寶を分配する

のにも配當が少なくなるから、同じ事なら二人が成功すれば、それの方が餘程結

構だ」

三州「コラコラそんな腹の中を先へ言つて了ふとスツカリ落第だ。不成功疑なし。

ここは空助館ぢやないか」

甲州「空助なれば又其考へも出るのだが、現在雲州が此處に居ると思へば、本氣

になつて泥棒の練習も出来ぬぢやないか」

三州「幸ひ、雲州の空助がどつかへ行つて居ると見えて、不在だから良いものの、

そんな事が聞えたら、サツパリ駄目だぞ

甲州「さうだと云つて、我良心の詐らざる告白だもの」

三州「良心が聞いて呆れるワ。貴様の兩親もエライ放蕩の子を持つたものぢや…

…と云つて泣きの涙で暮して居るだらう」

甲州「ヤア其涙で思ひ出した。早く唾を付けぬかい」

三州「そんな大きな聲で言うのと、發覺て了ふぞ。此方は何程目に唾を付けても、

先方が音に聞えた「ツバ」者だから、グツグツしてると、一も取らず二も取らず、

アフンとせねばなるまいぞ。…モシモシ空助さま、其後、よう御訪ねを致しま

せなんだが、御機嫌は宜しいかな、お嬢さまも御變りはありませんか」

雲州「此眞夜中にお前達は何しに來たのだ。折角改心し乍ら、俺の持つて居る金

銀に眼が眩んで、魔道へ逆轉して來たのだらう。モウ良い加減に改心をしたらど

うだ。悪をする程世の中に馬鹿な奴はありませんぞ。假令人間は知らずとも、天

知る地知る、自分の精靈たる本守護神も、副守護神も皆知つて居る。天網恢々疎

にして漏らさず。良い加減に小盗人を廢めて、結構な無形の寶を手に入れる事を、

何故心がけぬか。俺は女房がなくなつて非常に無情を感じて居るのだ。

白銀も黄金も玉も何かせん 女房にます寶世にあらめやも

併し乍ら肉體のある限り、衣食住の必要がある。汝に慈善的に盗らしてやりたいのは山々であるが、さううまくは問屋が卸さぬ。それよりも善心に立歸つたらどうだい」

三州「オイ雲州、しようも無い事を言ひよると、張合が抜けて泥棒が出来ないぢやないか。アーアーもう廢業したくなつた。併し乍ら遠州、駿州、武州に對しても、足まで叩き懲して仕組んだ狂言だから、不成功に終れば彼奴等に合はず顔がない。モウちつと變つた事を言つてくれ」

雲州「ヨシ、御注文通り變つた事を言つてやらう……其方はアルプス教の鬼婆の乾兒であらうがな。改心したと見せかけ、目に唾を付け、俺の心に油斷をさせ、金銀の小玉をうまくシテやらうと思つて來たのだらう。そんな事は俺の天眼通で

チヤンと前に承知して居るのだ。此鬨一足でも跨げるなら跨げて見よ。百人力の  
空助だ。手足を引き千切つて、亡き女房の御供へにしてやらうか。狐鼠盗人奴こそぬすびとめ」  
三州「オイオイ雲州、さう出られては俺の施すべき手段がないぢやないか。女郎  
屋の二階で孔子の教を説く様な事を言ひよるものだから、拍子が抜けたワイ。強  
く出いと云へばそんな縁起の悪い事を言ひよつて、どうする積りだ。チツとは俺  
の立場になつて見よ」

雲州「サア勝手に持つて歸れ。貴様の執着心の懸つたこの金銀、長い浮世を短う  
太う暮さうと汝は思つて居るが、幽界へ行つて鬼に金の蔓で首を絞められ、逆様  
に吊られるのを覺悟して持つて歸れ」

甲州「コレヤ雲州の奴、しようも無い事を云ふない。そんな事を聞くと泥棒も出  
來ぬぢやないか」

雲州「さうだと云つて眞理は依然眞理だ。取りたい物は幾らでも取らしてやらう。  
其代りに俺も取つてやらう。汝の一つより無い生命を……金が大事か生命が大事  
か、事の大小輕重をよく考へて見い」

甲州「そんな事を考へて居つて、泥棒商賣が出来るものかい」

雲州「泥棒商賣が辛けれや働け。働くのが厭なら鞆丸なつと銜へて死ぬるか、首

でも吊つた方が良いワイ」

三州「ヤア此奴ア駄目だ。モウ練習も打切りにしようかい」

雲州「さうすると汝は最早斷念したのか。腰拔野郎だなア。それだから天州の乾

兒になつて、ハイハイハイと箱根の坂を瘦馬を追ふ様に言つて、いつ迄も

頭が上がらないのだ。鐵槌の川流れとは汝の事だよ。何なつと持つて行かぬかい」

三州「持つて歸ねと言つた所で、何も無いぢやないか」

雲州「其處邊を探して見い。金銀の妄念が禪に包んであるかも知れぬ」

甲州「オイ三州、どうしよう。何でも好いから手に入れた摸擬をせぬ事には、練

習にならぬぢやないか」

三州「さうだと云つて、ポンポン臭氣のする、斯んな禪が、どうして懐へ入れら

れるものか。屋根葺の禪を三年三月、鯛の糞壺の中へ突込んで置いた様な臭氣が

して居るワ……汝御苦勞だが、懐へ入れてくれ。之でもヤツパリ金包だ、黄金色

の新しい奴がそこらに付着して居るぞ。禪は古うても尻糞は新しい。早く處置を付けて、此奴の化物ぢやないが、カいた物がものを言ふ時節だ。併し書いた物と言へば、玉治別の懐にある一件書類を巧妙く遠州の奴、取返しよつたか知らぬて雲州「そんな外の話をする所ぢやない。一意専心、さしせまつた大問題を研究しなくてはなるまいが」

三州「空助さま、私は眞實改心致しました。玉治別の宣傳使の仰有るには……多寡が知れた高春山の鬼婆位に、お前達大勢をゴテゴテ連れて行くともない。三人居れば大丈夫だ。それよりも早く空助さまの宅へ行つて、亡くなられた奥さまの御靈前で祝詞を奏げて来い。何れ歸路には空助さまのお宅へ寄るから、それまで毎日神妙にお前達三人は、故人の靈を慰めるのだ。又空助さまも寂しいだらうから、話相手になつてあげるが良い。嬢アに死なれた時は何となく、世の中が寂寥になり、憂愁の涙に暮れるものだから、面白い話でもして、一呼吸の間でも、心を慰めてあげるが宜い。それが一番に亡者の精靈に對しても、空助さまに對しても、最善の道だ……と斯う仰有つた。それで暫くの間お宅へ御厄介に参りました

た。決して金銀などを盗らうと思つて三人が相談して來たのぢやありませんか。留守は私等三人が立派にしてあげます。サア暫く都會へでも出て遊んで來なさい。友達の家へでも行つて、酒でも飲んで來なさい。あなたの奥さまの靈が玉治別さまに姿を現はして、涙を零して頼まれたさうです。さうして金を見えぬ所へ隠して置くのは、金に對して殺生だ。妾の死骸を埋葬したも同然だから、よく分る所へ出し、さうして妾にも一遍見せる爲に、靈前へ三四日供へて置いて下さい。さうすれば妾は天晴れ成佛致します……と斯う仰つたさうで、玉治別さまが……エー此亡者は執着心が強いと見えて、死んでからまでも金銀に目をくれるのか、身魂の因縁と云ふものは仕方のないものだ……と仰有いました。どうぞ靈前へお供へになつても、我々三人が盗るのぢやありませんか。萬一無くなつたら、それはインヘルノの立派な旅館で宿泊する旅費に、奥さまが持つて行かれたのでせうから、惜氣なく執着心を棄てて御出しなされる方が宜しからう……なア空助さま」

雲州「此空助は金なんか執着はない。併し乍ら人間と云ふ者は寶を見るとつい



悪心が起るものだから、折角改心したお前達に又罪を作らすは可哀相だによつて、マア金の在處は知らさぬがよい。強つて、それでも知りたければ知らしてやらぬ事は無い。嬢アの死骸の懷に持たして歸なしてあるのだから、玉治別の神さまの前へ現はれてそんな事を女房が言ふ筈がない。大方お前達が仕組んで來たのだから。これから墓へいつて土を掘り起し、逆様に首を突込んで、懷の金を盗るなら取つて見い。女房は金に執着心の強い奴だから、キツト冷たい手で、お前達の素首にギユツと抱付き、頭を下にしられて、汝の尻の穴を花立に代用するかも知れやしないぞ。それでも承知なら墓へいつて掘つて行かつしやい」

三州「オイ雲州、モウ汝の空助は駄目だ。臨機應變、兔も角空助の住家へいつてから、當意即妙の知識を發揮する事にしよう。何事も俺の云ふ通りにするのだぞ。衆口金を溶かす……と云つて、大勢が喋舌ると、目的の金銀が溶けて無くなつて了うと困るから、總て俺に一任せいよ」

雲州「何だか雲でも無い様な氣になつて了つた。空助氣分が漂うて、汝等が泥棒に見えて仕方が無いワ」

三州さんしゅう「汝きまも泥棒どろぼうぢやないかい」

雲州うんしゅう「モウ此この計畫けいかくは中止ちゆうししたらどうだ。何なんとはなしに大變たいへんな罪惡ざいあくを犯をかす様なやう氣きが

してならないのだよ」

甲州かふしゅう「何いつれ善ぜんではない。併しかし我々われわれ泥棒どろぼうとしては、巧う妙まく手てに入いれるのが最善さいぜんの方ほう

法はふだ。善ぜんとか惡あくとか、そんな事ことに心こころを奪うばはれて、どうして此この商賣しやうばいが發展はつてんするか。

サア大分だいぶんに夜よも更ふけた、これからボツボツ行ゆかう」

と十丁じうちやう許ばかり前方むかうの空助もくすけが館やかたに、體からだを胴震どうぶるひさせ乍ながら、萱かやの穂ほのそよぎにも胸むねを轟とどろ

かせつつ心細こころほそ々脚あしもワナワナガタ震ふるひで進すすんで行ゆく。

(大正一一・五・一九 舊四・二三 松村眞澄録)

## 第七章 誠まことの寶たから〔六八一〕

湯谷ゆやヶ嶽がたけの山麓さんろくなる空助もくすけが住家すみかへ、面白おもしろからぬ目的もくてきを達成たつせいせむがために、高天たかあま

原の神國より根底の國へ急轉落下したる心の鬼の雲州、三州、甲州は、疵持つ足のきよるきよると木挽の小屋に近づいた。

雲州「サア兄弟、是れからが正念場だぞ。善と云ふ名詞は此處ですつかり抹殺して、飽迄悪で遣り通すのだ。併し乍ら悪を爲さむとする者は、悪相を現はしては出来ない。善の假面を被らねば敵に内兜を見透かされて仕舞ふから、三州、汝は一つ殊勝らしいお經を唱へるのだぞ」

三州「お經を唱へと云つても、何にも【てん】で知らぬのだから仕方がないワ」

雲州「何でも好い。其處らの物を出鱈目放題に竝べるのだ。一つ俺が云うて見ようかな。ア、何から何迄教育をしてやらねばならぬのか、低能兒を捉まへたテイー

チャーさんも大抵ぢやないワイ。そこらの器具萬端を逆様に云ふのだ。先づ屏風に襖、鍋に釜、徳利、杉に松、門口其他我々の名だ。門口に立つて、ブベウ、マフス、ベナーマカ、チバヒ、シバヒ、ツマ、ギス、ドカー、シウウン、シウサン、シウコウ、ケワルハー、マーター、ケーワー、ニーク、ツター、ケワー、リヨールニクー、スケモクノボウニヨール、ギスーオーサン、ダーシン、ダーシン、ワ

イカワイカ、ワカイマツ、カハノー、カナードー、クタベツナツテ、ルオー  
デー、ローアー、ハンニヤハラミタシンギヨウ、ウン、アボキヤ、スギコーノリー  
モーデ、ボードロノ、シウレン、オリヤーマーシータ、アサ、アサ、レコラカ  
ハレカノ、ラカダヲ、ラモイ、シヨマ、ハンニヤハラミタシンギヨ、と斯う云  
ふのだ

三州 「そんな事云つたつて分りやしない。もつと分るやうに云はないか」

雲州 「分らないのがお經の價値だ。今時の蛸坊主や、宣傳使に満足なお經の讀める奴があるかい」

三州 「オイ甲州、汝がよく似合ふだらう。一つ臨時坊主が嫌なら、三五教の宣傳使になつて、宣傳歌をうまく歌つたらどうだい」

甲州 「その方が近道だ。彼我共に意志が疎通して面白からう。サアこれから俺が宣傳歌をやる。さうすればきつと空助の奴、頭を下げ、尾を掉つて飛びつくかも知れないぞ、汝達は甲さまの後から小聲でついて来い」  
と甲州は入口に立つて、

☐ あななひけう  
三五教の宣傳使

たまはるわけ  
玉治別の神司

それに従ふ龍國別の

プロパガンデイストに従ひて

湯屋が峠を打ち渡り

津田の湖水の邊まで

やつと進んで来た折に

玉治別の宣傳使

俄に手をふり首をふり

顔色變へて神懸

これや大變な神様が

懸つて何か仰有ると

お供をして居た六人は

息を殺して畏まり

其託宣を待ち居れば

玉治別のお言葉に

妾はお杉の亡霊だ

柰助さまや幼兒を

後に残して靈界に

旅立したが残念ぢや

土の底へと埋められて

頭の上から冷水を

蛙のやうに浴びせられ

妾は困つて居りまする

行きたい所へもよう行かず

六道の辻をウロウロと

彼方此方と彷徨ひつ

淋しき枯野ヶ原の中

言問ふ人も無き折に 實に有難い三五の

神の教の宣傳使 靈魂の磨けた玉治別の

珍の使の御肉體 一寸拜借致します

可愛い女房に先立たれ まだ東西も知らぬ兒を

抱へて此世を淋しげに 暮して御座る我夫の

心は如何にと朝夕に 案じ過ぎして結構な

高天原へもええ行かず 中有に迷うて居りまする

どうぞ憐れと思ぼ召し お杉の願を聞いてたべ

如何に氣強い我夫も 二世を契つた女房の

涙を流して頼む事 よもや厭とは申すまい

せめて十日や三十日 三五教に歸順した

三甲雲の三州を 我靈前に額づかせ

輪廻に迷うた我魂を 安心さして下さんせ

もしも主人がゴテゴテと 疑うて聞かぬ事あれば

高春山を言向けて

歸つてござる其時に

玉治別の體を借り

一々細々ハズバンドに

心の底からサツパリと

氷解するよに申しませう

小盗人ばかりを働いた

此三人も元からの

決して悪い奴でない

神の光に照らされて

身魂の洗濯した上は

尊き神の分靈

一時も早く空助の

住居に駆けつけ幽界で

お杉の靈魂が苦んで

迷うて居ると逐一に

話して聞かして下されと

玉治別の口を借り

涙ドツサリ流しつ

しみじみ頼んで居らしやつた

袖振り合ふも多生の縁

躓く石も縁の端

高春山の征伐に

行かねばならぬ我なれど

顯幽共に助け行く

誠の道のピュリタンと

なつた我々三人は

是を見捨ててなるものか

空助さまがどのやうに 頑張り散らして怒るとも

寄る邊渚の捨小舟 浪に取られた沖の舟

憐れ至極のお杉さま 助けて上げたいばかりに

岩石起伏の細道を 足を痛めてようように

此處まで訪ねて來ましたぞ 空助さまは在宅か

早う此戸を開けなされ お前の大事な女房の

私は頼みで親切に 誠盡しにやつて來た

よもや厭とは言はりよまい お杉さまの精靈に頼まれて

お前に代つて靈前に お給仕さして貰ひます

サアサア開けた サア開けた 開けて嬉しい玉手箱

これも全く三五の 神の御蔭と感謝して

お前が今迄貯へた 金と銀との小玉まで

皆靈前に置き竝べ お杉の靈を慰めよ

あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして



お杉すぎの精靈せいれいの憑うつつたる

玉治たまはる別の宣傳せんてん使し

それに従したがふ雲うん、甲かふ、三さん

三人さんにんさまのお目めにかけ

修羅しゆらの妄執まうしゆを晴はらさして

極樂ごくらく參まりをさすがよい

女房にようぼうとなるも前世さきのよの

深い因縁いんねんあればこそ

貞操ていさう深いお杉すぎさま

お前まへが體主たいしゆ靈從れいじうの

欲よくに捉とらはれ金銀きんぎんに

眼眩まなぐるみて女房にようぼうを

根底ねそこの國くにに突落つきおとし

可愛かあいい子供こどもに苦勞くらうさせ

自分じぶんも死しんで根ねの國くにや

底そこの國くにへと突込つきこまれ

無限むげんの苦くをば嘗なめて泣なく

事ことに「てつきり」定きまつたと

貞操ていさう深いお杉すぎさまが

大變たいへん心配遊あそばして

我等われらに傳言ことづけなさつたぞ

それは兔とも角かく一時いつときも

此門このかど開あけて下くだされや

ゴテゴテ言いうて開あけぬなら

開あけてもよいがお前まへさま

未來みらいの程ほどが恐おそろしと

やがて氣きが付つく時ときが來くる

神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと悪あくとを立た別てけて お前まへの身み魂たまの行ゆく先さきを

キツと守まもつて下くださらう ア、金かねが欲ほしい金かねが欲ほし

欲ほしいと云いふのは俺おれぢやない 冥めい途とにごござるお杉すぎさまだ

と口くちから出で任まかせに、憐あはれつぽい聲こゑを出だして歌うたつて居ゐる。空もく助すけフト目めを覺さま

空もく助すけ「なんだ。門かど口ぐちに乞こ食じきが來きよつて、蚊かの泣なく様やうな聲こゑで何なんだか言いつて居ゐるやう

だ。腹はらが空へつとるのだらう。死し人にんに供そなへた飯めしの餘あまりがある。此これなつと戴いたかして、

早はやくボツ拂はらうてやらう。……エ、これだけ氣きが沈し淪づむで居ゐるのに、憐あはれつぽい聲こゑ

を出だして、益ます々ます淋さびしくなるワ

と云いひつつ、門かど口ぐちをサラリと開あけた空もく助すけ、

「何ど處この物もの貰もらひか知しらぬが、此この山さん中ちゆうのひと一いつ家やへ踏ふみ迷まようて來きたのか。腹はらが空へつた

らしい、力ちからのない聲こゑだが、生あ憎にく此この頃ごろは女によう房ぼうに死しなれ、俄にはか飯めし炊たく事ことを知しらず、骨ほね

だらけの飯めしが炊たいてある。さうして女によう房ぼうの亡ぼう霊れいに供そなへた奴やつも澤たく山さんに蓄た積まつて居ゐる。

恰ちやうど好いい所ところへ來きて呉くれた。勿もつ體たいなくて放は棄かす事ことも出で來きないので困こまつて居ゐた所ところだ。

サア遠慮は要らぬ。這入つてドツサリと喰つて呉れい」

雲州「夜中にお休眠になつて居る所を、お目を醒まして申譯が御座いませぬ。

私は先般お世話になつた雲州、この二人は甲州、三州で御座います。宣傳使のお

伴をして津田の湖邊まで参りますと、お杉さまの精靈が現はれ遊ばして、是非共

空助さまに一度會つて来て呉れと仰有つたものですから、高春山の征服の結構な

お伴を棒に振つて漸く此處までスタスタやつて來ました」

空助「ア、さうでしたか。それは御親切に、女房の精靈も定めて喜ぶ事ませう。

此處は小杉の森の祠とはチツト廣う御座いますから、ユツクリとお這入り下さい

ませ」

雲州「何と仰有います。小杉の森の祠の前とは、それや貴方御存じですか」

空助「御存じも御存じだ、此家から僅か四五丁より無い。俺の日々信仰するお宮

さまだ。其神さまは國治立大神様で、何でもかでも信神の徳に依つて知らして下

さるのだ。お三人様、随分作戦計畫は手落なく整ひましたかなア。イヤ成功する

見込がありますかな。玉治別の持つて居る祕密書類を、遠州、駿州、武州が、今

頃はウマク手に入れて御座るでせう。お前等も負けない様に計略を廻らして、金の小玉を手に入れたが良からうぞ」

三人は互に顔を見合せ、小聲で、

三人「オイ怪體な事を言ふぢやないか。どうしてあんな事が判つたのだらうか。

俺達の盜賊演習を、ソツと側で觀戰して居たのぢやなからうか。これやモウ駄目

だぞ」

空助「アハ、ハ、ハ、俺が小杉の森の祠に參拜して居ると、二三人の小盗人奴が、

何處からともなくやつて來やがつて、蟲のよい妙な相談をやつて居よつた。盜ら

ぬ先から取つた様な氣になつて、涸き切つた智慧を絞り出し、終局には、人名や

器具などの名詞を逆唱してお經に見せたり、哀れつばい宣傳歌を歌つて、寒い

にビリビリ慄へて立つて居やがつた奴は誰れだあい」

と雷の落ちたやうな聲で終の一句を高く唸鳴りつけた。

雲州は慄ひながら、

「ワ、私は貴方の御高名を一寸拜借致しまして、洒落に芝居をしたのです」

「芝居なら芝居でよい。さうすれば金銀の小玉は必要がないのだなア」

「ハイ、ヒ、必要はないことはありませぬ。併し猿猴が水の月を探るやうなもので到底貴方のお手にある以上は私の自由になりますまい。オイ甲州、三州、汝の意見は何うだ。何と云うても遠州に申譯が無いぢやないか」

「汝の執着心が、俺所の寶に付着して居るから、俺も今日では、最早金銀の恐ろしいと云ふ事を悟つたのだ。恰度、蜈蚣か蝮か鬼のやうな心持がする。夜前も金銀の小玉奴が赤鬼や黒鬼に化けて、鐵の棒をもつて俺を突刺しに來よつた。今後此金を手に入れた奴は皆此通りにしてやると吐しよつたぞ。本當に金が敵の世の中とは好く云うたものだよ。汝等もそれ程金が欲しければ持つて行つたがよい。併し鬼が出て即座に汝の命を取つても承知かい」

「ソ、その鬼は何時でも出ますか」

「ウン、何時でも出て來る。汝の現に腹の中にも鐵棒を突いて現はれて居るぢやないか。そして現實的に現はれた鬼は、百人力の空助と云ふ手に合はぬ【やもを】の鬼だ。第一その鬼が最も手に合はぬのだよ、アハ、ハ、ハ」

「そんなら私はもう是で泥棒は廢業しますから堪へて下さい」

「馬鹿云ふな、地獄の沙汰も金次第だ。金さへあれば何んな恐い鬼でも俄に地藏

様のやうになつて仕舞ふのだ。サアサア遠慮は要らぬ、御注文通り女房の御靈前

に供へてある、トツトと持つて歸れ」

「そんなら御遠慮なう頂いて歸りませうか」

「薪に油をかけ、それを抱いて火中に飛び込むやうな劍呑な藝當だぞ。旨く汝で

それが遂行出来るか」

「背中せなかに腹はらは代かへられぬ。一寸ちよつとで宜敷よろしいから、長ながらく拜借はいしゃくしようとは申しませぬ、

觸さはらしてさへ下くださればよろしい」

「俺おれも男をとこだ。持つて去いねと云いつたら、綺麗きれい薩張さつぱり持つて歸かへれツ」

「差支さしつかへはありませぬか」

「汝きさまが最前さいぜん小杉こすぎの森もりで云いつて居ゐた、玉治別たまはるわけの宣傳使せんでんしに従ついて行いつた三人さんにんの計略けいりやくを、

逐一ちくいち此處ここで白状はくじやうせい。さうすれば其その白状賃はくじやうちんとして、あるだけ皆みな汝きさまに渡わたしてやらう。

さうすれば汝きさまも泥棒どろぼうしたのでない、俺おれから報酬ほうじうとして貰もらつたのだから」

雲州喉をゴロゴロ云はせながら、

「それは空助さま、眞ですか。併し乍ら三人の計略を此處で薩張云つて了つては、遠州の親方に縁を絶られて仕舞ふかも知れませぬ」

「泥棒に縁を絶られても好いぢやないか。汝はそれほど泥棒を結構な商賣と思つて居るのか」

「金は欲しいし、遠州の親分に縁を絶られるのは辛いし、オイ三州、甲州、秘密を明かして金を貰つて歸らうか………エ、秘密を云つて金を貰へば我々の估券が下がるなり、何程此奴が強いと云つても知れたものだ。サア三人寄つて此奴をフン縛り持つて歸らう」

と云ふより早く、空助に三方から武者振りついた。空助はまるで蝶々でも押へたやうに、

「何を小癩な、蠅蟲奴等」

と三人を一緒に倒し、グツと股に支へ、蝶螺のやうな拳骨を固めて、

「是程事を分けて俺が柔順しく出れば【のし】上り、何と云ふ事を致すか。最早

汝は改心の望みがない。サア此拳骨が一つ觸るや否や、汝の命はそれきりだ。俺の女房のお伴をさしてやらう」

と今や打たむとする時、六才になつた娘のお初は其場に驅け出で、

「お父さま、まア待つておやりなさい。さうして此お金は此人に遣つて下さい」

「お前が成人してから、好い婿を貰ひ、樂に暮せる様と思つて、夜晝働いて貯めて置いたお金だ。此金は詮り俺のものぢやない、心の中で既にお前にやつてあるのだ」

「お父さま、そんなら今私に下さいな」

「オ、何時でもやる。今か、今やつて置かう」

「そんなら貰ひました。これこれ三人のお方、私が此金を皆にあげるから持つて歸りなさい。その代りにこれで何なりと商賣をして、もう此先はこんな恐い商賣は廢めなさい。お父さま、何卒この三人を助けて上げて下さい」

「よしよし、ヤア命冥加な三人の奴、娘の云ふ事をよく聞いて、此金をもつて何とか商賣をして、今後は悪い事をすな。サア早く持つて歸れ」



三人一度に頭を下げ、

「誠に済まぬ事で御座いました。そんなら暫く拜借して歸ります。きつと是はお返し致します。」

お初「貸したのでは無い、進上たのだから返しては要りませぬ。こんな恐いものがある私の將來のためになりませぬ。ア、お父さま、これで氣樂になりました。よう私を助けて下さいました。このお金があるばかりで、毎日日恐くつて寝るのも寝られませなんだ。お母さまも此お金のために心配して、あんな病氣になつたのです。」

三人はお初の渡す金包を取るより早く、雲を霞と此場を逃げ去る。空助はお初を抱き、涙に暮れながら、

「ア、お初、有り難い、金銀よりも何よりも貴い寶が手に入った。あゝ惟神靈幸倍坐世。」

と合掌し、嬉し涙に暮れて居る。

折から吹き来る夜嵐の聲、雨戸をガタガタと揺つて通る。

第八章 津田の湖〔六八二〕

津田の湖邊に現はれたる三人の宣傳使を始め、遠、駿、武、三、甲、雲の六人は高春山を遙に眺めて、今や三方より進撃せんとする計畫を定むる折しも、六人の泥棒は内輪喧嘩を始め出し、武州、駿州、遠州は向脛を打たれて其場に倒れたるを見すまし、三、甲、雲の三人は此場を見捨てて、元來し道に逃げ去つた。茲に龍國別は道を北に採り、迂回して大谷山より攻め上る事とした。又國依別は鼓の瀧を越え六甲山に登り、魔神を言向けつつ高春山に向ふ計畫を定めた。玉治別は湖邊に繋ぎある舟に身を托し、津田の湖を渡つて鷲地に高春山に押寄すべく、足を痛めた三人を舟に乗せて自ら艫を操り乍ら、寒風荒む月の夜を西方の山麓目蒐けて漕ぎ出だす。湖水の殆ど中央まで進みし時、三人は俄に立上り、

遠州「オイ貴様は三五教の宣傳使、誠の道を立て通す神聖な役目であり乍ら、秘  
密書類を手に入れたを幸に、敵の備へを覺り、三方より攻め寄せむとするは實に  
見下げ果てたるやり方だ。何故誠一つで進まぬのかい」

駿州「實の處はその手帳は吾々の仲間に取つて大切な品物だ。それを貴様に奪ら  
れて堪るものか。空助の宅に於いて、この大切な書類を貴様が手に入れたのを覺  
つた故、吾々六人は道々符牒を以て謀し合はせ、態と喧嘩をして見せ、脚が痛い  
と詐つてこの舟に乗込んだのだぞ」

武州「サア、最早ジタバタしても叶はぬぞ。綺麗薩張と俺達に返納致せ。愚圖々々

吐すと、此の湖中へ投げ込んで了ふぞ」

玉治別「アハ、ハ、ハ、貴様達何を吐すのだ。三五教の神力無雙の宣傳使に向つて、  
刃向うとは、生命知らずも程がある。蠅螂の斧を揮つて龍車に向ふも同然、速か  
に改心致せば赦してやるが、何處までも悪心を立て通すなら、最早是非に及ばぬ、  
言葉を以て汝が身體を縛り上げ、此の湖水へ投げ込んでやらうか」

遠州「貴様に言葉の武器があれば、此方にも言葉の武器がある。おまけにこの鐵

腕が唸りを立てて待つて居るぞよ。サア早く此方に渡さないか」

「渡せと云つても俺一人の物では無い。龍國別や、國依別に協議をした上、渡してもよければ渡してやらう」

「馬鹿を云ふな。龍國別や、國依別は吾々の同類が途中に待伏せて、平らげて了ふ手筈がチヤンと整うて居るのだ。この湖を向方へ渡るが最後、味方のものが待ちうけて、貴様を斃殺しにする手筈が定つて居る。驚いたか、何と吾々の計略は偉いものだらう」

「たとへ小童どもの三人や五人、百人攻め來るとも、恟とも致すやうな玉治別では無い、あんまり見損ひを致すな。鷹依姫は表面にアルプス教を標榜しながら、

山賊の大親分になつて居るのだな」

駿州「馬鹿を云ふない。アルプス教には泥棒は一人も居ない。唯俺達は駄賃を貰つて此仕事をするだけだ。實は俺達はアルプス教ではない。盗人の團體だからトツクリ見て見よ。その手帳に俺達の名は記してない筈だ。聖地へ忍び込んだ奴の名前が澤山あるといふことだが、最早貴様にそれが判つたところで、アルプス教

は痛痒を感じない。其代り貴様等三人の宣傳使を亡き者に致せばよいのだ。……  
オイ何うだい、此奴を眞裸體にして祕密書類をフン奪り、高春山へ持參せば結構  
な御褒美が頂戴出来る。サア「ぬかる」な  
と三方より權を以て打つてかかる。

無抵抗主義の三五教の宣傳使も、已むを得ず正當防禦の積りで、兩手を組み天  
の數歌を謳つた。されど神慮に反きし敵の祕密書類を懐中したる穢れのためか、  
今日に限つて天の數歌も、鎮魂も、何の効果も現はれなかつた。三人は三方より  
滅多打ちに打ちかかる。

玉治別は已むを得ず、又もや權を握るより早く三人の中に交つて飛鳥の如く防  
ぎ戦うた。如何がはしけむ、遠州はバサリと湖中に落ちた。二人に追ひ詰められ  
て玉治別は又もやザンブとばかり湖中に眞逆様に落込んだ。舟に掻き着き上らう  
とすれば、二人は上より權を以て頭を撲りつけやうとする。遠州は其間に舟に驅  
上り、

「サア玉の奴、神妙に渡せばよし、渡さねば貴様の生命はモ一ないぞ」

玉治別は一生懸命抜き手を切つて逃出す。三人は櫂を操り乍ら玉治別を追ひかける。玉治別は浮きつ沈みつ逃げ廻る。秘密書類は懐中より脱出して水面に浮き上つた。三人は手早く之を拾ひ上げて、大切に濡れた儘「そつ」と舟の中に匿し、尚も玉治別の浮きつ沈みつ逃ぐるを追ひかけ、頭を目蒐けて撲りつけようとする。撲られては一大事と、苦しき息を凝らし乍ら水底を潜り、一方に頭を上げて息をつぎ見れば、又もや三人は舟にて追ひかけて来る。

玉治別は進退谷まり、九死一生のところへ矢を射る如く、一人の子供を乗せて漕ぎつけた一隻の舟。玉治別は盲龜の浮木と喜び勇んで舟に取ついた。舟人は玉治別を助けて舟に乗せた。玉治別は息も絶え絶えになつてゐる。此の時三人の盗人は、

「エー邪魔ひろぐな」

と此の舟目蒐けて攻めかけ来る。

船人「貴様は遠州、駿州、武州の小盗人だらう。サア、モウ俺が此處に來た上は、汝も最早觀念せねばなるまい。片つ端から叩き潰してやらう」

此聲に三人は驚いて一生懸命に櫂を操り、矢を射る如くに西へ西へと逃げ出した。湖中に突出せる大岩石に舟の先端を衝突させ、船體は木つ端微塵になつて、ゴブゴブゴブと沈没した。三人は思ひ思ひに抜き手を切つて逃げようとする。

船頭は三人の浮いた頭を目當に舟を差向けた。玉治別は漸く氣がついた。見れば空助親子が舟に乗つて、三人の泥棒の影を目當に走つてゐる。

「ア、貴方は空助さま。危い所をよう助けに来て下さいました」

「話は後でゆつくり聞きます。愚圖々々して居れば三人の泥棒の生命が失くなつて了ふ。サア貴方も此櫂を漕いで下さい」

玉治別は直ちに櫂を漕ぎ始めた。漸くにして三人の泥棒を救ひ上げた。さうして以前の湖中の岩の上に三人を送り、舟を此方に引返し、十數間許り距離を保つて、三人に向ひ宣傳歌を聞かさむと、聲も涼しく歌ひ始めた。

玉治別「朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 誠の力は世を救ふ

誠まこと一つひとつの世よの中なかに

誠まことの道みちを踏ふみ外はうし

天地てんちに罪つみを重かさねつつ

終つひには根ねの國くに底そこの國くに

地獄ぢごくの底そこの「どん」底そこの

焦熱せうねつ地獄ぢごくに落おとされて

苦くるしみ悶もたえる幽界いうがいの

掟おきてを知らしずに智ち慧ゑ淺あさき

體主たいしゅ靈れい從じゆうの人ひと々びとが

小ちひさき欲よくに目めが眩くらみ

結構けつこうな身魂みたまを持もち乍ながら

他ひとの寶たからを奪うばひ取とり

飲のめよ騷さわげの大騷おほさわぎ

遊あそんで暮くらす惡わる企たくみ

地獄ぢごくの釜かまの道みち作つくり

それも知しらずに曲まが道みちを

通とほる身魂みたまぞいぢらしき

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

誠まことの道みちに叶かなひなば

大慈だいじ大悲だいひの大神おほかみは

必かならず救たすけ給たまふべし

遠州ゑんしゅう武州ぶしゅう駿州すんしゅうよ

汝なんぢも元もとは神かみの御子みこ

聖きよき身魂みたまを受うけつ繼つぎし

貴たふとき神かみの生宮いきみやぞ

小ちひさき欲よくにからまれて

此世このよからなる地獄道ぢごくだう

餓鬼がき畜生ちくしやうや修羅道しゆらだうの



責<sup>せめく</sup>苦<sup>く</sup>に自<sup>みづか</sup>ら遭<sup>あ</sup>ひ乍<sup>なが</sup>ら未<sup>ま</sup>だ覺<sup>さと</sup>らずに日<sup>ひ</sup>に夜<sup>よる</sup>に

道<sup>みち</sup>に背<sup>そむ</sup>いた事<sup>こと</sup>ばかりわ<sup>われ</sup>は此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>を平<sup>たひら</sup>けく

治<sup>をさ</sup>め鎮<sup>しづ</sup>むる大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>の教<sup>をしへ</sup>を宣<sup>の</sup>ぶる宣<sup>せん</sup>傳<sup>でん</sup>使<sup>し</sup>

決<sup>けつ</sup>して憎<sup>にく</sup>しと思<sup>おも</sup>はない汝<sup>なんぢ</sup>に潜<sup>ひそ</sup>む曲<sup>まが</sup>神<sup>かみ</sup>を

一<sup>ひと</sup>日も早<sup>はや</sup>く取<sup>と</sup>り除<sup>の</sup>けて誠<sup>まこと</sup>の道<sup>みち</sup>に救<sup>すく</sup>はむと

願<sup>ねが</sup>ふばかりの我<sup>わが</sup>心<sup>こころ</sup>さはさり乍<sup>なが</sup>ら三<sup>あな</sup>五<sup>なひ</sup>の

道<sup>みち</sup>を教<sup>をし</sup>ふる神<sup>かむつ</sup>司<sup>かさ</sup>其<sup>そ</sup>の身<sup>み</sup>を忘<sup>わす</sup>れてアルプスの

神<sup>かみ</sup>の教<sup>をしへ</sup>に立<sup>た</sup>て籠<sup>こも</sup>る鷹<sup>たか</sup>依<sup>より</sup>姫<sup>ひめ</sup>が計<sup>けい</sup>略<sup>りやく</sup>を

事<sup>こと</sup>も細<sup>こま</sup>かに記<sup>しる</sup>したる祕<sup>ひみつ</sup>密<sup>みつ</sup>の鍵<sup>かぎ</sup>を懷<sup>ふところ</sup>に

收<sup>をさ</sup>めて曲<sup>まが</sup>を倒<sup>たふ</sup>さむと思<sup>おも</sup>うたことは玉<sup>たま</sup>治<sup>はる</sup>別<sup>わけ</sup>の

これ一<sup>いつ</sup>生<sup>じやう</sup>の誤<sup>あや</sup>りぞ汝<sup>なれら</sup>等<sup>ら</sup>は之<sup>これ</sup>を携<sup>たづ</sup>へて

高<sup>たか</sup>春<sup>はる</sup>山<sup>やま</sup>に持<sup>もち</sup>参<sup>まゐ</sup>り鷹<sup>たか</sup>依<sup>より</sup>姫<sup>ひめ</sup>に手<sup>て</sup>渡<sup>わた</sup>して

手<sup>て</sup>柄<sup>がら</sup>を現<sup>あら</sup>はし御<sup>ご</sup>褒<sup>ほう</sup>美<sup>び</sup>の金<sup>かね</sup>を澤<sup>たく</sup>山<sup>さん</sup>貫<sup>もろ</sup>て來<sup>こ</sup>い

さすれば汝<sup>なんぢ</sup>が懷<sup>ふところ</sup>はふとつて親<sup>おや</sup>子<sup>こ</sup>が安<sup>やす</sup>々と

たの 樂しき 月日を送るだらう さは云ふものの三人よ

このよ 此世は假の世の中ぞ 萬劫末代生き通す

みたま 靈魂の生命は限りなし なることならば三五の

かみ 神の教に身を任せ 天晴れ世界の鹽となり

はな 花ともなりて香ばしき 實のりを残せ後の世に

かむながら 唯神々々 御靈幸はひましまして

あくま 惡魔の爲に魂を 曇らされたる三人を

なほひ 直日に見直し聞直し 其の過ちを宣り直し

かみ 神の大道にすすくと 歩ませ給へ大御神

うづ 珍の御前に玉治別が 畏み畏み願ぎ奉る

うた と歌ひ終つた。

さん 三人は此歌に感じてか、但は離れ島に捨てられた悲しさに此場を免れむとして  
いちど か、一度に玉治別に向つて両手を合せ、涙を流して改心の意を表す。空助は舟

を岩の前に近づけ乍ら、

空助「オイ三人の男、汝の片割れ三州、甲州、雲州の三人は俺の館に乗り込んで金銀の小玉を全部貰つて歸りよつた。汝は玉治別の懐中せるアルプス教の書類を狙つてゐるさうだ。併しそれを鷹依姫に届けてやつたところで、餘り大した禮物もくれはしよまい。生命を的にそんな欲の無い小さいことを致すな。改心するなら今だ。何と云つても此の離れ島に捨てられては汝も浮ぶ瀬はあるまい。サア改心を誓ふか何うだ、改心致せば此舟に乗せて助けてやるが」

三人は口を揃へて、

「改心します。何うぞ赦して下さいませ」

空助「玉治別さま、貴方のお考へは何うでせうか」

玉治別「改心さへしてくれただならば四海兄弟だ、何處までも助けたいものですな」

「そんなら助けてやらうか」

お初は首を左右に振り、

「お父さん、斯んな人を助けたつて直に又悪いことを致しますよ。暫くこの離れ

島に預けて置いたがよろしいでせう」

遠州「モシモシ小さいお方、お前さまは年にも似合はぬ、【きつい】人だな。そんな事を云はずに何うぞ助けて下さいな。屹度改心しますから」

「イエイ工貴方は未だ未だ改心が出来ませぬよ。サア、お父さま、早く艫を操つて下さい。小父さま、櫂を漕いで下さい。私も手傳ひませう」

「ア、さうだ。子供は正直だ。此奴等可愛いと思へば、暫らく岩の上に預けて置いた方が將來のためだらう。サア、空助さま、彼方へ進みませう」

と湖中の岩島を後に、高春山の東麓を指して矢を射る如く進み行く。

不思議や湖水の水は見る見る水量増り、さしもに高き湖中の巖も次第々々に水中に没し、早くも足許まで波が押寄せて来た。刻々に増る水量に三人は、最早首の邊りまで浸つて了つた。

(大正一一・五・一九 舊四・二三 外山豊二録)

第九章 改悟の酬〔六八三〕

雨もなきに湖水の水量は増りゆき、最早三人の鼻の位置まで水は漂うて来た。湖水に聳り立ちたる一つ岩も今は水中に没し、黒い頭が三つ許り湖面に浮かんで居る様に見えた。月は俄に黒雲に包まれ、咫尺を辨ぜざる細かき雪は俄に降り来り、寒冷身をきる如くなり、その生命瞬間に迫るを、三人は如何はせむと相互に心を揉み乍ら、尚も神を念ずる事を爲さずありけるが、忽ち暗黒の水面をパツと照らして入り来る三箇の火球ありて三人が身の上下左右に荒れ狂ふ。湖水は二つに割れたりと見るや湖底より美はしき三柱の女神、左手に小さき玉を捧げ、右手に鋭利なる兩刃の劍を抜き持ち乍ら、徐々と三人の前に現はれ来りしが何時の間にか岩は水面に高く現はれける。而して岩島の根には一滴もなき迄、水は左右に分れて干上り、三人の女神と見えしは誤りにて、さきに立ちたるは六歳のお初、次に玉治別、次に空助の大男なり。

遠州「ヤア貴方は玉治別さま、何卒生命ばかりは助けて下さい」

玉治別 此湖水は八岐大蛇の眷族の大蛇の棲處である。此湖の水を左右に割つたのは全く大蛇の仕業であるぞ。早く心の底から悔悟を致し、誠の道に立ち歸れば宜し、さなくば斯くの如く神變不可思議の神術を以て、汝を飽迄も懲しめてくれむ。いつ迄も我を張るならば大蛇の腹に葬られる様な事が、今眼前に突發するぞ

駿州 何卒今度ばかりはお助け下さいませ。決して悪事は致しませぬ

湖水は見渡す限り次第々々に水量減じて、遂には湖底まで現はれ来り、只一條の川、真ん中を流るのみとはなりぬ。

此時又もや空助、玉治別、お初の三人は宣傳歌を歌ひ乍ら此場に近寄り来る。其歌、

空助 瀨織津姫大神の 神言畏み玉治別の  
神の使は津田の湖 枉津の棲處を言向けて  
世の災患を救はむと 心に腹帯、時置師  
神命の世を忍ぶ 賤の樵夫と身を竄し

名も空助と改めて  
津田の湖をば根底より

清めむものときを待つ  
折しもあれや三五の

神の教の宣傳使  
玉治別が訪ね来て

執着心の深かりし  
妻の靈魂を弔ひつ

根底の國の苦みを  
救ひ給ひし神恩に

報いむ爲と今此處に  
娘お初と諸共に

現はれ來り玉の緒の  
生命救ひし其上に

鼓の瀧に現はれて  
鋼の鍬を打ち揮ひ

さしもに堅き岩石を  
きつて落せば忽ちに

底を現はす津田の湖  
ここに三人はイソイソと

遠州武州駿州の  
生命を託けた一つ岩

來りて見れば此は如何に  
我等が姿か幻か

寸分違はぬ三柱の  
女神は此處に現れましぬ

神の恵の御光に  
今は漸く照らされて

靈肉一致の清姿

最早我等は神界の

誠の道の太柱

實に尊さの限りなり

ア、三人の人々よ

今より心を取直し

小さき欲を打ち捨てて

萬劫末代萎れない

誠一つの花咲かせ

味も香もある桃の實の

神の御楯と逸早く

成りて仕へよ現世は

夢幻の浮世ぞや

幾千代までも限りなく

生命榮えて神の國

生きたる儘に神となり

世人を救ふ人となり

早く心を改めて

我等に従ひ來れかし

玉治別

高春山は高くとも

鷹依姫は猛くとも

誠一つの言靈に

服へ和すは眼前



あゝ惟神々々かむながらかむながら 御靈幸はひましまして  
 我等を始め空助師はじもくすけし 神の化身のお初嬢かみけしんはつぢやう  
 厚く守りて此度のあつまもこのたび 言靈戦ことたませんに恙つつがなく  
 全き勝利を得させかしまつたしやうりえ 此三人の肉の宮このさんにんにくみや  
 洗ひ清めて靈幸はふあらきよたまち 神の尊き宮となしかみたふとみや  
 神政成就の神業しんせいじやうじゆしんげふに 使はせ給へ天教山つかたまてんけうざんに  
 永久に鎮まる木の花姫とほしづはなひめの 神の命かみみことや齋苑館いそやかた  
 治めまします素盞鳴をさひそおにをろちの 神の尊かみみことの御前おんまへに  
 心に潜む鬼大蛇こころひそおにをろち 醜女探女しこめさぐめも喜びよろこびて  
 誠の神まことかみとなり變りかは 此肉體このにくたいを何時迄いつまでも  
 いと健すこやかに現世うつしよに 立ちたて働はたらく神代かみしろと  
 守らせ給へ惟神まもたまかむながら 御靈幸はひまませよみたまさち

と玉治別たまはるわけが聲こゑを限かぎりに歌うたひ終をはれば、今迄いままで現あらはれたる三人さんにんの姿すがたは、  
 又またもや元もとの女めが神かみ

となつて天女の舞を舞ひ乍ら、中空さして昇り行き、遂には神姿も見えずなり  
けり。遠州、駿州、武州の三人は涙を瀧の如くに流しつつ感謝に咽ぶ。三人の背  
後よりは紫の雲、シユウシユウと湯煙の如く音をたてて頭上に高く立昇り、其中  
より蜃氣樓の如く三人の女神現はれ給ひ、右手に鈴を持ち、左に日月の紋を記し  
たる扇を開いて中空に舞ひ狂ふ。之ぞ遠州、駿州、武州三人の副守護神が體を離  
れたるより、その精靈中の本守護神は喜び給ひて其神姿を現はし歡喜の意を表し  
たるなりき。一同は此奇瑞に感歎し天津祝詞を奏上する折しも、雲州、三州、甲  
州の三人は、容色艶麗なる女神の手を引き、空助の前に現はれて、前非を悔い涙  
を流して合掌する。三人に手を引かれて此處に現はれし女神を見れば、こは抑如  
かに、十年以前の壯健なりし花の盛りのお杉が姿なりければ、空助は思はず知ら  
ず、

「ア、女房の精靈か、能くも無事に居てくれた」

「お母さま、よう来て下さいました」

とお初はお杉の精靈に取りついて嬉し涙に泣き崩る。甲州、雲州、三州の三人

の後よりは又もや紫雲立ち昇り、以前の如く美はしき女神現はれ空中に舞曲を奏し、之亦雲中に神姿を隠しける。

暴悪無道の盜賊、三州、雲州、甲州も空助が娘のお初の誠心に絆され、一旦金銀は奪ひ取りて歸りしもの何となく後髪引かる心地して、お杉の墓に知らず識らず引き寄せられしが、此時墓より又ツと現はれし影は、瘦せ衰へて死したる筈のお杉にして、中肉中背の色飽迄白く元氣飽迄旺盛なる姿なりけり。お杉は之より娑婆の執着心をさり天國に上り、後に殘せし夫竝に一粒種の我娘の幸福を祈り、尊き天人の列に加はりける。之を思へば恐るべきは執着心と欲望なり。あゝ惟神靈幸倍坐世。

之より玉治別は遠州以下五人に諄々として誠の道を説き、再會を約して此處に別れを告げ、空助、お初と共に艱難を冒して、鷹依姫の割據せる岩窟に向つて宣傳歌を唱へながら勢よく登り行く。

(大正一一・五・一九 舊四・二三 北村隆光録)

第三篇 男女共權

第一〇章 女權擴張（六八四）

吹雪烈しき山の奥

龍國別の宣傳使は

高春山に向はむと

猿の聲に耳打たれ

心イソイソ進み行く

人煙稀なる谷の道

雪に埋もれ「ゆき」暮れて

路傍に立てる岩蔭に

少時息をば休めける。

谷の片方の突出た岩の蔭に身を寄せ、一夜を明かす事となりぬ。龍國別はウツ  
ラウツラと眠りに就きけるが、フト耳に入りしはなまめかしき女の聲、驚いて目

を醒ませば妙齡の美人、鬢のほつれ毛を頬の邊に七八本垂れ乍ら、稍憂ひを含み、一人の赤兒を抱き前方に立てり。

「此眞夜中の雪路に女の一人、而も乳呑兒を抱いて、何處へ御出でなされますか」  
「ハイ妾は浪速の者で御座います。高春山の鬼婆に拐かされ、日夜責苦に遇ひ難澁を致して居りましたが、情あるカーリンスと云ふ婆アの部下に想ひをかけられ、ソツと救はれて此處迄逃げ歸りました。併し乍ら何時追手がかからうやら知れませぬ。どうぞ助けて下さいませ。妾としても此寒さに凍え、身體強直して一歩も進む事が出来ないで御座います。どうぞ火が御座りますれば暖取らして下さいませぬか」

「それは御難儀な事でせう。此處へ木の葉を集めて焚く譯にもゆかず、困つたものですなア」

「どうぞ貴方の暖かいお體の温みを分けて頂くことは出来ますまいか。最早斯うなつては、恥も何も構うて居れませぬ。全身の血液が凝固しさうに御座いますワ」  
「アー困つた事だなア。今高春山の魔神の征服に向ふ途中、女の肉體に觸れると

云ふ事は絶対に出来ない。何か良い考へは出ぬものかなア」

と四邊を見廻せば、雪明りに目に付いたのは一束の枯柴、突出た岩に蔽はれて乾いた儘に残つて居る。

「ア―此處に結構な薪がある。何人が刈つて置いたか知らないが、これも神様の御蔭だ、これを焚いて暖を取つたら如何でせう」

「それは好都合で御座います。どうぞ燃やして下さいませ。しかし餘り大きな火を焚くと追手の目標になつては困りますから……」

「宜しい宜しい、小さく燃やませう。しかし雪の足形を索ねて追手が来るかも知れずまい」

「お蔭で足跡は降る雪が次々に埋めてくれましたから、大丈夫で御座います」  
龍國別は燧を打ち火を出し、薪に點けて暖をとり、女も嬉しげに手を炙つて居る。

「いまのあなたの御話に依れば、高春山へ囚はれて居られたとの事、然らばアルプス教の内幕はよく御存じでせうな」

「ハイよく承知致して居ります。到底あなた方が三人や五人お出でになつた所で、飛んで火に入る夏の蟲ですよ、お止めになつた方が却てお身の爲だと思ひます」

龍國別は不機嫌な顔で、

「假令幾萬の強敵があらうとも、一旦我々は言依別の教主より任命された以上は、一つの生命が無くなつても、此使命を果さねばならないのだから、行く所迄行く積りです」

「それは大變な御決心で結構で御座います。妾もあなたのような氣の強い御方と手を曳いて、今迄鬼婆が妾に加へた慘虐の恨みを晴らしたいのですから、どうぞ伴れて行つて下さいませぬか」

「イヤ滅相も無い。女の方と道伴れなんか出来ずものか。又あなたに助けられて、魔神の征服に行つたと云はれては、末代の恥辱ですから、それだけは平に御断り致します」

「随分お堅い方ですなア。さう云ふ堅固な精神の夫が、妾も持つて見たう御座います」

「コレコレ女中、戲談も良い加減になさいませ。貴女は赤ん坊を懐に抱いて居るぢやないか。立派な夫があるに相違はありますまい」

「イエイエ、夫はまだ持った事は御座いませぬ」

「夫が無いのに兒があるとは、一つの不思議ではありませぬか」

「ホ、ホ、ホ、ホ、三五教の宣傳使にも似合はない事を仰有いますこと。玉照姫様の

御生母のお玉さまは、夫なしに妊娠なさつたぢやありませんか」

「それはさうだが、ああ云ふことはまた例外だ。普通の女にさう云ふことがある

道理がない」

「妾を普通一般の女と御覽になりましたか」

「サア別に斯う見た所では、何の變つた點もなし、判別がつきませぬワイ」

「妾の素性が分らない様な事では審神者も駄目ですよ。どうして高春山の魔神を歸順させる事が出来ませうか」

「これは又妙な女に會つたものだ。お前は要するに化物だらう」

「何れ化物には違ひありません。併し化物にも善と悪とがあります。其審神者を



して下さいな」

「此雪の降るのに、一人で山路を赤兒を抱へて歩くところを見れば、先づ立派な者だなかりそうだ。鷹依姫の悪神に苦しめられて逃げて歸つたところを見れば、どうせ碌なものぢやなからうて」

「鷹依姫に苦しめられた様な女だから、碌な者で無いと仰有りますが、現在玉照姫様をお生み遊ばしたお玉の方は、三國ヶ嶽で蜈蚣姫に苦しめられたぢやありませんか。あなたとの判断は正鵠を缺いで居ますよ。お玉さまは立派だが、妾は雪路を夜中に歩いて居るから怪しいと云ふ事が先入主になつて、お目が眩んだのぢやありませんか」

龍國別は兩手を胸のあたりに組んで太息をつき考へ込む。女は薪を先繰り熏べる。二人の顔は益々明かになつて來た。龍國別はフト女の顔を見ると、二つの耳が馬の様にビリビリと動いて居るに氣が付いた。

「あなたの耳はどうしましたか。人間なれば耳は動かないのが通例だ。お前さまの耳は不随意筋が発達して居ると見えて、畜生の様に自由自在に動く。コレヤ屹

度と魔まし性やうの女をんなに相さう違あるまい□

「オホ、、、耳みみが動うごくのがそれ丈だけ氣きになりますか。あなたは耳所みみどころか肝腎かんじんの靈魂みたままで頻しきりに動搖どうえつし、ハートには激浪怒濤げきろうどたうが立たち騒さわいで居をるぢやありませんか。それの方がよつ程ほど可笑をかしいワ、ホ、、、、

「ハーテナ。ますます分わからなくなつて來きたワイ□

「本當ほんたうに妾わたしだつて、あなたの様やうな分わからぬ宣傳使せんでんしに出會であうた事ことはありませぬワ。神かみ様さまはイロイロ姿すがたをお變へんじ遊あそばすぢやありませんか。木この花姫様はなひめさまを御覽ごらんなさい。龍りう體たいにもなれば、獸けだものにもなり、立派りっぱな神かみの姿すがたにも現げんじ、乞食こじきにまで身みを賣やつして衆生しうじや濟度うさいどを遊あそばすのに、妾わたしの耳みみが動うごいたと云いつて輕率けいそつにも獸扱けものあつかひなさるのは、チツト聞きこえないぢやありませんか□

龍國別たつくにわけは、

「ハーテナー□

と云いつた限きり、又また俯向うつむく。

「ハテナハテナと何程なにほど仰有おつしやつても、あなたの身魂みたまが磨みがけねば、此この談判だんぱんは何時いつまで

も果てませぬ。ハテ悟りの悪い宣傳使だこと、ホ、ホ、ホ、ホ、

「兔も角今日は本守護神が不在だから、番頭の副守護神が發動して居るので、根  
つからお前さまの審神も出来ない。本守護神が歸つてから、ユツクリと御答を致  
しませう」

「ホ、ホ、ホ、ホ、うまい事仰有いますこと。一時遁れの言ひ譯でせう。そんな瘦我  
慢を出して我を張らずに、男らしくスツパリと、身魂が曇つて居るので分らない  
から……と仰有つたらどうです。妾の素性を明かす爲に、今此處で羽衣の舞を舞  
うて見せますから、どうぞ此赤ん坊を一寸抱いて下さらぬか」

「何は兔もあれ、旅の慰めだ。審神を兼ねて其舞を拜見致さうかなア」

「どこまでも徹底的に、我が強いお方ですこと、ホ、ホ、ホ、ホ、」

「我が無ければならず、我があつてはならず、我は腹の中へキユツと締め込み  
落ちていて居る身魂でないと、誠の御用は出来ませぬワイ」

「ホ、ホ、ホ、ホ、三五教の御神諭を其儘拜借して、巧妙い事仰有りますこと」

「日進月歩の世の中、知識を世界に求めると云つて、善い事は直に取つて我物と

するのが、豁達自在の文明人としての本領だ。お前さまは浪速の土地に生れたものだと云つたが、文化生活と云ふものはどんなものだか知つて居るかい」

「ホ、ホ、ホ、ホ、文化生活が聞いて呆れますよ。そんなことは疾の昔に御存じの妾、文と云ふのは蚊の活動する羽翼の聲……一秒時間に何萬回とも知れぬ羽翼の廻轉から起る聲音ですよ。化と云ふのは人の禪で相撲をとつたり顔を舐めたりして、生血を絞り自分一人うまい汁を吸ふと云ふ生活でせう。體主靈從、我利々々亡者の充滿した世の中を矯直す爲に、國治立大神が變性男子の生宮を借つて教を垂れさせられ、其御心を世界に宣傳するお前さま達が、惡逆非道の利己主義の文化生活主張するとは、逆様の世の中とは云ひ乍ら、實に矛盾したものですなア。それだから神様がこれ文澤山の宣傳使があつても、誠の解つた者は一柱も無いと云つて、御悔み遊ばすのですよ。三五教を破る者は依然三五教にあるとは千古不磨の金言ですワ。妾は此第一言に對し無量の感に打たれて居ます。サア妾がこれから羽衣の舞を舞うて、尊き天の神様を御招待申上げ、貴方の心の岩戸を開いて見せませう。どうぞ此赤ん坊を抱へて下さいませ」

「随分愛らしいお子だ。併し男ですか、女ですか」

「三十三相揃うた女です。女の赤ん坊です」

「ヤアそれならば御免蒙りたい。女を……假令子供にもせよ、魔神の征討に上る我々、抱く譯には行きますまい」

「何を仰有いますか。女位世の中に潔白なものはありません。あなた方は二つ目には婦人に對し、輕侮の目を以て臨まれるのが怪しからぬ。我々は新しい婦人となつてどこまでも女權擴張をやらねばならない。婦人の代議士さへ選出される世の中に何と云ふ頭腦の古い事を仰有るのでせう」

「何と云つても、男は陽、女は陰だ。おまけに月に七日の汚れがある。そんな汚れた女に男が觸つてどうなるものか。清きが上にも清くせなくては、神業が勤まりますまい」

「男位不潔苦しい肉體はありますまい。十三元素とか、十五元素にて固め上げた肉體の、半ば腐敗せる熾火の燃える、臭氣の激しい醜體を持ち乍ら、月に一週間づつ汚れを排除し、清められた女の肉體が汚れるとは、ソラまア何とした分らぬ」

事を仰有るのでせう。開闢の初より、女ならでは夜の明けぬ國と云ふぢやありませんか。太陽界を治しめす大神様は男でしたか。木花咲耶姫様はどうでせう。變性男子の身魂、國治立命様の肉の宮は男ですか、よく考へて御覽なさい」

「短兵急にさう攻撃されては、二の矢が繼げませぬ。併し牝鷄曉を告ぐる時は其家亡ぶ、と云ふ事がある。何と云つても牝鷄は牝鷄だ。何程女が男の眞似をしようと思つても、第一體格が劣つて居る。鼻下に髭もなければ、腮髭もない。それから見ても男尊女卑と云ふ事は證明されるぢやないか」

「よく掃清められた庭には、雑草は一本も生えて居りません。鼻の下を長くして女に洩をたらす天罰の酬いとして、雑草がムシヤクシヤと生えて居るのだ。お前さまは髭を大變自慢にして居るが、其髭は男の卑劣な根性を隠す爲の道具だ。つまり世間に卑下をせなくてはならぬ所を、神様のお恵で包む様にして貰つて居るのだから、【ヒゲ】と云ふのですよ、オホ、オホ、」

「どこまでも男子を馬鹿にするぢやないか。俺は天下の男子に代つて、大いに男尊女卑の至當なる道理を徹底させなくてはならない。お轉婆女の跋扈する世の中

だから……」

「ホ、ホ、ホ、男位得手勝手な者がありませうか。女房に口の先でウマイ事ばかり言つて、社交の爲だとか、外交手段だとか、甘い辭令を編み出して女房の手前を繕ろひ、狐鼠々々と家を飛び出し、スベタ女に酌をさせ、涎をたらして、間がな隙がなズボリ込み、スゴスゴと家へ歸つては、山の神に如何してウマク辨解しようかと、そんな事ばかりに心を悩ましてゐる、腑甲斐ない男は、世界に九厘と云つても差支ありません。ヤツパリ女は家庭の女王ですよ。女がそれ程卑しいものなら、なぜ亭主になつた男はそれ丈女房に遠慮をしたり、辨解をするのだらう。何と云つても男は下劣ですよ。天下の事は一切女でなければ解決はつきますまい」

「お前さまは浪速の土地に生れた丈に、新刊雑誌でも澤山に嚙つて居ると見え、随分口先は巧妙いものだなア」

「日進月歩の世の中、一日新聞紙を見なくても雑誌を繕かなくても、社會に遅れて了ふのですから、女は十分に時勢に遅れない様に注意を拂つて居りますよ。男

の様にスベタ女の機嫌を取つたり女房の顔色を見て辨解ばかりに心力を費消する  
野呂作とは、大に趣が違ふのです。グツグツして居ると、今に女尊男卑の實が現  
はれ、亭主は赤ん坊を背にひつ括り、鍋の下から、走り元から、何から何まで、  
女房の頭使に従つて、御用を承はらねばならぬ様になつて來ますよ。現に今でも  
チヨコチヨコ、さういふ事が實現して居ます。女は長煙管を銜へながら、腮で指  
圖をして居る例は澤山あるのです。これも時代の趨勢だから、坂に車を押す事は  
出來ませぬ。男子は須らく沈黙を守り、從順の態度を執るのが、今後の男子の立  
場として安全第一の良法と考へますワ、オホ、オホ、

「イヤもう是れ位で、女權擴張論の演説は中止を命じませう」

「そんなら此赤ん坊を抱いて呉れますか」

「エー仕方がない。そんなら今日に限りて女尊男卑の實を示しませう。併し明日  
からは捲土重來、男子の爲に大氣焰を吐いて、現代のハイカラ婦人の心膽を寒か  
らしめる覺悟だから、其積りで應戰準備をなさるが良からう」

斯かる所へ何處ともなく「ブーブー」と法螺貝を吹く聲、笏に響き出した。女



はあたりをキヨロキヨロ見廻し、心落つかぬ様子である。ザクザクと雪踏み鳴らし、此場に現はれた大の男、此態を見て、

「汝魔性の女、そこを動くなッ」

と大喝した。女は乳呑兒を火中に投じ、忽ち金毛九尾白面の悪狐となつて、宙空をかけり姿を隠したり。龍國別はこれを見て肝を潰し、夢心地に入つて了つた。又もや大空に美妙の音楽が聞えて來た。ややあつて又もや降る天女の姿、巨人の前に現はれて、

「ア、其方は鬼武彦様。よく龍國別を助けて下さりました。妾は聖地に於て龍國別が危急を悟り、取る物も取敢へず救援に向うた言依別の本守護神言依姫で御座ります」

「何、これしきの事に御褒めの詞を頂戴致しまして、實に汗顔の至りで御座ります。併し龍國別、玉治別、國依別の三人では、餘りに高春山の征服は、荷が重すぎる様ですから、私に加勢を命じて頂けませぬか」

「彼等三人の、今度は卒業試験も同様ですから、どうぞ構へ立てをしてやつて下

さりますな。併し乍ら危急の場合は、御助勢を願ひおきます。サアこれから聖地を指して歸りませう。』  
と二人は雲に乗り、中空に姿を隠したり。又もや降り来る雪しばき、嵐の音に目を醒せば岩窟の前に火を焚き、其正中に巨岩が放り込まれてあつた。赤兒と見え  
たのは、此の岩石である。龍國別は夢の醒めたる心地して、夜明けに間もなき雪空を、宣傳歌を歌ひ乍ら前進する。

ア、惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・五・二〇 舊四・二四 松村眞澄録)

## 第一章 鬼娘(おにむすめ) 一六八五

白雪皚々として四面の山野、白布の褥を被つた如く満目蕭然として一點の塵を留めず、道問ふ人もあら風に向つて進む龍國別の宣傳使は、刻々に降り積る雪を

踏み分け、漸く谷と谷との細き十字路頭に出でたり。

太陽は雪雲にしきられて光を中空に包み、東西南北の方向さへも判らなくなつて来た。日は漸く雪雲の西天に没したと見えて、何とはなしに薄暗く寂し。されど雪の光に四面は月夜の如く朦朧と光つてゐる。龍國別は五尺有餘の雪に鎖され進退谷まつて、最早凍死せむばかりに困しみつつ、言靈の續く限り天津祝詞を奏上し、夜の明くるを待つ止むなき破目とはなりぬ。

僅か一里許りの山路に一日を費やしたるを見れば、如何に通路の困難なりしかを察するに餘りあり。眞白の雪の中より白き影、むくむくと膨れ出し、一塊の白き立姿となつて龍國別が佇む前に現はれ來り、物をも言はず冷たき手を伸ばして、龍國別の手を執り進んで行く。

龍國別は心の中に怪しみ乍ら、最早如何ともすること能はず、怪物に手を引かれたる儘に不安の念に驅られて進み行く。怪物は小山の麓の荒屋の中に、龍國別を誘うた。

如何なる方が存じませぬが、雪に鎖され身動きもならず、困難の處へお出で下

さいまして、斯様な安全地帯へ御案内下さいましたのは、誠に有難う存じます」

「汝は蜈蚣姫の部下か、但は言依別命の部下なるか、返答次第で吾々にも一つの考へがあるから、敵か、味方が聞かして欲しい」

「さう云ふ貴方は、何と云ふ御婦人でございますか」

「貴方の返答を聞くまで申すまい。吾々の敵ならば今此處で、汝を征伐せなければならず、もし味方ならば何處迄も助ける覺悟だよ。サア、バラモン教か三五教か、二つに一つの返答を聞きませう」

「假令バラモン教でも、三五教でも誠の道に變りはありません。私は誠の道の宣傳使です。三五教、バラモン教、又アルプス教と云ふやうな區分した名稱に、餘り重きを置いては居りませぬ」

「それは誰しも同じこと。併し今汝の屬して居る教派は、何教だと尋ねてゐるのだ」

「何教でも好いぢやありませんか。兔角天下國家の爲に最善を盡くすのが、宣傳使の天職だと心得てゐます」

「アハ、ハ、ハ、どうも卑怯千萬な男だこと。三五教なら三五教だと、キツパリ云つたら如何ですか」

と最後の一言に力を籠め雷の如く唝鳴り立てた。見ればその怪物は拳のやうな目玉をクルクルと廻轉させてゐる。

「先程より妙なことを尋ねる怪物だと思つて居たら、いよいよ怪しき奴だ。其方は古狸であらうがなア。雪に鎖され食料に苦しみ、吾々が腰の辨當が欲しさにやつて来たのだらう。貴様に與へるのは易いこと乍ら、聊か此方が迷惑を致す。マア氣の毒乍ら、此處を早く立去つたがよからうぞ。そんな請求は駄目だから」

「お前は人を救ふ宣傳使ぢやないか。わが身を捨てて人を救はねばならぬ職務にあり乍ら、現在飢餓たる吾々を見殺しに致し、自分さへ腹が膨れたら、それで好いのか、それでも人を救ふ宣傳使と思つて居るか。此世を誑る偽物奴、吾々を化物と申すが、汝こそ眞の化物だ。人間の皮を被つては居るものの、汝が身魂は四足同然ぢや」

「オイ狐か、狸か知らないが、人に食物をねだるのに、そんな驕慢な言葉がある

かい」

「誰が貴様のやうな穢れた人間の所持する食物をくれいと云つたか。吾々は失禮乍ら乞食の眞似は致さぬ。唯一つ欲しいものがある。それを頂戴すれば好いのだ」

「お前の欲しいと云ふのは一體何だ」

「外でも無い。其の高い鼻の先を削つて貰ひたいのだ」

「此鼻は親から預かつた一つの貴重品だ。こればかりは遣ることは出来ない」

「そんなら一つ交換して欲しいものがある。大きな物と、小さい物と交換するの

だから、「どちら」かと云へば俺の方が餘程損がゆくやうなものだが、申込んだ

方から實物の二倍三倍を提供すると云ふことは、現代人間の不文律だから、俺の

物は大きいと交換をして貰ひたい」

「八疊敷と交換して堪るものかい。歩くのに妨害になつて仕方が無いワ」

「アハ、ハ、ハ、人間と云ふものは汚いものだな。直にそんなところへ氣を廻しよる。

俺の要望するのは、そんなものぢやない。貴様は餘り目が小さいから、向ふ先が見えぬ盲目同様の化物だ。それで俺の目と貴様の目と交換して呉れと云ふのだ」

「その様な大きな目を俺の面に當てやうものなら、一つで一杯になつて了ふワ」  
「一つ目小僧と云ふ化物があるそうさ。お前は恰度それに魂が適合して居る。靈肉一致だから交換してくれ」

「一つの目は餘るぢやないか」

「残り一つは後頭部へ付けたらよからう。さうすれば前も後ろも、よくわかつて調法だぞ。サア強壓的に眼玉を抜いて付け替へてやらうか」

「俺は人間様だ。此目で十分に用を足して居るのだ。此の交換は御免蒙る」

「一旦言ひ出した事は後へ退かぬ某だ。そんなら仕方がない。お前の腐つた魂を受取らう」

「馬鹿云ふな。俺の魂は水晶玉だ。何處が腐つて居るか。大きな目を剥きよつて、それが見えぬのか」

「貴様は高城山の山麓、松姫の館に於て四足になつた代物ぢやないか。俺の素性が判らぬ筈はあるまい」

「ハテナー、一體貴様は何者だ。俺の事をよく知つてるぢやないか」

「アハ、、、」

と笑ひ乍ら、被物をツツと脱げばこは如何に、擬ふ方なき松姫であつた。

「ヤア貴女は松姫さま、随分悪戯をなさいますな。本當に肝玉が轉宅しかけましたよ」

「オホ、、、私が松姫に見えますかな。それだから其の眼の玉を交換しようと言つたのだよ」

「そんならお前は何者だ」

「雪の精から現はれた雪姫と云ふものだよ」

「雪にでも靈があるのかなア」

「お前の心の空に眞如の太陽が輝き渡らぬ限り、此の雪姫の謎は解けないよ。曇り切つた今日の空のやうな身魂では、可愛相に目も碌に見えまい」

「毬のやうな目を剥いて現はれて來るものだから、的切り狸のお化と思つたのだ。雪姫はそんなに種々に變化出来るものかなア」

「【ゆき】詰つて、行くに行かぬ橡麵棒を振つた時は、お前でも大きな目を剥



き出して困るだらうがなア。さうだからデカイ【きつい】目に遇うたと言ふのだ。  
モ―一つ御望みなら大きな目を剥いて、御覽に入れようか

「いやモ―澤山だ。【めい】惑千萬、これで御遠慮申して置かう」  
雪姫は、

「これでもかア」

と言ひ乍ら、蛇の目の傘のやうな、大きな目を剥いて見せる。龍國別は驚いて後に倒れる途端に、雪姫は忽ち白狐となつて一目散に山道を驅出し逃げて行く。

「ア、偉いビツクリさせよつた。奴狐の野郎、彼奴の正體がモウ斯う判つた以上は別に怖れることもない。跡追つかけて往生させねば宣傳使の役が勤まらぬ。併しこの大雪の中、四足は歩きよからうが、人間は一寸困るワイ」

と獨語し乍ら四邊を見れば六尺有餘もタマつたと思ふ雪は、僅か一寸許り、狐の足形がついて居る。

龍國別は手を組んでドツカと坐り、

「ア、何の事だ、狐の奴、俺を魅み居つたなア。一日骨を折つて深い雪路を進ん

だ積りだつたが、矢張元の岩蔭だつたワイ。俺はどうかして居ると見える。サアこれから一つ天津祝詞を奏上し、大神の御神力を頂戴して前進することにしよう。思はぬ所で思はぬ夢を見たものだ。どうやら夜が明けたらしい。此の狐の足跡を踏むで行けば、道路が分るだらう。

と薄雪に印した足跡を頼りにドシドシ進み行く。

七八丁許り前進したと思ふ時、一頭の猪が現はれ前を横ぎる。

「ハテ不思議だ。狐の足跡があると思へば又猪だ。今度目は本當の狸の野郎に出會すのかも知れないぞ」

と佇む折しも、何處ともなく空を切つてヒユウと唸り乍ら、頭上を掠めて一本の流れ矢が猪の面部に發止と突立つ。

猪は狼狽へ騒いで轉げ廻り、終に一つの禿山を越えて、向ふの谷に姿を隠したり。

「ア、可愛相なことだ。鳥、獣でも助けるのが吾々の役だ。これや神様が吾々の氣を惹いて御座るのかも知れない。之を見捨てて行つては大變だ。幸ひ薄雪に殘

つた足跡を索ねて、猪のお宿を探し、鎮魂を施して助けてやらねばならぬ。又彼の矢を抜いてやらねば到底助かるまい。何は兔もあれこれを救ふが第一だ」と禿山をトントン登り進み行く。

此處は大谷山の山麓、岩ヶ谷といふ芒の生ひ茂つた、人の行つたことのないやうな草原である。彼方此方に落ちたる血糊を索ねて進んで行くと、其處に一つの岩穴があり、以前の猪は既に縋切れてゐる。

龍國別「ハ、ア此處が猪の棲處だつたなア。それでも途中で死なずに、自分の棲處まで歸つて倒れたのはまだしも、猪に取つては幸福だ。何處ぞ此處に厚く葬つてやらう」

と手頃の石を拾つて、土をカチカチ掘り初める。

岩穴の中より二十五六の女、角を生やして莞爾々々し乍ら出で來り、矢庭に猪の屍骸に取つき血を吸ひ初める。龍國別は黙つて此様子を眺めて居ると鬼娘は、美味さうにチウチウと音をさせて全身の血をスツカリと吸つて了ひ、腹を両手で撫で乍ら龍國別の立つて居るのに氣がついたと見え、目を丸くし、口を尖らし、

「ヤアお前は龍若ぢやないか」

と睨めつける物すごさに、龍國別は、

「オイ、お前はお光ぢやないか。お前の両親は行方が知れぬので毎日日々心配して居つたよ。ウラナイ教の高城山の館へも幾度か参拜して来たが、如何しても知れないので、出た日を命日と定めて立派な葬式を営まれたが、其の時に俺も祭官に列したことがある。サアサアお前は早く親の家へ歸れ。こんな處で鬼娘になつては堪らないぞ。高春山に俺は征伐に行くものだが、これから伴れて行つてやるのは易いけれど、女と同道は許されないから、これから早く家へ歸つたら如何だ」

「コレ龍若さん、私は祖母さんの眉毛を剃つて居ました時、誤つて顔を斬り、澤山の血が出たので、驚いて嘗めて見たところ、それから生血の味をおぼえて、人間や獣の血が吸ひたくなり、到頭こんなに頭に角が生えて鬼娘になつて了つたのだ。斯んな態して如何して我家へ歸れませう。お前さんも私の所在を知つた以上は、村に歸つて喋るであらう。さうすれば私は最早身の終りだから、自分の肉體保護の上から、氣の毒乍らお前の生命を貰ふのだ。覺悟を爲され」

「そんな無茶な事を云ふない。チツとはお前も恩義と云ふことを知つて居るだらう。此の小父さんが貴様の子供の時には、負うたり、抱いたり、小便をさしてやつたり、【うんこ】の掃除まで世話をやいてやつたのを覚えて居るだらう。ちつとは其の義理でも、俺を喰ふなんて云ふことが出来るものか。恩を知らぬものは、人間ぢやないぞ。烏に反哺の孝あり、犬は三日飼うて貰つた主人を、一生忘れぬと云ふぢやないか」

「そんな事が解つて居つて、如何して鬼娘になれますか。世の中の義理や、人情を構つて居つたら、鬼の修行は出来るものぢやない。サア小父さん、此處で逢うたがお前の運の盡きだ。ア、美味さうな血の香がして居る。濟まないけれど【よばれ】ませう」

「コラコラ俺は今迄の龍若とは違ふぞ。神力無限の三五教の宣傳使、言依別命様の御覚え芽出度き龍國別命ぢや。馬鹿な事を致すと地獄の【どん】底へ落されて、鬼の成敗に遇はねばならぬぞ。未來を怖れぬか」

「ホ、ホ、ホ、鬼娘が地獄の鬼が恐くて、如何なりませう。これでも地獄へ行つ

たら、立派な鬼娘が来たと言つて、持離されるのだ。私は鬼になるのが願望だ。  
お前の生血を吸へば、もう一層立派な鬼娘になれる。猪の生血は最早呑み飽いた  
から

如何しても俺を喰ふと云ふのか。イヤ血を吸はうと申すのか

如何しても吸はねば私の身體が燃えて来る。私も苦しいから、義理、人情を省  
みる違がない。併しあんまり御世話になつたのだから、何處とはなしに氣の毒な  
やうな感じがする。【ちつと】ばかり吸うて【こら】へて上げませう

と手頃の石を以て、龍國別の額をカツカツと打つた。龍國別は氣が遠くなり、其  
の場に倒れた。

ア、氣の毒な小父さんだ。澤山呑むと生命が危いから、一二升許り呑んで【こ  
ら】へて上げよう

と傷口に口を當て、チウチウと呑み始めた。

ア、如何したもののか、此の血はエグイ。なかなか苦味がある。矢張身魂が曇つ  
て居ると見えて、流れる血まで味が悪いのかなア。サアサア小父さん、モー【こ

ら】へて上げよう。起きなさい」

と揺り起されて龍國別は吾に歸り、

「ア、なんだか気分がスイツとした。俄に身體が軽くなり、目までハツキリして来たやうだ」

「お前の血管を通つて居る惡靈を薩張吸うて上げたのだから、モ一お前さんは結構な赤い誠の血計りになつて了つたのだよ。此上は最早私の手に合はぬ。お前さんは愈大和魂の生粹になつて了つた。併し此事を誰にも話してはなりません。話すが最後千里向かふからでも私の耳は聞えるから、宙を驅つて行き、お前の素首を引抜くから、其の覺悟でめて下さいや。此處で殺すのは易いけれど、お前に助けられたと云ふ弱味があるので、如何に惡黨な鬼娘でも如何する事も出来ない。併し私と今約束して、それを破れば、初めてお前さんに破約の罪が出来たのだから、其時は堂々と生命を取りに行くから、其の覺悟で歸つて下さい。これで高春山の征伐も立派に出来るだらう。人間萬事塞翁の馬だ。私に酷い目に遇はされて、其結果誠の手柄を現はす様になるので、謂はば私はお前さんの守護神のやうなも

のだ。感謝しなさい」

「妙な理屈もあるものだなア。頭を【こつ】かれ、血を吸はれて感謝するとは、開闢以來聞いたことがない。何處で斯うも勘定が違つたのだらう」

「定つた事だ。處變れば品變る、お家が變れば風變る、郷に入つては郷に隨へだ。世界には賭博のアラを取つて國の會計を助け、國民が安樂に暮して居る國さへもあるぢやないか。また一方の國では賭博を罪惡としてゐるやうなもので、社會が違へば善惡の標準も違ふのだ。併し何處へ行つても約束を破ると云ふ事は罪惡だぞえ。天照大神様と素盞鳴尊様が、天の安の河原を中に置いて誓約を遊ばしたではないか。世の中には現界、幽界、神界の區別なく、約束を守ると云ふことが最も大切なことだ。之を破るのは罪惡の骨頂だ。お前も私の所在を誰にも言はないと云ふことを誓約なされ。さうでなければ、今此處でお前の生命を奪つて了ふ」

龍國別「なに、お前達に生命を奪られるやうな俺では無いが、お前の生命を奪つた所で仕方がない。つまり俺が罪人になるだけだから、此處はうまく妥協して互に言はないと云ふ約束をしよう」



お光「そんなら助けて上げよう。トツトとお歸りなさい。屹度言ひませぬな」  
龍國別「ウン、俺も男だ。屹度約束を守るから安心して呉れ」

お光「左様なら」

と云つた限り、岩窟の中深く影を沒したり。

龍國別は額の傷を撫で乍ら、元來し路へ引返し、それより左に取つて枯草茂る小徑を悄悄と上り行く。

(大正一一・五・二〇 舊四・二四 外山豊二録)

## 第一二章 奇の女(六八六)

龍國別は小聲に宣傳歌を歌ひながら、大谷山の谷深く進み入る。

夕べを告ぐる鐘の聲、諸行無常と鳴り響く。空に烏の幾千羽、埒求めてカアカ

アと物憂げに啼き立つる。身に沁む風は樹々の梢を七五三に揺つて居る。龍國別

は年古りたる松の木立に立ち寄りて一夜の雨露を凌がんと、傍を見れば小さき祠がある。

龍國別「ア、有難い、何れかの神様のお社が建つて居る。大方、山口の神様が祭

つてあるのだらう」

と獨言ちつつ神前に恭しく拍手叩頭し、天津祝詞を奏上し、宣傳歌をうたつて祠の後に横はる。其歌、

三五教の宣傳使

玉治別や國依別の

神の使と諸共に

津田の湖邊に到着し

鷹依姫が力とも

杖とも頼む秘密文

ふとした事より手に入れて 敵の配置を悉く

手に取る如く探索し 茲に間道潜りつつ

山野を傳ひて来るうち 日は漸くに暮れ果てて

行手も見えずなりければ 千引の岩の岩が根に

そつと立ち寄り降る雪を 凌ぎて一夜を明かすうち

現はれ来る妙齡の花をあざむく一婦人

赤子を胸に抱きつつ 寒氣に閉ぢられ手も足も

儘にならねば一夜の 我に暖氣を與へよと

身邊近く襲ひ来る 我は此世を救うてふ

神の教の宣傳使 高春山の曲神を

言向け和し歸るまで 女に肌は觸れまじと

唯一言に斷れば 女は又もや手を合せ

火を焚き呉れよと願ひ入る ふと傍に目をやれば

天の與へか枯小柴 忽ち燧を打ち出でて

火を點ずれば炎々と 四邊は眞晝の如くなり

女の顔はありありと 生地迄スツカリ見えて來た

男尊女卑の言論と 女尊男卑の辨舌に

天の瓊銚（舌）を磨ぎ澄まし 火花を散らして戦へば

女もさるもの中々に

我言靈に怖れない

既に危く見えし時

彼方此方の谷々の

木靈を響かせ進み來る

法螺貝吹いた大男

忽ち此場に現はれて

魔性の女を一睨み

女は驚き抱きし子を

直に火中に投げ捨てて

雲を霞と逃げて行く

我は睡魔に襲はれて

夢路を辿る折柄に

揺り起されて目を開き

四邊きよるきよる見廻せば

大江の山に現はれし

鬼武彦の白狐神

續いて言依姫神

我が眼前に現はれて

急場を救ひ給ひつつ

妙音菩薩の音楽に

連れて此場を消えたまふ

龍國別は唯一人

巖を背にうとうと

睡りながらに明けを待つ

雪は頻りに降り來り

道も塞がり進退の

自由を失ひ「ユキ」詰まる

中をも厭はず荒魂

勇氣を鼓してザクザクと

進む折しもむくむくと

雪の中より現はれし

不思議の女に手をひかれ

破れた小屋に伴はれ

種々雑多の問題を

吹きかけられて困り入り

如何はせんと思ふうち

傘のやうなる目を剥いて

パツと消えたと思ひきや

忽ち變る大白狐

山路を目蒐けて驅出だす

よくよく見ればこは如何に

五尺有餘も積りたる

雪の山路はいつとなく

消えて僅かな薄雪に

不審の胸を抱きながら

ふと傍を眺むれば

豈圖らんや岩の根に

くだらぬ夢路を辿りつつ

心の眼を閉ぢて居た

朝日の光を身に沿びて

此處を立ち出でスタスタと

雪に印した足跡を

索ねて進む折もあれ

雪踏み分けて驅來る

野猪に出遇ひ暫くは

道に佇み眺め入る 空を掠めて何處よりか

白羽の征矢の飛び來り 猪の頭に突き立てば

猪は驚き右左 前や後に狂ひつつ

峰の尾上を打ち渡り 谷間に身をば隠したり

鳥獸の末までも 救ひ助くる神の道

これが見捨てて置かれうか 助けやらんと足跡を

探りて谷間に下り行く 萱茫茫と生ひ茂り

人跡絶えし谷の底 血糊を標べに來て見れば

自然に穿てる岩の洞 其傍に横はる

猪の屍を愍れみて 天津祝詞を奏上し

蘇らせて助けんと 思ふ折しも岩窟の

中より出づる鬼娘 忽ち猪にかぶりつき

血汐を吸ひ込む嫌らしさ はて訝かしとよく見れば

高城山の近村に お龍が娘と生れたる

お光<sup>みつ</sup>の顔<sup>かほ</sup>によく似<sup>に</sup>たり  
お光<sup>みつ</sup>は血<sup>ち</sup>汐<sup>しほ</sup>を吸<sup>す</sup>ひ終<sup>をは</sup>り

我<sup>わが</sup>顔<sup>かほ</sup>じつと打<sup>う</sup>ち眺<sup>なが</sup>め  
お前<sup>まへ</sup>は隣<sup>となり</sup>の小<sup>を</sup>父<sup>ぢ</sup>さまか

お前<sup>まへ</sup>はお光<sup>みつ</sup>か何<sup>なん</sup>として  
この山<sup>やま</sup>奥<sup>おく</sup>に忍<sup>しの</sup>び住<sup>す</sup>む

早<sup>はや</sup>く歸<sup>かへ</sup>れと促<sup>うなが</sup>せば  
お光<sup>みつ</sup>は首<sup>くび</sup>をふりながら

猪<sup>しし</sup>の血<sup>ち</sup>糊<sup>のり</sup>は吸<sup>す</sup>ひ飽<sup>あ</sup>いた  
美味<sup>うま</sup>い香<sup>にほひ</sup>のするお前<sup>まへ</sup>

喰<sup>く</sup>はしておくれと強<sup>ねだり</sup>要<sup>り</sup>よる  
これや大<sup>たい</sup>變<sup>へん</sup>と驚<sup>おどろ</sup>いて

なだめ嫌<sup>すか</sup>しついろいろと  
義<sup>ぎ</sup>理<sup>りにんじやう</sup>人<sup>にん</sup>情<sup>じやう</sup>を教<sup>をし</sup>ふれば

お光<sup>みつ</sup>はフンと鼻<sup>はな</sup>の先<sup>さき</sup>  
馬<sup>ば</sup>耳<sup>じ</sup>東<sup>とう</sup>風<sup>ふう</sup>と聞<sup>き</sup>き流<sup>なが</sup>し

義<sup>ぎ</sup>理<sup>りにんじやう</sup>人<sup>にん</sup>情<sup>じやう</sup>を辨<sup>わきま</sup>へて  
如<sup>どう</sup>何<sup>に</sup>して鬼<sup>おに</sup>になれますか

お前<sup>まへ</sup>の生<sup>いき</sup>血<sup>ち</sup>を唯<sup>ただ</sup>一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>  
飲<sup>の</sup>ましてくれいと云<sup>い</sup>ひながら

手<sup>て</sup>頃<sup>ころ</sup>の石<sup>いし</sup>を手<sup>て</sup>に持<sup>も</sup>つて  
忽<sup>たちま</sup>ち碎<sup>くだ</sup>く我<sup>わ</sup>が額<sup>ひたひ</sup>

血<sup>ち</sup>潮<sup>ほ</sup>は川<sup>かは</sup>と迸<sup>ほとばし</sup>る  
我<sup>われ</sup>は脆<sup>もろ</sup>くも氣<sup>き</sup>絶<sup>ぜつ</sup>して

前<sup>ぜん</sup>後<sup>ご</sup>も知<sup>し</sup>らずなりけるが  
俄<sup>にはか</sup>に吹<sup>ふ</sup>き來<sup>く</sup>る寒<sup>かん</sup>風<sup>ふう</sup>に

眼<sup>まなこ</sup>覺<sup>こ</sup>ませばこは如<sup>いか</sup>何<sup>かに</sup>  
額<sup>ひたひ</sup>は少<sup>すこ</sup>し痛<sup>いた</sup>けれど

靈肉共に清々と 洗ったやうな心地して

鬼の娘と誓約しつ やつと虎口を逃れ出で

崎嶇たる山路辿りつつ 漸く此處につきにけり

月は御空に輝けど 木立の茂み深くして

我影だにも見えかぬる 椿の森の宮の下

明日はいよいよ大谷の 山を踏み越え高春山の

曲の砦に向ふなり あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして 三五教の宣傳使

高姫黒姫兩人を 救ひ出させ給へかし

野立の彦や野立姫 神素盞鳴大御神

木花姫の御前に 龍國別の神司

遙に祈り奉る

と歌ひ終つて古社の床下に横はり居る。



夜は深々と更け渡り、寂然として木の葉のそよぎもピタリと止まつた丑満の頃、猿を責めるやうな女の泣き聲、刻々に近づき来る。龍國別は目を醒まし耳を傾けて、何者なるかと息を凝らして考へて居る。バタバタと數人の足音、女を一人此場に連れ來り、

「サア、もう斯うなつた上は、【じたばた】しても駄目だ。體よくカーリンスの宣傳使の奥さまになつて、左團扇で數多の乾兒を頭で使ふ身分となるのが、却つてお前の身に取つて幸福だらう。土臭い田舎者に心中立てをしたつて何になるか、サア早うウンと云へ」

「お前は立派な男の癖に、私のやうな纖弱き一人の女を寄つて集つて、無理往生をさせようとは些と卑怯ではありませぬか。カーリンスとか云ふ人に、それだけの徳望があれば、天下の女は何程袖で蜂を掃ふやうにして居つても、獅噛みついてゆきます。世間から高春山のカーリンスの鬼と噂され、蝮か蛇のやうに嫌はれて居るお方に、誰が靡くものが有りませう。お前等はその蝮に頭で使はれて居る人間だから、なほ更鼻持のならぬ男だ。エ、汚らはしい、もう觸つて下さる

な  
□

□ 此奴中々剛情な女だ、よしよし貴様がさう出れば此方にも覺悟がある□

□ 其覺悟を聞かして貰ひませう□

□ そんな事は俺達の秘密だ、貴様に聞かす必要が何處にあるか□

□ ありますとも、私は貴方等の目的物、云はば當局者である。秘密を知らずにど

うして一日だつて治まつて行きますか□

□ エ、女の癖に何を「ツベコベ」と吐くのだ、引き裂いてやらうか□

□ 口を引き裂きなさつても宜しい。併し乍ら萬々一私がカーリンスの女房になる

と定つたら、お前は私の家來ぢやないか。さうすれば主人の口を引き裂き、折角

綺麗な女を傷者にしたと云ふ罪を、何うしてカーリンスにお詫をなさるか、お詫

の仕方がありますまい□

□ たつて引き裂かうとは申しませぬ。併し乍ら我々の要求を容れて、奥さまにな

つて下さいますか□

□ ホ、ホ、ホ、好かんたらしい、カーリンスの嫁になる位なら烏の嫁に行きます

ワ

「七尺の男子を貴様は翻弄するのるか」

「定つた事ですよ。女と云ふものは強いものです。女の髪の毛一條あれば大象も繫ぐと云ふ魔力をもつて居る。ヒヨットコ野郎の五人や六人、束になつて來た所が到底駄目ですワ、そんな謀反は大抵にしてお止めなさい。山も田も家も倉も、舌の先や目の先で一遍に消滅させたり、顛覆させたりするのは女の力です。お前達は男に生れたと言つてエラさうにして居るが、多寡の知れた青瓢箪のお化見た様なカーリンスに、口汚なく酷き使はれて、満足をして居るやうな腰抜けだから、思へば思へば氣の毒なものだよ」

「これや女、そんな劫託を竝べる癖に、何故キヤツキヤツと悲鳴を擧げたのだ。そんな空威張りをしたつて駄目だぞ」

「ホ、ホ、ホ、ホ、キヤアキヤアと云ふ聲は泣き聲ですか。お前こそ女の腐つたやうな猿とも人間とも辨別のつかぬ代物は、キヤアキヤアと云うて泣くだらうが、私はお前等のする事が餘り可笑しいので、キヤツキヤツと云つて笑つたのですよ」

「何とマア強太い女もあればあるものだなア。俺は生れてからこんな女に出遇つた事がないワ」

「出遇つた事がない筈、世界の女はお前の姿を見ても、お前の方から風が吹いても、嫌がつて皆逃げて仕舞ふ。それもお前が強いとか、怖いとか云うて逃げるのではない。汚らはしくつて、怪體な臭がして鼻持ちがならないから、化物だと思つて逃げるのですよ」

「仕方のない女だなア。こんな女を連れて歸つて、カーリンスの奥さまにでもしようものなら、俺達の却つて迷惑になるかも知れやしないぞ」

「ナニ決して迷惑にやなりません。キヨロキヨロ間誤つて居ると、ちよいちよい長煙管がお前等のお頭にお見舞申す位なものだよ。けれども生命には別條はないから安心なさい、ホ、ホ、ホ、ホ」

「女子と小人は養ひ難し、到底辨舌では俺達は敗軍だ。不言實行に限る。サア各自に手足を取り、高春山に歸つてゆかう。これや女、何んぼ頭が達者でも直接行動には叶ふまい、男は口は下手だが實地の力は強いぞ」

「ホ、、、、、、 たつた一人の纖弱い女に對し見つともない、五人も六人も一丈の禪をかいた荒男が、蚯蚓を蟻が寄つて集つて巢へ引き込むやうにせねば、一人の女を引捉へて、その目的を達する事が出来ないとは、何と男程困つたものはないものだなア」

「偉さうに云ふない、男は裸百貫と云つて、體が一つあれば世の中に立派な一人前の大丈夫として通用するのだ。女は蔭ものだ。もつと女らしく淑やかにしたら如何だい。女の徳は柔順にあるのだぞ」

「私は柔順なんか大の嫌ひだ。私の女としての徳は柔術だ。一つ見本にお前達六人を、お月さまの世界迄も放りあげて見ようか」

「オイ皆の奴、如何しようかなア。こんな女を迂闊連れて歸らうものなら、何んな大騒動が勃發するか知れたものぢやないぞ」

「それだと云つて、連れて歸らねばカーリンスの親方に合す顔がなし、困つた事になつたものだなア」

「一つ柔術をお目にかけてませうかな、オホ、、、、」

「エ、この上は直接行動だ。乙、丙、丁、戊、己、一度にかかれ」

「ヨシ、合点だ」

と六人の男は手取り足取り無理に女を擔ぎ行かむとする。女は又もやキヤツキヤツと頻りに叫ぶ。祠の後より、

「暫く待てツ、自在天大國別命これにあり、申し渡す仔細がある」

と雷の如く唝鳴りつけた。六人は女を其場に投げ捨て雲を霞と逃げ散つた。女は静々と神前に詣で、拍手しながら何事か暗祈黙禱をして居る。

(大正一一・五・二〇 舊四・二四 加藤明子録)

### 第一三章 夢の女(六八七)

龍國別は祠の下より蜘蛛の巣だらけになつて現はれ來り、あたりの木の葉や枯枝を集め、社側の廣場に火を焚いた。此火光に照らされて以前の女は、艶麗譬ふ

るに物なく、暗よりポツと浮出たかの如うに輪廓も判然として、龍國別の前に徐々  
近寄つて来た。

「ヤア何處のお女中か知りませぬが、大變な危い事で御座いましたなア」

「ハイ私は此里のもので、お作と申す一人娘で御座います」

「貴女は御兄弟はありませぬか」

「兄が二人、弟が一人、さうして兩親共壯健に暮らして居ります」

「それは何よりお目出度い事で御座います。併し乍ら此眞夜中にどうして、あの  
様な惡漢が貴女を引攫へたのでせう。貴女は女に似ず夜徘徊をなさいますと見え  
ますなア、それ丈親もあり御兄弟もあれば、何程無茶な奴でも、貴女の家へ乗込  
むことは出来ませぬに」

「ハイ妾は恥かし乍ら一つの御願があつて、何時も此山口の宮様へ丑満の刻に、  
親兄弟にも知らさず、參詣を致して居りました。今日は三七二十一日の上りで御  
座ります。然るにどうして妾のお宮詣りを覺つたか知りませぬが、此お山の入口  
に彼等が待伏せして、妾を惟神にお宮の前に連れて来て呉れましたのよ」

「さうして其御願とは如何なる事で御座いますか。何か一身上に關はる御難儀でもおありになるのですか」

「貴方は今社の背後より大自在天大國別命と仰有りましたなア。それは本當で御座いますか。大自在天大國別命様なれば、彼等惡漢の日頃尊敬する、バラモン教やアルプス教の祖神様です。それにも不拘彼等が脆くも逃散つたのは、不思議ぢやありませんか。妾は察するに、どうしても大自在天系統の、貴方の言靈とは受取れませぬ。屹度三五教の宣傳使………」

と圖星を指されて龍國別は、

「イヤもう恐れ入りました、貴女の御明察。さうして貴女の御願ひの筋は、何か六ヶ敷い事が出来て居るのではありませんか」

「妾の一生に取つて一大事が突發したので御座います」

「それや又どういふ理由ですか」

「ハイ妾も最早十八才になりました。彼方此方から嫁にくれいと、父母兄弟に向つて日々迫つて參ります。然し乍ら私としては理想の夫が、まだ一人も見付かり



ませぬ。それ故適當な夫を授けて下さるようにと、今日で三週間お詣りを致しました。神様の夢の御告には、三週間目に宮の前で、一人の男に逢はして遣らう。それがお前の本當の夫だと教へられました。貴方は神様から御許し下された本當の夫、どうぞ可愛がつて下さいませ」

「これはしたりお女中、聊か迷惑のお言葉」

「ホ、ホ、ホ、迷惑と仰有いますか、貴方は女はお嫌ひですか。廣い世の中に女嫌ひな男はありますまい」

「男の方から申し込んだ女房なら兔も角も、女の方からさう出られては何だか恐ろしくて、早速に御返事が出来ませぬワ」

「貴方は獨身でせう。奥さんがあれば兔も角、今のお身の上、どうで一度妻帯を遊ばさねばならないのでせう。神の結んだ二人の縁、どうぞ色よき御返事をして下さいな」

「モシモシお作さんとやら、貴女は随分新しい女と見えますなア。世の中が變つて來ると、女の方から男に直接談判を始める様になつて來ると見える。ハテ變れ

ば變るものだワイ」

「どうしても私の様な不束者はお氣に入らないのですか」

「イエ滅相もない。天女の天降りか、辨財天の再來とも云ふ様な立派な綺麗な貴女、花で譬へて見れば、今半開の美しき露を帯びた最中、決して厭でも嫌ひでもありませんが、何を申しても、神命を奉じ高春山に悪魔の征服に参る途中ですか、夫婦の約束なぞ思ひもよらぬ事で御座います」

「それでは女には決して目を呉れないと仰有るのですなア」

「勿論の事です。折角乍ら今日はお断りを申しませう」

「そんなら何時約束を下さいますか」

「刹那心です。明日の事は分らないから、お約束する譯には参りませぬ」

「貴方は高春山の軍功を現はし、其上で天下の立派な女を拔萃して、女房にする考へだから、お前見たやうな草深い山家育ちの女には、目を呉れないと云ふお積りでせう」

「イエイエ決して決して、そんな事は毛頭、心には浮びませぬ。何は免もあれ一

つの使命を果すまでは、女に關係は致しませぬ。神界に對して恐れ多く御座いますから」

「神様は高春山の征服が濟む迄は、女に會つて約束をしてはならないと仰せられましたか、伊邪那岐命、伊邪那美命様は、夫婦水火を合せて、國生み島産み神産みの神業を遊ばしたぢやありませんか。神様も夫婦なくては眞の御活動は出来ません。すまい。陰陽の水火を合して、初めて萬物が發生するのでせう。然るに大切な神業の途中だから、女には絶対に約束せないと仰有るのは、少し合點が参りませぬワ」

「イヤ絶対にと申すのではありませぬが、今度ばかりは何卒許して下さいませ。又首尾好く目的を達した上、御相談に参りませう」

「オホ、、、、勝手なお方、貴方は空助さんの奥さまの葬式までなさつたでせう。それを思へば私と今夫婦の約束を結んだ位が、何故神様のお氣に入らないのでせう。貴方の御神業の妨げになるのでせうか」

「ア、どうしたら好からうかなア。かう追求されては、我々は身の振方に迷はざ

るを得ない」

「宜しいぢやありませんか。これだけ女の眞心を無になされますと、遂には女冥加に盡きて、一代セリバシー生活を送らねばなりませんまい」

「ア、情に脆いは男子の心、さう懇切に仰有つて下さらば、折角のお志、無にするも濟まない様な感じが致します。そんなら此處で約束だけ固めませうか」

此時樹上より「馬鹿ツ」と一喝した。

「折角ながらお作さんとやら、今彼の通り頭の上から私の言葉に對し「馬鹿」と呶鳴り付けました。矢張これは取消しませう」

「男が一旦齒の外へ出した言葉を、無責任にも引込めなさる積りですか。そんな事が出来るのなら、吐いた唾を飲んでも宜しからう。妾は、どうしても此約束を履行して貰はねば承知致しませぬよ」

「まだ約束はして居ませぬ。約束をしようかと云つたまでですワ」

「其お言葉が出るに先立ち、貴方の心の中では既に承諾をしたのでせう。」

人間はば鬼は居ぬとも答ふ可し心の問はば如何に答へむ

貴方は自ら心を欺く積りですか

「さうぢやと言つて、どうしてこれが承諾出来ませう。又頭の上から馬鹿呼ばはりをされますから」

「オホ、、、、あれは何時にも此森に棲まひをして居る、大天狗が云つたのですよ。貴方は結構な神様のお使でありながら、天狗の一匹や二匹が、それほど怖いのですかい」

「何天狗ならば怖くはありませんが、あの言葉は、どうしても私の考へに共鳴して居る様ですから、服従せなくてはなりません。どうぞ此場を見遁して下さいませ」

「エ、男と云ふものは氣の弱いものだなア。もうかうなれば仕方がない」と「いきなり」握手した。

「何んと仰有つても、こればかりは後にして下さい」

「イエイ工何と云つても、妾の願ひを聞き容れて貰はなくては放しませぬよ」

「そんなら、もう仕方がない。サア私から進んで握手致しませう」

と龍國別は右手を延ばして、お作の手を握らうとした。お作は喜ぶかと思ひきや、

「工、汚らはしき三五教の宣傳使龍國別」

と言ふより早く、満身の力を籠めて其場に突き倒した。

「これや怪しからぬ。何としたらお氣に入るのでですか」

「苟くも神命を受けて、曲津の征服に向ふ途中に於て、如何なる切なる女の願ひ

なればとて、堅き決心を翻すとは何事ぞ。かかる柔弱なる汝の魂で、どうして悪

魔の征服が出来ようぞ」

「ハテ合點の行かぬ女の振舞ひ」

と雙手を組んで暫時思案に耽つて居る。忽ち轟く雷鳴にフト頭を上ぐれば、以前

の女は跡形もなく消え失せ、其身は古社の縁の下に眠つて居た。雷と聞えしは社

に棲む古鼠の荒れ狂ふ足音であつた。龍國別は直に神前に額づき、夢の教訓を感

謝し心魂を練つて、愈高春山の征服に向つて進み行く。

第一四章 恩愛の涙〔六八八〕

玉治別は津田の湖水を渡つて、高春山の正面より攻め登り行く。空助はお初を背に負ひ其後に従ふ。日は漸く暮れ果てて、月は雪雲に包まれ、姿も臙氣に天空に明滅して居る。一行は、とある木蔭に立寄りて息を休める折柄に、慌ただしき數多の人の足音、刻々に近寄り来る。玉治別、空助は臙月夜の木蔭に、何事ならむと透かし見れば、一人の女に猿轡を箝ませ、エイヤエイヤと言ひつつ擔ぎ来る。様子あらんと兩人は息を凝らして眺むれば、數多の男は、一人の女を目の前の木蔭の稍廣き所に下し、猿轡を解き何事かよつて集つて、訊問を始め出した。

「コレヤ女、貴様は何處の者だ。白状いたせ」

「妾は都の者で御座います」

「馬鹿を言ふな。此黒い目でチヨツと睨んだら間違はないぞ。貴様は田舎の女であらうがな」

「それを尋ねてどうなさいますか」

「必要があつて尋ねるのだ。綺麗サツパリと白状致してしまへ」

「妾は浪速の都に生れた者で御座います。父もなければ、母もなし、兄弟姉妹もなき憐れな獨身者、此山奥に紛れ込み、あなた方に捉へられたので御座いますが、何一つ悪い事は致した覚えがありません。どうぞ見遁して下さいませ」

「貴様はアルプス教の重要書類を手に入れた奴の女房に間違ひない。サア有體に汝が夫の所在及書類の所在を白状致せ」

「何かと思へば、思ひも掛けぬ妙な御尋ね、左様な事は今が聞始めで御座います」

「汝は三五教の宣傳使の……名は忘れたが……女房であらう」

「イエイエ決して決して、左様の者では御座いませぬ」

「度漣とい、白々しい女だ。假令水責め火責めに遇はしても、白状させねば置く」



ものか」

「何と仰有りまして、知らぬ事は何處迄も知りませぬ」

「此奴ア、一通りでは吐すまい……オイ皆の奴、眞裸にして面白い藝當をやらしてやらうぢやないか」

「よからうよからう」

「一同は泣きひしる女を眞裸になし、

「サア女、ワンと言へ、吐さな、此かつ杭が貴様の頭にお見舞申すぞ」

「何と仰有つても、人間が畜生の眞似は出来ませぬワ」

「出来なくば白状致すのだ。……サア、ワンと申せ」

「一同聲を揃へて、

「ワツハ、ハ、ハ……」

「と笑ふ。忽ち傍への木の小蔭より、

「ヤアヤアアルプス教の悪魔共、よつく聞け。某こそは、湯谷ヶ嶽の麓に於て

英雄豪傑と聞えたる、木挽の空助、本名は時置師神だ。一時も早く前非を悔い、

其女そのをんなに衣服いふくを着きせ、汝等なんぢらは眞裸まっぱだかとなつて四つ這よばいになり、ワンワンと吠ほえよ。違背あはいに及およばば此空助このもくすけが片端かたつぱしから汝等なんぢらが素首そつくびを捻切ねぢきつてやるぞ」

「オイ偉えらい奴やつが斯こんな所ところまでやつて來きやがつたぢやないか。眞裸まっぱだかになつて四つ這よばいになるのは殘念ざんねんだし、どうしようかなア」

「サア、逃にげる逃にげる」

「コレヤ者共ものども、逃にげようといつても、逃にしはせぬぞ。逃にげるなら逃にげて見みよ。四方うはつぱう方に味方みかたの強者つはものを取卷とりまかせ置おいたれば、一寸いっすんでも此場このばを動うごくが最後さいご、汝なんぢの身體たいこは木端微塵こつぱみぢんだ。それでも構かまはねば、どちらへなりと勝手かってに走はしれ」

「オイ皆みなの奴やつ、どうしようかなア」

「何なんと云いつても生命いのちが大事だいじだ。裸はだかになつて、また着物きものを着きれば良いぢやないか。假令たとへワンワンと言いつた所ところで、其儘そのま犬いぬになつて了しまふのでもなし、此處ここは一つ安全策あんぜんさくに、御註文ごちゆうもん通り眞裸まっぱだかとなり、ワンと一聲吠ひとこゑほえて見みようぢやないか」

「此寒このさむいのまっばだかに眞裸まっばだかになつたら、震ふるひあがるぢやないか」

「貴様きさまが寒さむいのも、此女このをんなが寒さむいのも同じ事ことだ。早はやく女をんなに着物きものをお着きせ申まをせ。愚ぐ

圖々々致すと、空助が汝の雁首を引抜かうか

「マアマアマア空助さん、貴方の御芳名は此邊で知らない者はありません。お偉い方と云ふ事は、我々仲間もよく知つて居ります。どうぞ待つて下さいませ」

「早く着物を着せないか」

「ハイ、コラコラ皆の奴、着物を持つて来い。此御婦人に鄭重に着せるのだ」

丙は恐る恐る着物を持つて、コハゴ八女の後に寄り来り、一閒程の距離から、女の背中を目がけてポイと放り、二三閒後ずさりし、木の株に躓いてドスンと尻

餅をつき、「アイタ、」と顔をしかめて居る。女は早速其着物を着け、

「何れの方が存じませぬが、危急の場合、ようお助け下さいました」

「其御禮には及びませぬ。……ヤイヤイ皆の奴、そこに眞裸となつて這はないか。早く這はぬと首を引抜くぞ」

一同はブツブツ小聲に呟き乍ら、眞裸の儘、蛙突這になつて慄うて居る。

「コレコレお女中、其着物をお前さまは御苦勞だが、一々疊んで始末をつけて下さい。さうして一所へ集め、帯でグツと括り、此空助が擔いで津田の湖へ、ドン

ブリと放り込んで了ふ考へだから……」

「モシモシ此寒いのに着物を取られては、息絶いて了ひます。どうぞ着物だけは赦して下さい」

「ヨシ、それなら着物は其儘にして置かう。俺も泥棒になつたと云はれては末代の恥だから……、併し此空助は一度言ひ出したら後へは引かぬ男だ。サア、一度にワンと言へ」

一同は顔を見合せ乍ら、小さい聲で、

「イイ……ワン」

と吠える。

「コレヤコレヤ貴様、ワンの前に何だか付いて居たぢやないか」

「ハイ……イウイウ……幽霊が付いて居りました」

「貴様は……ワンと云ひ乍ら……イワンと吐すのか。どこまでも負けみの強い奴だな。マア一時ばかり……ワンは是れ限りで堪へてやる、其代りに赤裸で辛抱致せ。何程寒くても此空助はカマ「ワン」ぢや、アハ、ハハ、ハハ。モシモシお女中さま、

お前さまは何處のお方だ

「ハイ、妾は宇都山村の者で御座います。老人が急病で困つて居りますので、我夫の玉治別に知らさうと思ひ、聖地へ參つて承はれば、高春山の言靈戦に出陣したとやら、旦夕に迫る父の生命、一時も早く妾も女の身なれども、高春山の言向け戦に御加勢をなし、父の生存中に夫に會はせたいばかりにやつて來ました」

「何、玉治別の宣傳使が貴女の夫とな。コレコレ玉治別さま、奥さまがお見えになつて居ます。なぜ御挨拶をなさいませぬか」

「私は高春山の言靈戦が濟みますまで、女を連れる事は出來ませぬ。斷じて私の女房ではありますまい」

「それでも今本人がさう仰有つたではありませぬか」

「ヤアそれなる女、我女房の名を詐り不届至極な奴、我女房は女々しくも神業のため出陣したる夫の後を追ふ如き狼狽者ではない。假令親の急病なればとて、公私を混同し、夫の大事を誤らしむる如き馬鹿な女房は持たない。何れの女か知らねども一刻も早く此場を立去れ」

お勝は涙を揮ひ、

「あなたの御心中……イヤお言葉はよく分りました。決して妾は玉治別宣傳使の

女房では御座いませぬ」

「不届きな女共奴、我々男子を誑かるとは何事ぞ。……コレコレ玉治別さま、一つ

懲らしめておやりなさい」

玉治別は熱涙を呑み乍ら、お勝の前に進み寄り、

「不届き至極の女奴、汝は眞裸にして河に投げ込んで、尚足らぬ不届な奴なれ

ど、今日は差赦して遣はす。サア早く此場を立去れ。玉治別の女房は決してそん

な未練な譯の分らぬ者ではないぞ。アハ、ハ、ハ、空助さま、妙な奴もあるもので

すな」

「それなる女、汝も必ず夫があるであらう。夫の名譽を毀損する様な行状は決して

致すでないぞや。又汝夫ありとせば、必ず夫の無情を恨んではならぬぞや」

お勝は涙を拭ひ乍ら、

「ハイ妾は御存じの通りの狼狽へた女で御座います。まだ幸に夫は持ちませぬ。

併し乍ら、若し靈魂上の夫がありとすれば、如何なる無情な仕打をなされましても決して恨みとは存じませぬ。女の「はした」ない心から、皆様に御心配をかける様な事は慎みます。これから妾も國へ歸りますから、皆様御安心下さいませ」  
道中は小盗人が往來致して居るから、神言を奏上し、随分氣を付けて歸つたがよからうぞ」

「ハイハイ有難う御座います。あなたの御親切なお言葉はどこまでも忘れませぬ。左様なれば不束者の女、これでお別れ致します。随分皆様、氣を付けてお出でなさいませ。御成功を待つて居ります」

「ヤア御女中、御心底は御察し申す。此空助だとして、血もあれば涙もある。今は何も言はぬが花、又お目にかかる事がありませう」

「ハイハイ有難う御座います」

とシホシホとして足早に後振り返り、振り返り、月夜の木蔭に消えて了つた。

「玉治別さま、妙な事に出會したものですなア。随分神様の御用をして居ると、局面が忽ち一變し、愉快な事があつたり、辛い事があつたり、イヤもう大變に結

構こつな御神徳ごしんとくを頂いただきました。あなたも定さだめて御修行ごしうぎやうが出来できたでせう」

「ハイ有難ありがたう。千萬無量せんばんむりやうの思おもひ……否御神徳いなごしんとくを頂いただきました」

「サアサア小父をぢさま、お父とうさま、ボツボツ参まゐりませう」

空助もくすけは負おうた子こに教をしへられ、浅瀬あさせを渡わたる心地こころにて、森林しんりんの中なかを山上目さんじやうめがけてス  
タスタと登のぼり行ゆく。玉治別たまはるわけは時々太息ときどきふとをつき乍ながら、ワザと元氣げんきを装よそほひ、後あとに従つ  
いて行ゆく。

お勝かつは道々小聲みちみちこゝろゑに歌うたひ乍ながら、足あしを早はやめて歸路きろに就ついた。

「神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと悪あくとを立別たてわける

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし 玉治別たまはるわけと現あらはれて

言依別ことよりわけの神言かみことを 畏かしこみまつり三人連みたりづれ

高春山たかはるやまに潔いさぎよく 出いでます後あとに悲かなしくも

力ちからと思おもふ父上ちちうへは 俄にはかの病やまひに臥ふし給たまひ

命旦夕めいたんせきに迫せまり來くる 天あめの眞浦まうらの宣傳使せんでんし



兄の命はましませど 義理の中なる弟の  
 玉治別のわが夫 父の死に目に會はずして  
 空しく歸り給ひなば 何とて道に叶ふべき  
 神を敬ひわが親に 孝養盡すは子たる身の  
 務めと固く聞くからは 女房の身として棄てらりよか  
 兄の命に許されて 父の病氣を救はむと  
 聖地に參り眞心を 籠めて恢復祈りつつ  
 心の闇に包まれて 遠き路をばスタスタと  
 玉治別や國依別の 悲しき仲の兄弟に  
 父の様子を知らさむと 來りて見ればアルプスの  
 神の教の手下共 われを捉へて難題を  
 吹きかけ來る恐ろしさ わが身危ふくなりし時  
 忽ち木蔭に人の聲 空助さまとか云ふ人が  
 現はれ給ひて惡者を 追ひ退けて下さつた

あゝ有難し有難し 神は妾をどこまでも

労はりますか尊やと 涙に咽ぶ折も折

夫の聲によく似たる 其言靈に胸躍り

飛び付きたくは思へども 悪魔の征途に上りたる

玉治別はどこまでも 妻ではないとしらばくれ

千萬無量の悲しみを 心に包み玉ひつつ

事理明白な御教 世間の義理にからまれて

不覺を取りし妾こそは 實に淺ましき心かな

あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして

迷ひ果てたるわが心 直日に見直し聞直し

宣り直しませ三五の 教の道の大御神

妾は是より本國へ 夜を日に繼いで立歸り

父の看護を餘念なく 國依別のわが兄や

玉治別のわが夫に 代りて孝養盡します

何卒許させ賜へかし  
女心の【はした】なき  
今の仕業を大神の  
廣き心に見直して  
迷ひの罪を赦せかし  
假令天地は變るとも  
妾の心は何時まで  
今賜はりし御教を  
膽に銘じて忘れまじ  
神の隈手も恙なく  
早く歸らせ玉へかし  
あゝ惟神々々  
御靈幸はひましませよ

と樹木鬱蒼たる猛獸の猛り狂ふ山路を、一人スタスタ歸り行く。  
お勝は武志の宮の社務所に漸く歸り着いた。不思議や父の松鷹彦は、今日は何時もよりは氣分も好しとて、庭先の枝振りの良い松を眺めて、天の眞浦に介抱され乍ら、嬉しげにお勝の歸り來りし姿を眺めて居た。

（大正一一・五・二〇 舊四・二四 松村眞澄録）

第四篇 反復無常はんぶくむじやう

第一五章 化地藏ばけぢざう〔六八九〕

バラモン教けうの其その一派いつぱ アルプス教けうを樹立じゆりつして

高春山たかはるやまに巢窟さうくつを 構かまへて住すめる鬼婆おにばばの

鷹依姫たかよりひめが惡業あくげふを 言こと向むけ和やはし救すくはむと

三五教あななひけうに名なも高たかき 高姫たかひめ黒姫くろひめ兩りやう人は

鳥とりの岩樟船いはくすぶねに乘のり 意氣揚々いきやうやうと中天ちうてんに

雲押くもおし開ひらき分わけ上のほり 高春山たかはるやまの麓ふもとまで

二人ふたりは無事ぶじに着陸ちやくりくし 黄金こがねの草くさの茂しげりたる

胸突坂むなつきざかを攀よじ登のぼり 岩窟がんくつ竝ならぶ天あめの森もり

祠ほくらの前まへに休やすらひて  
天あまの瓊ぬほこ矛こを振ふるり廻まはし

言こと靈たま戰せんの最さい中ちゆうに  
テーリスタンやカーリンス

鷹たか依より姫ひめの兩りやう腕うでと  
頼たのむ曲まが津つに誘さそはれて

岩いは窟やの中なかに引ひき行ゆかれ  
音たより信いまも今いまに知しれざれば

二ふた人たりを救すくひ出いださむと  
言こと依より別わけの神み言こともて

龍たつ國くに別わけや玉たま治はる別わけの  
神かみの使つかひと諸もろ共ともに

遠とほき山やま路ぢを打うち涉わたり  
漸やうう此こ處こに津つ田だの湖うみ

龍たつ國くに別わけは北きたの路みち  
玉たま治はる別わけは湖こ水すゐをば

横よこ斷ぎり乍ながら進すすみ行ゆく  
國くに依より別わけの宣せん傳でん使し

鼓つづの瀧たきを右みぎに見みて  
神かみと君きみとに眞ま心こころを

盡つくす誠まことの寶たから塚づか  
峰みねを傳つたひて六ろく甲かふの

御みや山まを指さして登のぼり行ゆく。

國くに依より別わけは杖つゑを力ちからに巡じゆん禮れい姿すがたの甲か斐ひ々が々ひしく、  
六ろく甲か山さんの頂ちやう上じやう目め蒐がけて登のぼり行ゆくに路みち

の傍への枯草の中にスツクと立てる石地藏がある。

「ア、大變にコンパスも疲勞を訴へ出した。一つ此石地藏を相手に一服しようかなア。……オイ地藏さま、お前は何時も美しい顔をして慈悲の權化とも云ふ様に見せて御座るが、随分冷酷なものだなア。どこを撫でてもチツとも温味はありやしない。何程地藏だと云つても斯う蒲鉾の様に石に半身をくつつけて、半分體を出した所は、まるで磔刑に遇うた様なものだよ。今の世界惡の映像は、恰度お前が好い代表者だ。外面如地藏、内心如閻魔の世の中の型が映つて居るのだなア」

地藏は石から離れて浮き出た様に、ヒヨコヒヨコと錫杖を突いて、一二間許り歩み出し、

「オイ國依別、イヤ女殺しの後家倒しの、宗彦の巡禮上りの宣傳使、貴様の翫弄した女達に、今此處で會はしてやらうか。俺の惡口を言ひよつたが、貴様も随分悪い奴だよ。貴様こそ心に鬼を澤山抱擁し、外面は三五敎の宣傳使なぞと、チツとチャンチャラ可笑しいワイ。其様な者を言依別命が信任するとは、ヤツパリ暗がりの世は暗がりの世だ。盲目ばかりの暗黒世界だなア」

「コレコレ石地藏さま、否化地藏さま、お前はチツト言靈が悪いぢやないか。大方幽界で高歩貸でも行つて居るのだらう。中々娑婆氣があつて面白いワイ」  
「今の社會の奴ア、追々と澁とうなつて來やがつて、俺の商賣もサツパリ算用合  
うて錢足らず。あちらからも小便を掛け、こちらからも小便をかけ、まるで世界の奴ア、犬の様なものだよ。借る時にや尾を掉つて出て來るが、返せと言へば鬼  
權だとか何とか云つてかぶり付く、咬犬の様な奴ばかりだ。俺も仕方がないで、  
高歩貸をフツツリと斷念し、菩提心を起して石地藏になり、世界の亡者を助けて  
やらうと思つて、終始一貫不動の精神を以て、路の辻に鯨こばつて居れば、俺に  
金を借つた奴、借る時の地藏顔、濟す時の閻魔顔、惡魔道に落ちた報ひで、情な  
い、犬に性を變じて再び娑婆に現はれ、又しても小便をかけて通りよる。本當に  
人間と云ふ奴は仕方のないものだ。お前は高歩貸は苦めなかつたが、女は隨分苦  
めたものだのう。キット貴様も其報いで、今度は猫に生れ變るのは、閻魔の帳面  
にチヤンと記いて居たぞ。國依別と云ふのは娑婆に居る間の雅號だ。貴様の名は  
ヤツパリ竹公又の名は宗彦、右の腕に梅の花の斑紋があると云ふ事が記してある。

どうだ間違ひか」

「それはチツとも間違がない。併し冥土へ行けば美人は澤山居るだらうな」

「居らいでかい。しかし乍ら婦人同盟會が創立されて、第一、宗彦と云ふ奴が出

て來たら、集つて「かか」つて、血の池へブチ込んでやらうと云ふ事に、チヤン

と定まつて居るよ」

「お前は一體男か女か」

「それを尋ねて何にするのだ。若し俺が女だと云ふ事が分つたら、又何か地金を

出して註文でもするのだらう」

「誰がそんな冷たい奴に秋波を送る馬鹿があるかい」

「幽界に居る女は、誰もかれも氷の様な冷たい體ばつかりだぞ」

「お前は坤の金神の別名で、實に優しい神の權化ぢやと聞いて居つたが、違ふの

か」

「地藏にもイロイロの種類がある。俺は借る時の地藏顔、濟す時の閻魔顔と云つ

て善惡兩面を兼ねた活佛だ。地獄の沙汰も金次第、俺がお前に對し、柔かく親切



に持ちかけるのも辛く當るのも、みんなお前の心一つだ。善も悪も全部此地藏の方寸にあるのだ。昔から地藏（地頭）に法なしと云つて、天下は地藏の自由だ。馬鹿正直な、善だの悪だのと、俄上人になつて迂路付くものぢやない。なぜ生地其儘の正體を現はさぬのか」

「お前の様に人を三文もせぬ様に言つて了へばそれまでだが、これでも娑婆世界に於いては最優等の身魂を持つて居る神のお使だぞ」

「何は免もあれ、俺を背中に負うて六甲山の頂上まで連れて往つて呉れ。俺もこんな谷底に何時までも立ん坊になつて居つては面白くない。そこらの景色も見飽いて了つた。チツと世間を廣く見たいからなう……」

「それや事と品によつたら、負うて行つてやらない事もない。併し地獄の沙汰も金次第だ、金を幾ら出すか」

「俺は貴様の實地目撃する通り石の地藏だ、金があらう筈はないよ」

「そんなら止めて置かうかい。アタ重たい。此山坂を自分の體丈でも持て餘して居るのに、此上重量を追加しては堪つたものぢやないワ」

「貴様も割とは弱音を吹く奴だなア。そんな事で高春山の鷹依姫が歸順すると思ふのか。俺を山頂まで連れて行く丈の勇氣がなければ、どうせ落第だ。貴様の連れの玉治別は津田の湖水で、遠州、駿州、武州の爲に亡ぼされ、龍國別は鬼娘に喰はれて了つたぞ。後に残るは貴様一人だ。到底此言靈戦は駄目だから、俺を負うて上まで能う行かぬ位なら、寧ろ兜を脱いで、是から引返したがよからうぞ」

「何ツ、龍國別は鬼娘に喰はれたと。それや本當かい」

「それや本當だ。地藏（自業）自得だ」

「コレヤ石地藏、貴様は洒落てるのか。嘘だらう」

「誰が嘘の事を言つて、あつたら口に風を引かす馬鹿があるかい。玉治別は寂滅爲樂の運命に陥り、頭に三角の靈衣を被つて、たつた今やつて来る。マア暫く待つて居るが宜からう」

「國依別は「ハテナア」と手を組み大地にドツカと坐し、鎮魂を修し、自ら虚實の判断に心力を熱中して居る。」

「ハ、ハ、ハ、何時まで考へたつて、一旦國替した者が歸る氣遣ひはない。早く

俺の要求を容れないか」

「八釜しく云ふない。自分の體も自由にならぬ中風地藏奴。負うて行つてやるも、やらぬも、俺の考へ一つだ。今臍下丹田、地の高天原に八百萬の神を神集ひに集ひ、神議りに議らむとして、諸神を鎮魂にて招ぎまつり居る最中だ」

地藏は何時の間にか、なまめかしい美人の姿と化して了つた。

「サア國さまえ、妾はお前さまに娑婆で随分翱られたお市ですよ」

「ナニ、お市だ、馬鹿を言ふな。大方金毛九尾の奴狐め。俺を誑す積りだらうが、

そんな事に誑される國依別と思つて居るかい」

「妾は最早幽界の人間、お前も、何と思つてらつしやるか知らぬが、此處は六甲山ぢやない、六道の辻ぢやぞえ。よう考へて見なさい。そこらの光景が娑婆とは

スツカリ違ひませうがな」

「馬鹿を言ふない。何處に違つたところがあるか。グツグツ吐すと、狐の正體を現はしてやらうか」

「ホ、ホ、ホ、あの宗さまの氣張りようわいなう。腹の底から恐ろしくなつて來

たと見え、汗をブルブルかいて、あらむ限りの力を出して、空威張りして居らつしやるワ、そんなこつて、どうして鷹依姫が往生しますかい」

「往生さす、ささぬは此方の自由の権だ。女だてら我々の行動を、喋々と容喙する権利があるか」

「あつても無くて、妾は【妖怪】だから【容喙】するのが當然だ。お前さまは現界に居つた時から、澤山の女を【誘拐】しなさつただらう。それだから今度は【幽界】へ来て、反對に女から何も彼も【容喙】されるのは、過去の作つた罪業が酬うて來たのですよ、ホ、ホ、ホ、あのマア不快らぬさうなお顔……」

「エー放つときやがれ」

「放つとけと仰有つても、お前さまの様な悪黨は何程氣張つても佛にはなれませぬぞえ。鬼にもなれず、マア石地藏に小便をかけて歩く犬位なものだ。けれども幽界では顔丈は【人間】たる事を許される。それだから【人犬】と云ふのだ。」

「人犬番犬妻王」の馬と云つて妾を今まで馬にして來たが、今度は【妻王】の馬にしてあげるのだ。サア其處に四這ひに這ひなさいよ」

「どこまでも男をチヨン騷るのか。男の腕には骨があるぞ」

「女だつて骨はありますよ。細うても櫛の木、お前の腕は太く見えても新米竹の様な、中が空虚でヘナヘナだ。娑婆では腕を振廻して、こけ嚇しが利いただらう。

新米竹の竹さんと云つて、威張つて行けたが、幽界ではチツと様子が違ひますよ」

「エー雀の親方見たいに、女と云ふ奴は娑婆でも轉るが、幽界へ來てもヤツパリ轉るのかなア。雀女奴が」

「竹さんに雀は品よくとまる、とめて止まらぬ戀の道だ。あちらからも青い顔して細い手を出し、こちらからも細い手を出して、竹さん來い來いと招んで居る」

「あの厭らしい亡者の姿を御覽。それ芒原の彼方から、お前に翻弄された雀女が、澤山に頭を出してゐるぢやないか。チツとは思ひ知つただらう」

「オモイ知るも、軽い知るもあつたものかい。女なら亡者であらうが、化物であらうが、ビクとも致さぬ竹さん兼宗彦兼國依別命様だ。サアお市、氣の毒だが貴様ここへユウカイして來て呉れ。俺が一寸因縁を説いて、諒解の行く様にしてやる。ワツハ、。女と云ふ奴は化物でも氣分の良いものだワイ」

「お前は娑婆で、石灰竈の鼯のやうにコテコテ塗つた魔性の女や、化女、賣淫女、夜鷹なぞに、何時も現を抜かして、鼻毛を抜かれ、眉毛を數まれ、涎を垂らかし、骨まで蒟蒻の様に爲られて来た代物だから、化物は好い配偶だ。どんな奴でも構はぬ物喰ひのよい助作だから、ヤツパリ幽界へ来て其癖が止まぬと見える。娑婆から幽界へ、そんな糟を持越して貰つては、閻魔さまも聊か迷惑だらう。地藏顔してお前の巾着ばかり狙つて居る魔性の女は、幽界にも多數に居るから、御注文なら幾らでも召集して来ませうか」

「オイ一寸待つた。物も相談ぢやが、貴様一旦暇をやつたのだが、今度は一つ焼き直し、ドント張り込んで焼木杭に火が點いた様に、舊交を暖めたらどうだ。さうすれば貴様も澤山な女を集めて来て、修羅を燃やし修羅道へ落ちる心配はないぞ」

「ホ、ホ、ホ、自惚も良い加減にしたがよいワイナ。誰がお前の様なヒヨツトコから暇を貰ふものかいナ。暇を貰ふ所までクツついとる馬鹿があるものかい。懾り乍ら、お市の方から肱鐵を喰はして、鼻毛を抜いてお暇を呉れたのだ。三行半

は誰が書いたのだ。お前覺えがあるだらう』

「幽界へ来てまで、そんな恥を曝すものぢやない。俺ばかりの恥辱ぢやないぞ。女は温順なのが値打だ。一旦女房になつたら、假令夫が馬鹿でもヒヨッコでも、泥棒でも、どこまでも女としての貞操を盡すのが良妻賢母だ。それに滔々と女の方から暇をやつたなぞと、天則違反的行爲を自ら曝け出すと云ふ不利益な事があるか。閻魔さまに聞えたら、キツト貴様は冥罰を蒙るに定つて居るぞ』

「ホ、ホ、ホ、ホ、ガンザ力箒の様な男が、どこを押したらそんな眞面目くさつた言葉が出るのですかい。貴方はそんな事を云ふ丈の資格はありませんよ』

「ア、しようもない。石地藏や亡者女に妨げられて、思はぬ光陰を空費した。サア是れから高春山へ出陣せねばならぬ、そこ退け』

「退けと云つたつて、どうして退けませう。妾だつてア、云ふものの、ヤツパリ、假令三年にもせよ、お前と、夫よ妻よと呼んで暮した仲だもの、チツとは同情心が残つて居るのだから、お前も酷い女だと思はずに、腹の底をよく考へて下さらぬと困りますよ。此位な事に怒る様では、人犬たる資格はありませんぞえ。夫婦

喧嘩は犬も食はぬと云ふぢやありませんか。お前もあんまり夫婦喧嘩に角を立てて怒ると、外の人犬が見て馬鹿にしますよ。そこの女に小便を掛けさがし高利を借つては糞を掛けさがしたか……そいつア知らぬが、後家倒しの婆喰ひの人犬ぢやないか。お前に喰はれた後家婆アも、臭い顔して随分澤山に色欲道の辻に待つて居りますぜ。これからがお前の性念場だ。マア楽しんで行かつしやい。妾は夫婦の交誼でこれ丈の注意を與へて置く。何と言つても地藏（自業）自得だから諦めて行きなさい」

「俺は何時の間に幽界に來たのだらうかなア。オイお市、俺にはテンと顯幽分離の時期が分らない。貴様は知つて居るだらう。言つて呉れないか」

「オホ、々、々、分りますまい。お前がモウ此後七十年経つた未來に、斯うして妾に會ふのだよ」

「なあんだ。それならまだ大丈夫だ」

「お前は丙午の年だから、随分これから女を澤山に殺して、七十年後になれば今の何十倍と云ふ亡者が出て、歡迎會でも開くだらうから、苦しんで待つて居る



がよからう』

『お構ひ御無用だ。俺は楽しんで待つて居る。樂天主義の統一主義の進展主義の清潔主義を標榜する三五教の宣傳使だ』

『如何にもお前は畜生道へ【落轉】主義だらう。さうして現界で高春山を征服し、鬼婆に糞をかけられ、天の眞名井へ泣きもつて、吠面かわいて立歸り、他の宣傳使からドツサリ氷の様な冷たい水を打掛けられ、ア、これで清潔主義の實行だと喜ぶのだらう。折角人犬になつた魂を曇らして、再び蝮となり、人に最後屁をひりかけ、業を経て貂に進む、【進貂】主義を實行なさいませ』

『娑婆にある間は、どうしようとするやと俺の腕にあるのだ。お構ひ御無用だ。亡者は亡者らしく石塔の下へ蟄伏して、時々風が吹いたら首を突出し、糠團子でも喰て居れば好いのだ、マア暫く楽しんで待つて居れ。七十年未來になれば、俺の殺した女亡者に限り、全部統一主義を實行し、幽冥界に一つの國依別王國を建設するから、それまでにイロイロと世の持方の研究をして置くのだよ。其時は貴様を伴食大臣に登庸してやる』

「誰が、お前の部下になるものが一人でもありませんかい。エー娑婆臭い事を言ひなさるな」

斯かる所へ五六人の男、茨の杖を突き乍ら走せ来り、

「オイ三五教の……貴様は宣傳使だらう。俺は高春山のテーリスタンの部下の者だ。早く起きぬかい」

「ハハア、貴様は悪業充ちて幽界へ來せたのだなア。良い加減に改心せぬかい。

貴様等は何奴も此奴も獨身生活と見えるが、何程幽界へ來ても、女房は欲しいだらう。チツト使ひ古しでお氣に入らぬか知らぬが、俺のお古が一寸十打程此處にあるのだ。一つ手を叩けば「アイ」と言つてやつて來るのだ。「旦那さん、こんちは」と云つてお出でになるぞ。中にや随分素敵な奴もあるから、何れなつと選り取り見取りだ。一品が一錢九厘屋で御座い」

「オイ貴様は何寢惚けて居やがるのだ。辻地藏の前に寢轉びやがつて、シツカリさらさぬかい」

此聲に國依別は四邊をキヨロキヨロ見まはし、

「ハハア、なあんだ。夢を見て居つたのか……オイ貴様は何處の奴だい」

「俺は言はいでも知れた、高春山の鷹依姫様の御家來だ。貴様は唯一人高春山へ何しに行くのだ。此處は南の關所だぞ」

「ア、さうだつたか。マアゆつくり一服せい。相談がある」

「貴様に相談をかけられるのは、碌な事ぢやあるまい」

「其落ちつかぬ様子はなんだい。戦はぬ間から負けてるぢやないか、地震の神懸をしやがつて……チツと胴を据ゑないか」

「貴様は國依別のへボ宣傳使だらう。サア白状せい」

「アハ、ハ、ハ、天晴れ堂々たる天下の宣傳使だ。貴様の様な小童武者に、何隠す必要があるか。國依別命とは俺の事だ」

「ヤア貴様は竹公ぢやないか。何時やら俺の妹をチヨ口まかした曲者奴」

「ウンお前はお松の兄貴の常公だつたなア。言はば義理の兄貴だ。併し貴様もよく零落したものだなア。さうしてお松はどうなつたか」

「貴様餘程迂闊者だなア。俺の妹のお松は生意氣な奴で、俺と信仰を異にし、到

頭ウラナイ教の高姫の乾兒になりやがつて、高城山で松姫と名乗り、立派にやつてけつかるのだ。俺は心が合はないから行つた事がないが、中々俺の妹だけあつて善にもせよ、悪にもせよ、傑出した所があるワイ」

「何ツ、あの松姫がお松だと云ふのか。其奴ア大變だ。さう云へば何だか合點がゆかぬと思つて居たのだ。松姫は中々俺達とは違つて、今は三五教の錚々たる宣傳使だ。ヤツパリ俺に秋波を送る様な奴だから、代物がどつか違つた所があるのだな、アハ、ハ、ハ、」

「オイスんな所で惚氣を聞かしゃがつて、何だ、チツと確乎せぬかい」  
「羨ましいだらう。随分松姫は別嬪だぞ。知慧もあれば力もあり、愛嬌もあり、あんな奴ア、滅多にあつたものぢやない。俺もさう聞くと、松姫が一層崇高な人格者の様に見えて來たワイ」

一同は、

「ワツハ、ハ、ハ、」  
と笑ひ轉ける。甲、乙、丙、丁、戊、己の六人は遂に國依別に言向け和され、心

の底より國依別の洒脱なる氣品に惚込み、信者となつて高春山へ筒井順慶式を發揮すべく、がやがや囁きながら進み行く。

(大正一一・五・二一 舊四・二五 松村眞澄録)

## 第一六章 約束履行〔六九〇〕

高春山の中腹なる天の森の祠の傍に漸う登り着いた玉治別、空助、お初の三人は、周圍に暮列せる平岩に脚を休め乍ら、ひそひそ話に耽る。

玉治別「此處へ着いてから殆ど二時ばかりになるが、まだ龍國別も見えず、國依別も顔を見せないが一體如何したものだらうなア。先へ行つて居る氣遣ひは無い筈だ。此の森に落ち合ひ、一團となつて上ると云ふ計畫だから、マサカ約束を無視して一人上る筈もなからう。ア、遅いことだワイ」

空助「ナニ心配は要りませぬよ、臆て見えませう。噂をすれば影とやら、其の人

のことを云つてをると、ツイ來るものだ。聽て堂々と登つて來られるでせう」

玉治別「あの國依別にしても、龍國別にしても随分女難の相があるから、途中で

魔性の女にチヨ口魔化されて、肝腎の御神業を忘却して居るのではあるまいかな

ア」

空助「決して決して左様な御心配は要りません。津田の湖邊で別れた時には、

餘程の堅い決心の色が見えて居ましたよ。女に對しては何の交渉もありません。

枯木寒巖に倚る三冬暖氣無し程の堅家だから、屹度女なんかに目をくれるやうな

人物とは認められませぬワ」

玉治別「イヤ餘り安心は出来ません。何分元が元ですから、随分若い時は發展

したものです。大勢の前では石部金吉、金兜、梃子でも棒でも、女位に動かない

堅造のやうに見えて居つても、心の中の情火と云ふ曲者が煙を噴出すと、ツイそ

の煤煙に包まれて目が眩み途方も無い所へ脱線する虞のある代物です。教主言依

別命様は彼等が心情を御洞察遊ばして、出立の際にも、決して女にかかり合つて

はいけない、今度の言靈戦は汝等宣傳使の試練だと仰有つた位ですから、實に心

許もとない代物しろものですよ。鬼おにでも閻魔えんまでも美人びじんの顔かほを見て怒おこる氣遣きづかひはない。況いはんや人にん

間げんに於おいてをや。何なんと云いつても今迄いままでの經歴けいれきが經歴けいれきですからなア

空助もくすけ「此この連山れんざん重疊ちようたふたる山道やまみちに、そんな女をんなが迂路うろついて居ゐる氣遣きづかひはありますま

い。生物いきものと云いつたら猪しし、狼おほかみ、蛇へび、狐きつね、狸位たぬきくらゐなものでせう。人間にんげんと言いへばアルプス

教けうの連中れんちゆうが徘徊はいくわいしてゐる位くらゐなもの、私わたしは女をんなよりも案あんじるのは、アルプス教けうの集團しふだん

に出會でつくはし苦戰くせんに苦戰くせんを重ねかさね、其その爲ために時間じかんを費つひやして居ゐられるのではあるまいか

と思おもひます。大谷山おほたにやまも隨分ずぶん魔神まがみの多おほい所ところ、六甲山ろくかふざんも時々ときどきテーリスタンが部ぶ下かを率ひき

ゐて構かまへて居をる地點ちてんですから、それ等らに對手あひてになつてゐるかも知しれませんまい。昨さく

夜やの女をんなを虐いぢめたやうに、あの通とほり澤山たくさんな奴やつが徘徊はいくわいして居をるのですから、隨分ずぶんに苦

戰せんをやつてゐられるのでせうよ

玉治別たまはるわけ「それはさうと、あの祕密書類ひみつしよるゐに依よつて敵てきの配置はいちを覺さとり、間道かんだうばかり進すすん

で來くる筈はずだから、滅多めつたに敵てきに出會でつくはす筈はずはなからうと思おもはれます

空助もくすけ「さうだとすれば隨分ずぶん暇ひまの要いることだなア。併しかし此方こちらは船ふねに乗のつて眞直まつすぐに來き

たのだから、餘程よほど早はやいのは道理だうりだ。二時ふたときや、三時みとき遅おくれたつて寧むしろ當然たうぜんかも知しれます

まい

玉治別「我々は湖上に於ていろいろと時間をとりましたから、平均すれば向方の

方が早く此處へ到着してゐなければならぬのですワ」

斯る處へ蓑笠の影、霧の中よりポコポコと浮き上り登り来る。

空助「アー誰か登つて來ましたよ。大方龍國別様でせう」

玉治別は首を伸ばして見つめてゐる。追々近寄つて來る一人の男。

龍國別「ア、長らく待たしたでせう。思ひの外嶮しい山坂、それにいろいろの道

草を喰つて居たものですから、ツイ遅れました」

玉治別「ヤア結構々々、又谷底へでも沈澱したのぢやなからうかと、實は心配し

て居ました」

龍國別「國依別さまはまだお見えになりませぬか」

玉治別「まだ見えませぬワ、如何したのでせう」

龍國別「中々豫定通りには進めないものでしてなア。私も大變な面白いことに出

會つて來ましたよ」



と笠かさを脱ぬぐ。見みれば額ひたいを石いしで割わられた傷きず、

玉治別たまはるわけ「ヤア貴方あなたの額ひたいは如何どうなさつた。大變たいへんな傷きずぢやありませんか」

龍國別たつくにわけ「石いしに躓つまずき倒こけた途端とたんに、額ひたいを打うちました」

玉治別たまはるわけ「それは又また妙めうぢやなア。一割いちわり高い鼻はなを打うちさうなものだのに、如何どうして又また

その額ひたいを打うたれたのでせう」

龍國別たつくにわけ「ア、これは一寸ちよつと譯わけがあつて、明白めいはくに申まを上げ兼かねます。どうぞ此この事ことだけ

は堅かたい約束やくそくがしてあるのだから、聞きいて下くださいますな」

玉治別たまはるわけ「約束やくそくぢやありますまい。貴方あなたはアルプス教けうの部下ぶかに取り巻まかれ、頭あたまを

【こつ】かれたのでせう。折角せつかく三人揃そろつて、無疵むきずで、天晴あつぱれ勝利しょうりを得えて歸かへらうと思おも

つて居ゐるのに、負傷ふしやう者しやを出だしたと云いふことは實じつに殘念ざんねんだ」

龍國別たつくにわけ「イエイエアルプス教けうの連中れんちゆうには、一人ひとりも逢あうたことが御座ございませぬ。

道中だうちゆうは至極しごく無事むじ平穩へいおんでした」

玉治別たまはるわけ「無事むじ平穩へいおんの途中とちゆうに其その傷きずは又また如何どうなさつたのだ。吾々われわれは親子兄弟おやこきやうだいよりも

親密しんみつにして居ゐる仲なか、何故なぜ御隱おかくしなさるか」

龍國別「何うしても斯うしても秘密は秘密です。これ計りは私一生の間云ふことは出来ませぬ。もしも半口でも言はうものなら大變です。やつて來ますからなア」  
玉治別「やつて來るとは、そりや又何ですか。世界の鬼、大蛇、悪狐、醜女、探女を悉く言向け和さねばならぬ宣傳使、何がやつて來たところで怖ろしいものがある道理はない。怪體なことを仰有るのですな」  
龍國別「これは誓約がしてありますから、約束を破れば矢張違約の罪になります」

ワ

玉治別「ハ、ハ、ハ、ハ、エライ惚氣方だなア。途中に於て立派なナイスに出會し、夫婦の約束を結び、女の方からお前様の様な男らしい男、鼻の高い方は他の女に惚れられると困るから、傷をつけて置かうなんて、ナイスに頭を割らせ、さうして夫婦の誓約をしたのでせう。その代り貴方も女の小指位は預かつたでせうなア」  
龍國別「イヤもう迷惑千萬、ナイスと婚約を結ぶやうな、そんな氣樂なことですかい。大變な椿事が突發したのですよ。言ひ度いは山々なれど斯んなことを言ふと、鬼娘がやつて來ますよ」

空助「ハ、ハ、ハ、ハ、大谷山の谷底に巢を構へて居る鬼娘のお光に逢うて、血を吸はれたのだなア」

龍國別「メ、滅相な、そんなものに逢うたことはありませぬワ」

空助「貴方は宣傳使であり乍ら、我々を偽るのですか。偽りの罪は随分重いものですよ」

龍國別「約束を破つても罪になる。偽つても罪になる。エー仕方がない、實はお光と云ふ鬼娘に出會し、頭をこづかれ、血を二升許り吸ひとられ、何處ともなしに氣分がサツパリとしました。併し何となく意氣沮喪したやうな感じが致します。千里向ふでも私の耳は聞えるから、人に言つたが最後、生命を奪ると云ひました。私も男だから鬼娘の一人や二人は怖れませぬが、やつて來たら何とかして下さい

ますか」

玉治別「龍國別さま、御心配なさいますな。言靈を以て忽ち鬼娘を消滅させて了

ひますよ」

空助「萬一やつて來居つたなら、此の空助が足で踏み躪り降參させて呉れます。

御心配なさるな」

斯る所へ黒雲を起し、山麓より鬼娘、面ばかり現はし、ヌーヌーと雲と共に上つて来る。

龍國別「ヤアどうやら見覚えのある鬼娘がやつて来たやうだ。モシ空助さま、頼

みますよ」

空助「心配なさるな。貴方は早く言靈戦を始めなさい。其の他のことは、みんな此空助が御引受け申す」

と云ふ折しも鬼娘はグワツと耳迄引裂けた口を開き、舌をノロノロ出し乍ら、

鬼娘「龍國別の宣傳使は、此處へ来た筈だが、何處に居るかな」

空助「此處に確かたつた一人居る。さうして貴様は龍國別を探して何をする積り

だ。見つともない。小ぼけな角を生やし、大きな口を開けてやつて来たところで、

誰一人貴様に同情するものはありません。あんまり馬鹿にすな。貴様の顔と

相談して来い。男の尻を追ふのなら女らしいオチヨボ口をして来たなら如何だ。大

神樂のやうな無恰好な口を開けよつて、そないな顔を見ると大抵の男は、夜分に

は襲はれて安眠が出来はしないぞ。何故女らしく淑やかに化けて来ぬか

お光 『お前に用はない。俺は龍國別に堅い堅い約束がしてある。約束履行のために出て来たのだから、邪魔して下さるな』

空助 『アハ、ハ、ハ、何と物好きもあればあるものだな。コレ龍國別さま、何程ひとりたびで女に飢えて居ると言つても、あんまりぢやないか。般若の面みたやうな鬼娘と、なんぞ堅い約束でもしたのか』

お光 『堅い約束した證據には龍國別の額口を御覽なさい、俺の所有物と云ふ證據に石の刻印が捺してある筈だ。龍國別の生命は最早此方の物だ。邪魔をして下さるな』

空助 『二人の戀仲を、俺もさう野暮な生れ付きぢやないから、別に邪魔する積りぢやないが、さてもさても呆れたものだなア。生命までも斯んな鬼娘に賭けて、約束するとは餘りぢやないか。おまけに石の刻印まで捺して貰ふとは、何處までも徹底した戀愛だなア』

お光 『早く除いて下さい。俺は胸の火が燃えて来て居るから、お光狂亂のやうに

なつて了しまひますよ」

空助「アハ、々々、山家やまがに長ながらく蟄居ちつきよして居をつたので、芝居しばゐを見る機き會わいがなかつたが、一つ此處ここで其そのお光みつ狂亂きやうらんの演劇えんげきを、無料拜觀むれうはいくわんさして貰もらひたいものだなア」

龍國別たつくにわけ「オイお光みつ、昨日きのふの約束やくそくはモ一取消とりけしだ。誰たれが貴様きさまのやうな鬼娘おにむすめと堅かたい約束やくそくを結むすんでたまらうか。其場そのば遁れのがの遁にげ口上こうじやうだつた。貴様きさまも好いい馬鹿ばかだなア」

と空助もくすけの力強ちからつよを後楯うしろだてに徐々そろそろメートルを上げ出だした。

お光みつ「ヘン、偉えらさうに、空助もくすけが居をると思おもつて、お前まへは虎とらの威ゐを借かる奴狐どぎつねだ。欺だますことは上手じやうずだなア。この鬼娘おにむすめでさへも呆あきれて物ものが云いはれませぬワイ。併しかし乍ながら其方そちは取消とりけしても、此方こちらは取消とりけさぬのだ。何處どこまでも生命いのちを貰もらふから覺悟かくごをしなさい」

空助もくすけは足許あしもとのギザギザした石いしを一つ拾ひろひ、グツと握にぎつて、空助もくすけ「オイ、お光みつ、約束やくそくは履行りかうしてやらう。生命いのちも奪とらしてやらう。其代そのかはりに證しょう文もんは返かへして貰もらはねばならぬ。サア、此石このいしで貴様きさまの額ひたひに力ちから一杯いっぱい刻印こくいんを捺おしてやらう。これで再ふたび龍國別たつくにわけの身みの上うへに關くわんしては、毛頭まうとう苦情くじやうは申まをしませぬと言いふ證據しょうこだぞ。

サア早く凸凹を突き出せ

龍國別「お光、ざまア見やがれ。其の凸を空助さまの御前に提出するのだ」

お光「エー残念な、龍國別、お前も空助と年が年中歩いて居るのぢやあるまい。

又一人出る時もあらう。その時に約束を屹度履行するから、さう思つてゐらつし

やい

お初、小さい聲で、

お初「オホ、鬼娘のお光どの、私の顔を見覚えて居ますか」

お光は不圖六歳のお初の顔を見るなり、キヤツと叫んで白煙となり消えて了つ

た。今迄包んで居た黒雲は、高春山の吹嵐に拂拭されて四方に飛散し、山麓の谷

川の水までハツキリと見えるやうになつて來た。

空助「アハ、鬼娘と云つても脆いものだなア。到頭煙散霧消して了ひ居つ

た。ア、彼奴もこれで成佛しただらう。さア、モウ龍國別さま御安心なさい

龍國別「エライ御厄介をかけましたが、御「かげ」で助かりました」

玉治別「龍國別さま、随分奇抜なローマンスを見せて呉れたものだな。蓼喰ふ蟲

も好き好きとはよく言つたものだ」

龍國別「お前まで餘り人をひやかすものぢやない。俺の心もチツとは推量して呉

れ」

一同「アハ、ハ、ハ」

と聲を放つて敵地にあるを忘れて面白さうに笑ふ。

玉治別「時に、國依別はまだ來ないのかなア。又鬼娘と途中に狎戯いて居るのぢ

やなからうかな」

龍國別「斯う隙が要るからは何か一つの故障が起つたのだらう。彼奴も随分罪業

を積んで居るから、一人旅行は劍呑だ」

と語る時しも、國依別は意氣揚々として數人の男を伴ひ登つて來た。

玉治別「ア、國依別さまか、随分待呆けに逢うたよ。如何して居つたのだい」

國依別「大變な大事件が途中で勃發して、それが爲に時間が必要だのだよ。到頭

地獄の八丁目迄旅行して、昔の女房に包圍攻撃され困つて了つた。若い時から嬢

ア泣かしの後家倒し、刃物要らずの女殺しをやつて來た報いで、幽冥界に彷徨ひ



落ち込んだところ、合計十打ばかりのレコが一時に現はれて、百萬陀羅恨みの數々繰返し、俺も已むを得ず昔の事を思ひ出し、涎を澤山に繰返して居つたのだから、ツイ遅れて濟まなかつた。随分退屈であつたらうなア」

玉治別「別に退屈でも何でも無かつた。龍國別の奴、天下一品の鬼娘と堅い約束を結び、其の契約を履行せよと云つて、お光の鬼娘がやつて来て、今既に愁歎場の幕を下ろしたところだ。モ一足早く來ると面白い活劇が見られるところだつたよ。さうしてお前は一人で來る筈だつたのに、随分澤山に人間を伴れて居るではないか」

國依別「これは死んだ女房の亡靈が憑依した容器だ」

玉治別「假令亡靈でも、高春山の征伐が濟む迄女を伴れることは出來ないと云ふ規則ではなかつたか」

國依別「それは御互様だ。お前もお初さまを伴うて來ただらう。たとへ小供でも女は矢張女だ。龍國別も又鬼娘と途中に於て、何だか堅い契約を結んで一悶着を

【おつ】始めたと云ふではないか。俺ばかり責めるのはチツと慘酷だよ。此處へ

伴つれて來きて居をるのは、實際じつさいはアルプス教けうの部ぶ下かで、松姫まつひめさまの兄あにの常公つねこう迄までが  
出でて來きて居をるのだ。俺おれの戰利品せんりひんは先まづザツト斯こんなものだよ」  
お初はつ「ヤアヤア龍國たつくにわけ別くによりわけ、國依別くによりわけ、玉治別たまはるわけ、空助もくすけ、其他そのたの者ものども、これより妾わらはが作さく  
戰計畫せんけいぐわくを汝なんぢらに傳つたふる。暫しばしく沈黙ちんもくを守まもり、わが言葉ことばを謹聽きんちやうせよ」  
と子供こどもに似合にあはず、莊重せいじゆうな力ちからの籠こもつた聲こゑで呼よばはるにぞ、四人よにんは「ハイ」と答こたへ  
た儘まま大地だいちに平伏へいふくして宣示せんじを待まつ。

(大正一一・五・二一 舊四・二五 外山豐二録)

## 第一七章 酒さけの息いき「六九一」

アルプス教けうの假本山かりほんざんと聞きこえたる、高春山たかはるやまの山巔さんてんの岩窟がんくつに數多あまたの部ぶ下かを集あつめて、  
大自在だいじざい天大國別命てんおほくにわけのみことの神業しんげふを恢興くわいこうせむと、捻鉢卷ねちはちまきの大車輪だいしゃりん、心膽しんたんを練ねつて時ときを待まち  
居をるアルプス教けうの教主けうしゆ鷹依姫たかよりひめは、額ひたひの小皺こじわを撫なで乍ながら、長煙管ながきせるをポンとはたき、

股肱ここうの臣しんなるテーリスタン、カーリンスの二人ふたりを膝ひざ近く招まねき、口角こうかく泡あわをにじませ乍なら、

「これテーリスタン、カーリンスの二人ふたり、お前まへも好よい加減かげんに酒さけをやめたらどうだえ。どうやら大切たいせつなアルプス教けうの秘密ひみつ書類しよるゐを紛失ふんしつしてから、廻まり廻まりて三五教あななひけうの手てに入はいつて居をる様な感かんじがして仕方しかたがない。何程なにほど要害えうがい堅固けんこに固かためて居をつても、あの地圖ちづを見みられたが最後さいご、此本山このほんざんは没落ぼつらくするより仕方しかたがない。こんな危険きけんな場合ばあひに何時いつまで迄も酒さけばかり飲のんで、管くだを巻まいて居ある時ときぢやありませんまい。チツトしつかりして下くださらぬと此城このしろが維持もちませぬぞえ」

テーリスタンはヅブ六ろくに酔よひ、巻まき舌じたになつて、

「そんな事ことに抜目ぬけめのある様やうなテーリスタンは、へん、チツト違ちがひますワイ。あんまり天下てんかの勇士ゆうしを安やすく買かつて下くださるまいかい。私わたしも張はり合あひが御座ござらぬワ、なあ、カーリンス」

「オーさうともさうとも、年老としよりの冷水ひやみづと云いつてナ、冷水ひやみづをあびせ掛かけられると、折角せつかく酔ようた酒さけまでが醒さめて了しまふワ。俺達おれたちが酒さけを呑のむのは酔ようて管くだを巻まき、浩然かうぜんの

氣を養ふ爲だ。此きつい山坂を日に何回となく、上つたり下つたり耐つたものぢやない。偶高姫が乗つて來た飛行船を占領し、ブウブウとやつたと思へば深霧の爲に方向を失ひ、大谷山の横つ面に打つ付けて割つて了ひ、其時にアタ怪體の惡い、大切な肱を折り、漸く今舊のものになりかけた所だ。それでも時々物を云ひよつて、冷たい朝になるとツキツキと痛むのだ。これ文命を的にアルプス教の爲めに活動して居るのだ。酒の一杯や二杯飲んだつて、それがナナ何だい。鷹依姫の御大將、人の頭に成らうと思へば、マチツト大きな心にならつしやい。イチヤイチヤ云ふと誰も彼も愛想を盡かして、遁げて了ふぢやないか、ナア、テーリスタン」

「お前達はそれだから酒を飲ますと困るのよ。酒位はチツトも惜くはないが、後が八釜敷いので困ると云ふのだ。今にも三五教へ首を突込んだとか云ふ、豪傑の空助でもやつて來たら、それこそ大變ぢやないか」

「何、そんな心配がいりますか。それは老婆心と云ふものだ。まだ大將は中婆さんだから、中婆心位な所で止めて置いて呉れるといいのだけれど、餘り深案じを

なさるから、却つて計畫に齟齬を來し、鴉の嘴程することなす事が食違ふのだ。  
空助だらうが雲助だらうが、あんなものが五打や十打束になつて來たつて何が恐  
いのだ。そんな事で天下萬民をバラモン教乃至アルプス教へ、入信させて救ふ事  
が出来るものか」  
「お前達は今日にかぎつて、何時もの謹嚴にも似ず、教主の私に、反抗的態度を  
とるのかい」

「別に反抗も服従もありませぬワイ。心の欲する儘に酒が言はせて居るのだ。  
「辛抱して呉れ酒が言ふのぢや女房共」と云ふ冠句を何處やらで聞いた事がある。  
決して肉體が言つて居るのぢやありませんよ。酒が云ふのですから酒を叱つて下  
さい。酒と云ふものは好いもの……悪う……ヤツパリないものだ。ア、サーサ  
浮いたり浮いたり、瓢箪計りが浮き物か、俺達の心も浮物だ。三ぶん五厘に浮世  
を暮し、浮世トンボの樂天主義、これでなければ人間は長命は出來ないなア。お  
婆アさま、そんな小六ヶ敷い顔をせずと、チツトはお前さまも酒でも飲んで、雪  
隠の洪水では無いが糞浮になつて見たらどうだいなア」

鷹依姫は面を膨らし、一生懸命に二人を睨め付けて、

「お前達二人は此大勢の團體を、統率して行かねばならぬ役目でありながら、何といふ不心得の事だえ。お前達はアルプス教の教主を輕蔑するのかナ」

「どうでバラモン教の脱走組だから、支店や受け賣か或は意匠登録權侵害教だ、何處に尊敬する價値がありませんか。今迄は猫を被つて居つたが、肝腎の紫の玉

は高姫に呑んでしまはれ、黒姫と高姫は中々豪のものだから、針の穴からでも、出ようと思へば出るといふ魔力のある奴だ。彼奴がアーして神妙に百日も物を喰

はずに平然として居るのは、何か心に頼む所があるからだ。愚圖々々して居ると此館は三方から三五教に攻撃せられ、蟹の手足をもいだ様な、身動きもならぬ憂

目に逢ふのは目睫の間に迫つて居る。エーもう雪隠の火事だ。燒糞だ。お前の様な婆に相手になつて居つても末の見込がない。サア怒るなら怒つて見よ。棺桶に

片足を突込んだ婆と、屈強盛りのテーリスタン、カーリンスには到底齒節は立つまい、アハ、ハ、ハ、」

と徳利を口に當てガブリガブリと飲んで、右の手で自分の額を叩き、

「ナア、カーリンス、好う利く酒ぢやないか。婆の耳より餘程利きがよいぞ、オホ、アハ、アハ、」

と無性矢鱈にヤケ酒を煽つて居る。

其處へ六歳になつたお初が、御免とも何とも言はずツカツカと現はれ來り、

「小父さま、私にも一杯つがして頂戴な」

「ヤアお前は何處から來たのか。ホンに可愛い兒だなア。婆の顔を見てお小言を頂戴しながら酒を飲んでも根つから甘くない、子供でもよい、其可愛らしい手で

一つ酌いで呉れ。然し徳利が重いから落さぬ様にしてくれよ」

「小父さま、こんな徳利が重たいやうな事で、こんな岩窟へ一人這入つて來られますか」

「そらさうだ。お前は伶俐な奴だ。さうして一人來たのかい」

「イエイエお父さまに背負つて來たのよ。お父さまは今高姫、黒姫さまを引張りだし、鷹依姫とかいふお婆アさまを改心させ、テー、カーの兩人を乾兒にして遣らうと云うて、天の森で相談をして居たよ」

何、お前のお父さまが、俺を乾兒にして遣らうと言つて居つたか。あんな大將の乾兒になれば、世界に恐る可き者なしだ。チツト許りの酒を飲んでも愚圖々々言ふ様な大將に蝨の卵の様に死んでも離れぬと云ふ様な調子で隨いて居つては大變だ。ヤアこれで酒もチツトは味が出て來たやうだ。オイ婆アさま、此テ、カハ最早お前の部下ではない程に、勿體なくも武術の達人、湯谷ヶ嶽の空助さまの乾兒だ、いや兄弟分だ。サア、トツトと城明け渡して出やつせい。愚圖々々して居ると三五教の宣傳使が此場に現はれて、お前の土堤腹に大きな風穴を穿ち、其處から棍棒を通して、聖地へ擔いで歸るかも知れないぞ。足許の明るい間に、早くトツトと尻引つからげたがお前の得だらうよ、のうカーリンス」

何んとお前達は水臭い奴だなア。何處々々迄もお伴を致しますと誓つたぢやないか」

馬鹿だなア、さう言はなくちや、重く用ひて呉れないから、處世上の慣用手段として、言はば圓滑な辭令を用ひたまでだよ、のうテ、リスタン」

何んをよくお前達の心は變るものだなア」



「定つた事だ、時の天下に從へと云ふ事がある。何時迄も世は持ち切りにはならぬぞ。變る時節にや神でも變るのだ。呆けた事を言ふない。矢張婆だけあつて頭が古いなア。チツト古い血を出して新しい血と入れ替へて遣らうかい」  
といきなり拳を固めて叩かうとするを、お初は遮つて、

「これこれ小父さま、そんな亂暴してはいけませんぬ。お婆アさま、随分貴女も惡い奴を信用したものですなア」

「コラコラ子供の癖に何んと云ふ惡い事を云ふのだい。小父さまは斯う見えても時代に順應する、立派な文化生活をやつて居る新しい人間だぜ。餘り見損ひをし  
てくれない」

「小父さま、子供だから何を云ふか知れはしないよ。大きな男が學齡にも達しない子供を捉まへて、理屈を言ふのが間違つて居るよ、オホ、、、」

「ヤア空助親分のお嬢さまだけあつて、さすが偉いものだなア。…お嬢さま、どうぞ我々二人を、お父さまに好く言つて、可愛がつて下さいねエ」

「子供に大人が可愛がつて呉れと云ふのは、チツト可笑しいぢやありませんか、

妙めうなおつさんだなアア」

「お前まへ達たち二人ふたりは、ほんたうに空助もくすけの乾兒こぶんになるつもりかい」

「定きまり切きつた事ことだい、早はやく何處どこなと出でて行ゆけ。今いまに三五教あななひけうの宣傳使せんでんしが見みえたら、黒姫くろひめ、高姫たかひめをあんな處ところへ突つ込んで於おいては申譯まをしわけがない。……カールス、お前まへは此この場ばを監督かんとくし此婆このばはの見張みはりをして居をれ。俺おれは奥おくへ行いつて、高姫たかひめ、黒姫くろひめお二人ふたりさまにお願いねがひ申まをして、岩戸いはとから出でて貰もらふから、好いいか」

「ヨシヨシ呑のみ込こんだ、早はやく行いつてこい。愚圖ぐづぐづ々々づして居ゐると最早もはや難關なんくわんを突破とつぱして三五教あななひけうの宣傳使せんでんしが、二百三高地にひやくさんかうちとも云いふ可べき天あめの森もりにやつて來きて居ゐるのだから、開城かいじやうするなら氣きよう開城かいじやうする方ほうが後あとの利益たためだ」

と言いひ捨すてて、高姫たかひめ、黒姫くろひめを閉とぢ込こめた岩窟いはやの前まへに周章あわただしく驅かけり行ゆく。

(大正一一・五・二一 舊四・二五 谷村眞友録)

テーリスタンは密室前に現はれて、

「モシモシ私はテーリスタンで御座います。高姫様、黒姫様、御機嫌は如何で御座いますか」

「お前はテーリスタンだな。いつも我々を輕蔑して置きながら、今日に限つて其丁寧な物云ひは何事だい。大方三五教の宣傳使がやつて来たものだから、そんなお追従を云ふのだらう。なア黒姫さま、抜目のない男ぢやありませんか」

「イエ決してさうぢや御座いませぬが、どうも貴方の御神徳に心の底から感動しました。何卒早く出て下さいませ」

「出いと云つたつて、神様のやうに海老錠をかけて置いたぢやないか。お前は妾等二人を石室に入れた積りか知らぬが、高姫大明神、黒姫大明神の結構な御扉ぢやぞエ、何と心得て居る。大幣でも持つて来て十分に被ひ清め、お供へ物を澤山と奉つて冠装束で天津祝詞を奏上し、岩戸開きの舞を舞はぬ事には、此女神さまは滅多に出はせぬぞエ」

テーリスタンは鍵を以て、ガタガタ云はせながら石の戸をパツと開き、

「サア何卒お出まし下さいませ」

「ア、有り難う、サア、高姫さま出ませうか」

「黒姫さま、何を云ひなさる、お前さまは呆けて居るのか。コレヤコレヤ、テーリスタン、貴様は人の住家の戸を勝手に開けよつて、誰の許可を受けたのだ。家宅侵入罪で訴へてやるがどうだい」

「高姫さま、さういちやつかずに、御頼みぢや、出て下さいな」

「出て呉れいと頼むなら聞いてやらぬ事もない。今日はお供へ物も、祝詞も免除してやらう。實は妾も一刻も早く、こんな暗い所へ居りたい事は無い事は無いのだ。サアサア黒姫さま、お前さまから先に出なさい。大分此間から出たさうだつたから」

「先生からお先へ出て下さいませ。あまり失禮ですから」

「そんならお先へ御免蒙りませう。長らく御厄介になりました。サアもう此處まで出た以上は、神變不思議の紫の玉に、如意寶珠の夜光の玉を呑み込んだ此高姫、假令何萬人の豪傑攻め來るとも、フンと一つ鼻息をしたら飛び散つて仕舞ふ位な

ものだ。これから鷹依姫を一つ言向け和してやらうかなア」

「貴女はお腹は空きませぬか。大分にお瘠せになりましたな。テ―は心配ですワ」

「百日や二百日食はいでも瘠るやうな高姫とは些と違います。イヤ瘠たのぢやない。體を細くして置いたのだよ。サアサア テ―リストン、案内をしなさい、婆アの傍へ」

「イヤ、もう最前からカーリンスと二人酔つて管をまいてまいて、まき潰した所

です。もはや我々は三五教の信者ですから安心して下さい」

「お前のやうな者が信者になれば、安心所か、益々氣をつけねばなるまい。誰に

許されて三五教の信者になつたのだい」

「私はお初さまに頼みました」

「お初さまて誰の事だえ」

「五つ六つのちつぽけな娘の子です。貴女を岩窟から救ひ出さねばならぬと云つて唯一人子供【だてら】やつて來たのですよ」

「さうしてお前達は其子供に降参したのかい」

「ハイハイ何處ともなしに御神力が備はつて居るので、止むを得ず降參をして貴女をお救ひ申したのです」

「何と偉い子供もあればあるものぢやなア。子供に大人が助けられるなんて昔から聞いた事がない。時節と云ふものは結構なものだな」

「高姫様、それで世が逆さまになつて居ると、神様がお筆にお示しになつて居るぢやありませんか」

「黒姫さまは暫く沈黙して居なさい。言葉尻を捉まへられちや却て不利益ですよ。女と云ふものは成る可く喋舌らぬ方が高尚に見えて宜敷い、併し妾は例外だ。何うしても率先して云はねばならぬ役廻りだから……これこれアルプス教の教主どの、長らく結構な岩窟ホテルに逗留さして頂きまして、日々御馳走を根つかから頂戴致しますせず、御親切の段有りがたくお禮申上げませぬワイ」

「別に山中の事として御馳走も御座りませず、テーリスタンやカーリンスに申付け、三度々々、相當の食物をお上げ申すやう命令して置きましたが、何うせお氣に召すやうなものは上げられませぬでしたらう」

「コレ婆アさん、自分の責任を我々に轉嫁するのかい。私がそつと隠して高姫さまや黒姫さまに進上しようと思へば、隼のやうな目でジロジロと私を睨みつけ、さうして水一滴、飯一粒やつてはならない。斯うして置けば、高姫がカンピントンになるだらう。都合よく干からびた時に、腹に呑んだ紫の玉も如意寶珠も剝り抜いて取ると云つたのでは無かつたのではないか。今となつて、そんな卑怯な二枚舌を使ふものぢや無いワ。なア、カーリンス、俺の云ふ事は間違ひはあるまい」

「オ、さうとも さうとも、俺達にさへ「けち」けち云つて酒も碌に呑まさない事は無い、悪黨婆アだから、どうしてあれだけ憎んで居た高姫さまや黒姫さまに、飲食物を差上げる筈があらうかい」

「お前達は何と云ふ嘘を云ふのだ。私を八方攻撃喰はして困らす積りだな」

「定つた事だ。大勢の人を困らせて置くとその罪障が出て来て、自分も又困らねばならぬ事が出来致すぞよ、と三五教の神様が仰有つた。神が表に現はれて善と悪とを立て別けると云ふのは此事だ。現にお初さまはまだ年は六つだが、尊い神様のお生れ代りだ。此神様に聞いて見れば善惡正邪が一遍に分るのだ……私が悪い

ですか婆が悪いですか判断して下さいな」

「お婆アさまもあんまり良い事はない。テリスタンもカーリンスもあまり善人でもありませんよ。早う改心をしなさい。改心さへすれば皆元の善人になれますよ」

テー、カーの二人は顔を眞赤に頭を掻いて俯む。斯かる所へ表口より、宣傳歌を歌ひながら、龍國別、玉治別、國依別を先頭に、力強の空助、其他六人のアルプス教の信者を従へ、どやどやと這入つて来る。

玉治別「ヨー、貴女は高姫さま、黒姫さま、ヨウ、マア無事で居て下さった。我々は言依別命様の内命を受けて、漸く三方より當山に攻め登り、言靈戦に向つたのです。あゝこれで結構だ。此方は湯谷ヶ谷の空助さまと云つて、實は時置師神様の御變名、大變なお世話になつたのですワ」

「それはそれは皆さま御苦勞でした。よう来て下さった。空助様とやら、玉治別さまが「いかい」お世話になられたさうです。私から厚くお禮申上げます」

「皆様よくこそお越し下さいました。時にこの婆アさまはまだ改心せないのかな」



「サアお婆アさま、モウ斯うなつては我を張つても駄目ですよ。何も彼もすつかり懺悔して誠の心に立ち歸り、結構な神様の生宮として、此世を清く麗しくお暮しなさい」

とお初の小さき唇より、何となく底力のある聲にて極めつけられ、さしもに頑固な鷹依姫も涙をハラハラと流し、遂には聲を放つて其場に泣き伏しにける。

お初「サア、これからは高姫さまだ。お前さまはウライナイ教を樹てて素盞鳴尊様に反對をして居つた時、秋山彦の館に立ち入り、冠島の寶庫の鍵を盗み出し、如意寶珠の玉を奪ひ取つて呑み込んだその罪で、こんな岩窟へ長らく閉じ籠められ、苦しんだのですよ。何程負けぬ氣になつて空元氣を出しても矢張辛かつたでせう。

今妾の前にその玉を吐き出しなさい。さうして又、昔竹熊と云ふ悪神が居つて、八尋殿へ龍宮城の使神を招待し、芳彦の持つて居つた紫の玉を取つたが、竹熊の終焉と共に死海へ落ち込んだ十個の玉の中で、この玉ばかりは汚されず、中空に飛んで自轉倒島へ落ちて來た玉ですよ。それをこの鷹依姫が手に入れて、それを御神體としてアルプス教を樹てて居つたのだが、其玉をお前さまは又呑み込んで

仕舞つたぢやないか。腹の中に何程玉があると云つても、さう云ふ悪い心で呑み込んだのだから、少しも光が出ない。サア私が此所で出して上げよう。如意寶珠の玉は素盞鳴神様に御返し申し、紫の玉は鷹依姫さまに返し返してお上げなさいませ」

「ハイ仕方が御座いませぬ、如何したら呑み込んだ玉が出ませうかなア」

「心配は要りませぬ。私が今樂に出してあげませう」

と云ひつつ、高姫の腰を一つエ、と聲かけ打つた機に、ポイと口から飛んで出たのは紫の玉である。もう一つ左の手で腰を打つた機に飛んで出たのが如意寶珠の玉であつた。高姫はグタリと疲れて其場に倒れる。

「高姫さまは斯う見えても心配は要りませぬ、暫く休息なされば元氣は元の通りになります。サア龍國別さま、貴方は如意寶珠を大切に預つて聖地へお歸りなさい。鷹依姫さま、紫の玉は貴方の持つて居たものだ、何うか受取つて下さい」

「私も最早改心致しました以上は玉の必要は御座いませぬ。何卒これを聖地へ献上致したう御座います。私も白状を致しまするが、私には唯一人の倅が御座いました。その倅が極道者で近所の人に迷惑をかけたなり、喧嘩をする、賭博はうつ、

女に【ずぼる】、妾が意見をすれば「何、親顔をしてゴテゴテ云ふな」と撲りつける、終の果には親をふり捨てて、何處ともなく姿を隠して仕舞ひました。極道の子は尚可愛とか申しまして、況して一人の天にも地にもかけ替へのない倅、も一度會ひたい事だと一生懸命に神様にお願ひ致し、とうとうバラモン教に入信し、遂にアルプス教を樹てる事になつたので御座います。妾のやうな不運なものは世界に御座いませぬ」

「さうしてその倅の名は何と云ふ方でしたか」と玉治別の問ひに、

「ハイ、今は如何なつたか行方は分りませぬが、顔の特徴と云へば一割人より鼻の高いもので御座いました。そして名は龍若と申します。偉いまあ極道で親に心配をかけよつたが、今頃はどうして居る事か、アア」

と袖を絞る。玉治別は不審さうに、  
「コレコレ龍國別、お前も龍若と云つたぢやないか。そして一人の母があると話した事があるなア。何處やら此婆アさまに目許、鼻の高い具合がよく似て居るや

うだ。もしや此婆アさまぢやあるまいかな」

龍國別は両手を組み、ウンと吐息しながら涙をホ口ホ口と流して居る。

お初「鷹依姫の倅は三五教の宣傳使龍國別に間違ひはない。親子の對面させるために、神が仕組んで當山へ差し向けられたのです。龍國別の改心に免じ、鷹依姫の罪を赦して上げよう。龍國別の宣傳使、昨夜古き社の前にて汝の逢うた女は妾の化身であつたぞや」

龍國別は無言の儘両手を合せ、嬉し涙にかき暮れる。鷹依姫は涙を拂ひ、

「ア、其方は倅の龍若であつたか。ヨウ、マア改心して下さつた。立派な宣傳使になつたものだ。もう是限り母も改心するから、何卒妾の罪をお詫して下さい」

「母様で御座いましたか、お懐かしう存じます」

「お前、額の疵は如何なさつた。矢張人に憎まれて怪我をしたのぢやないかな」

「工、」

龍國別は此額の疵によつて、身魂の罪をすつかり取拂はれ、水晶の身魂と生れ變れり。其徳に依り親子の對面を許したのである。決して争ひなどを致したので

はないから、鷹依姫御安心なさるがよからう。何時まで云うても果しかなければ、サア皆さま、一緒に天津祝詞を奏上し、感謝祈願の詞を捧げて、聖地へ一同うち揃うて参りませう」

との言葉に一同ハツと頭を下げ、口を嗽ぎ、手を洗つて天津祝詞を奏上し、宣傳歌を玉治別の音頭に連れて高唱する。

（大正一一・五・二一 舊四・二五 加藤明子録）

（昭和一〇・六・五 王仁校正）

）））））））））））

靈界物語 第二一卷 如意寶珠 申の巻

終り